このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

ソフトウエア レビュー

2006 年度のソフトウェア・レビューをお届けする。

来年初頭を目標に、Windows の新バージョン VISTA の β リリースが試用できるようになった。VISTA では、フォントの JIS 第三・第四水準漢字や国語審議会表外漢字字体表への対応など、今後に大きな影響を与える実装が行われる予定である。また、中国語用のフォントも、Unicode の拡張領域 A, B に対応するものが収録される予定である。これらの変化は、多漢字環境対応へのハードルが一気に低くなることを意味し、ソフトウェア側も、サロゲートペアを含む Unicode へのより高度な対応に迫られるだろう。従来からこれらに対応していた Mac OS X は Intel 化という別な意味での大変化のただ中である。そこで、今号では「OS・フォント」という、やや変則的な枠を設定してみた。

また、Chinese Writer8 が実装の先鞭を付けた大修館書店『中日大辞典』は、今後の電子辞書の勢力地図に大きな影響を与えるだろう。これについては本誌所収の中国語 CAI 研究会の協力記事もあわせてご参照いただきたい。

去年、「Shift-JIS コードの呪縛から解き放たれるべき」と書いたが、来年は Unicode に第三・第四水準漢字を載せた黒船がやってくる年になるのか？　要注目である。

Contents

OS・フォント	Windows Vista & Office 2007	千田　大介	126
	フォント	千田　大介	130
	Windows Vista の日本語フォント環境	清水　哲郎	135
	Intel Mac	師　茂樹	138
アプリケーションソフト	一太郎 2006&ATOK2006	山田　崇仁	139
	WWW ブラウザ	上地　宏一	141
	EmEditor Ver.6	山田　崇仁	145
	Chinese Writer 8	金子　眞也	147
	「いきなり中国語」 1980 円教材ソフトは「使える」か	田邉　鉄	149

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❖ OS・フォント

Windows Vista & Office 2007

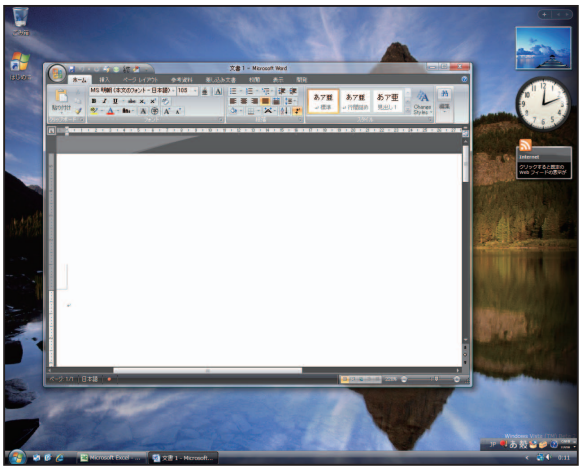
千田　大介

❑ 大きく変わる Windows・Office 環境

Windows Vista と Office 2007 は、2007 年初頭の発売が予定されている。Windows としては 2002 年の XP 以来 5 年ぶり、Office は 2003 以来 4 年ぶりのメジャー・バージョンアップということになる。これまで、2・3 年おきにアップグレードを繰り返していたのに比して、だいぶん間が空いた。

Windows Vista と Office 2007 における最大の変化は、ユーザーインターフェイスである。特に Office の変化は「過去 10 年で最大」とされており、直感的に操作できるよう、リボン・ギャラリー・ライブプレビュー・ミニツールバーなどの新操作体系が導入された。筆者が試したところでは、一般的な操作であれば慣れるとこちらの方が便利で速そうだが、例えば Word で組み文字や割注などを使う場合、クイックアクセスツールバーにショートカットを追加する以外の方法が見つけられずに難儀した。Windows Vista のインターフェイスも大きく変わっているので、新 Windows・Office 導入直後はとまどうユーザーが続出するだろうし、情報教育関係者にとってもたいへん頭が痛い問題である。

Windows Vista + Word 2007



ここでは例によって、一般の PC 雑誌でも頻繁に取りあげられているインターフェイスやセキュリティなどの一般的な機能面についてはこれ以上の深入りを避け、特に多言語・多漢字機能に絞ってレビューすることにしたい。

なお、本レビューで試用したのは、Windows Vista Beta2 + Office 2007 Beta2 である。いずれも正式リリース前の評価版であるため、最終的な製品版では変更される可能性があり、また、Office 2007 の Windows XP など他のバージョンの Windows 上での動作については些細な検証をしていないので、ご承知おき頂きたい。

❑ 対応言語の増加

Windows の多言語機能は、Windows XP + AppLocale ユーティリティでほぼ完成されたと言って良かろう。Windows Vista の多言語機能も基本的には Windows XP のそれを踏襲しており、劇的な変化は認められない（ただし、Vista 版の AppLocale はまだ提供されていない）。

Vista でも使用する言語は、XP などと同様に、コントロールパネルの「地域と言語のオプション」で設定する。インターフェイスの切り替えと、Unicode 未対応プログラム用のデフォルト言語切り替えに分かれているのも同様である。このうち、インターフェイス言語は「キーボードと言語タブ」の「言語の管理」で「言語パックセットアップアドイン」を開いて切り替えることになる。Windows 2000/XP では β 版にあったインター

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

フェイス切り替えダイアログが、日本語製品版では省略されていたから、Windows Vista でも別途多国語版が発売されるものと思われる。

多言語面での最も大きな変化は、対応言語の増加である。東アジア関連の言語では、以下の言語に新たに標準対応し、IM と対応フォントが登載されている。

言語	フォント
イ（彝）語	Microsoft Yi Baiti
ウイグル語	※アラビックフォントを使用
チベット語	Microsoft Himalaya
モンゴル語	Mongolian Baiti

いずれの言語も、テキストサービスでは言語名の後に「(PRC)」と表示されており、中国の少数民族言語として追加されたことがわかる。

彝語は中国西南地域の少数民族である彝族の言葉で、ロロ文字（彝文字）を使用する。ロロ文字は GB18030 に定義されているので、従来から SimSun-18030 などによって扱うことができたが、インプットメソッドがなかった。モンゴル語は従来モンゴル共和国のキリル文字による表記のみに対応していたが、Vista では中国内モンゴル自治区などで使われているモンゴル文字にも対応した。チベット語については、Unicode にグリフが定義されており、また入力ソフトも存在したが、Vista では標準で登載されるようになった。

このように、Unicode（GB18030）によってグリフが定義されていたものの、インプットメソッドやキーボードレイアウトが登載されていないため「出来るが使えない」レベルにとどまっていた各言語が、Vista ではいよいよ実用段階に突入したのである。

このことは、少数民族言語や中央アジア史・チベット文化などの研究や情報交換を進める上で大きな意味を持とう。

■ Office のチベット語・モンゴル語対応

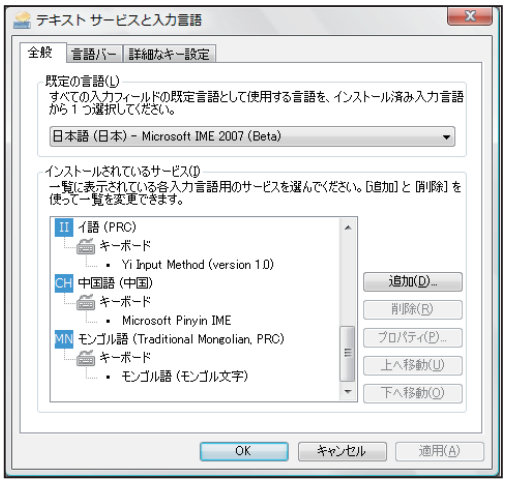
チベット語・モンゴル語の文字表記はともに表音文字が結合するという特色を持ち、しかもモンゴル語は縦書きで左から右に行送りされるため、これらの言語を扱うためにはアプリケーションソフト側の対応も必須である。筆者が検証したところ、対応情況は以下の通りであった。

ソフト	文字結合	縦・左→右書き
ワードパッド	○	×
Word 2007 β	○	○
Excel 2007 β	○	×
Access 2007 β	○	×
PowerPoint 2007 β	○	○
Publisher 2007 β	○	×

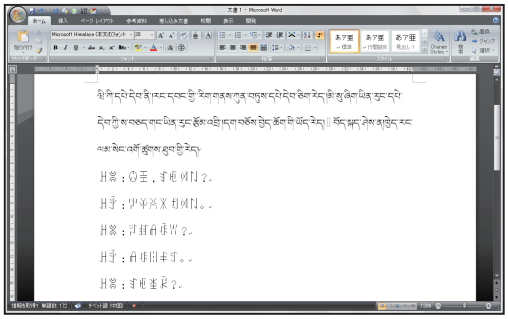
順に見ていこう。Windows 標準登載のワードパッド（Vista 版ではバージョン 6）は、そもそも縦書きに対応していないため横書きになってしまうが、文字結合自体は問題なく表示される。

Office アプリケーションはいずれも文字結合に対応している。Office では、「Office の多言語設定」で使用する言語を設定する必要があるが、これは従来と同様、テキストサービスを追加すれば自動で設定されるので、ユーザーが意識する必要はない。

Windows Vista 入力言語の追加

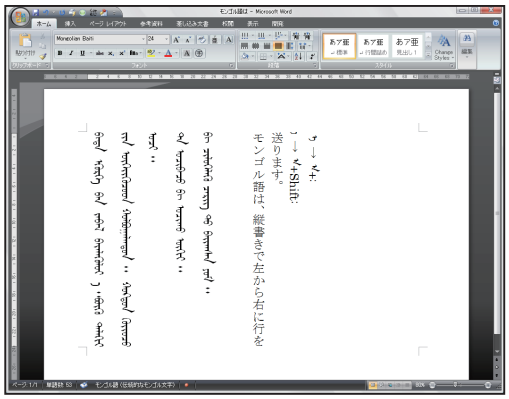


Word 2007 でチベット語・彝語

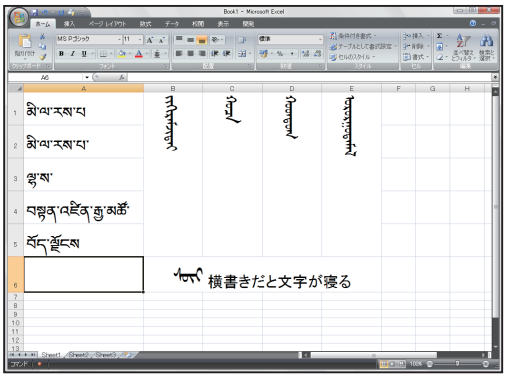


一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。



Word 2007 で縦書きモンゴル語

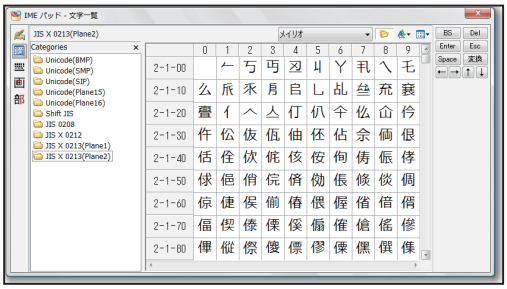


Excel2007 でモンゴル語・チベット語

Excel でモンゴル語を縦書き表示するには、セルのプロパティで文字列を -90 度回転させることになる。縦書きを選ぶと、文字の結合が崩れてバラバラになってしまう。

Access でも結合文字が表示できる。ただし、筆者がざっと試したところでは、フォームでの縦書き表示には未対応であった。また、テーブルの編集中、セルを移動すると、彝・チベット・モンゴルの各 IM が自動で標準 IME に切り替わるという問題が発生した。

MS IME2007 IME パッド



Publisher は以前から Word と並んで多言語対応に優れたソフトであった。しかし、2007 では縦書き左→右送りに対応できていない。メニュー体系も Office 2003 までと大差なく、他の Office アプリに比べていかにも気合いが入っていない。多言語対応 DTP としては他の追随を許さない機能をもっているソフトであるだけに、正式版での改善を期待したい。

PowerPoint は、結合文字のみならず、テキストボックス単位での縦書き・左→右送りに対応しており、モンゴル語プレゼンテーションであっても問題なく作成できる。

Word も同様に、結合文字・縦書き左→右送りに対応している。モンゴル語が使えるようになったところで、技術的ハードルが最も高いと思われる、日本語・モンゴル語混在縦書きドキュメントの作成を Word で試してみた。例えば日本語の中に一行だけモンゴル語が混じる分には見かけ上問題がないものの、日本語の間に複数行にわたるモンゴル語が入る場合、その部分だけ行送り方向を変えなくてはならなくなる。それがいかなる方法で実現できるのかを試してみた。

Word では、セクションごとに縦書き・横書きなどを設定できる。しかし、縦書きの行送り方向については、ページごとにセクションを区切って変更することはできたが、ページ途中でセクションを区切って行送り方向を変えると、下書き表示しかできなくなりプリンタへの出力もエラーを起こしてしまい、しかも Word のリボンやタブ（メニューバー・ツールバーに相当）が消失する、という障害が発生した。

このため、Word で日本語・モンゴル語混在ドキュメントを作成するにはテキストボックスを使って配置するしかなく、かなり手間がかかる。

なお、モンゴル語の Web ページは、縦書き左→右送りに対応したブラウザがないため、現時点では表示が出来ない。Word でも Web ページとして保存すると、横書きに変換されてしまう。PDF などを使うしかなさそうだ。ちなみに、IE7 はチベット文字・モンゴル文字の文字結合には対応しており、横書きであればモンゴル語も表示できる。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❏ IME

■ MS IME 2007

Windows Vista および Office 2007 には、マイクロソフトの日本語 IME の新版が登載されている。この IME 2007 で注目されるのは、IME パッドの機能拡張である。従来の IME パッドは、Unicode の BMP にしか対応していなかったが、2007 版では SMP・SIP・Plane15・Plane16 など、複数字面の文字を表示できるようになった。このほか、Shift JIS・JIS 0208・JIS X 0212・JIS X 0213（Plane1・2）にも対応しており、使いやすさが格段にアップしている（p.129 図参照）。

■ ピンイン IME 10.0

MS ピンイン IME は、2003 版でかなり大きく変化した後だけに、Vista 登載の 10.0 版には目立った変更点は見受けられない。IME パッドもあいかわらず BMP のみの対応であるし、プロパティの設定項目にも変化は無い。変換辞書のブラッシュアップ程度の変更にとどまっているようだ。

■ 新注音 IME 10.0

Windows Vista に登載された漢字言語 IME の中で、最も画期的な進化を遂げたのがこの新注音 IME である。Unicode の CJK 統合漢字 Ext.A・Ext.B の変換に対応したのである。

Ext.A・Ext.B の変換は、プロパティの「General」タブ「Character set」以下で設定する。「Include the characters of Extension-A」・「Include the characters of Extension-B」をチェックすればよい。ちなみに、その下にある「Include the characters of the HKSCS」をチェックすると、香港政庁外字が変換できるようになる。別途、フォントレビューで詳述するが、Windows Vista には香港政庁外字対応版 MingLiU も登載されている。

実際に変換すると、変換候補の一覧で Ext.A は緑、Ext.B は赤で区別して表示される。実際文書作成では、BMP の文字を優先的に使いたいことがしばしばあるので、この表示方法は直感的でわかりやすく、拡張領域の異体字の誤入力を相当に減らしてくれると思われる。

ただし、Ext.A・B の文字が全て変換できるかというと、必ずしもそういうわけでもなく、試したところでは Ext.B の「類」は変換候補に見あたらなかった。それでも、大半の文字が登録されているのは確かであり、拡張領域の漢字の入力が相当楽になることであろう。もっとも、ある一般的な文字の異体字を検索する場合はともかく、あの珍妙な漢字揃いの拡張領域の文字をいきなり発音で入力しろといわれても、出来る人は少ないことだろう。新注音と同時に、字形をコード化した入力方法である新倉頡 IME も Ext.A・B に対応したので、倉頡を覚えるのが拡張領域漢字入力の一番の方法かもしれない。まれにしか使わない Ext.A・B のためだけに倉頡コードを覚えるというのも、また割に合わない話ではあるが。

❏ Office 2007

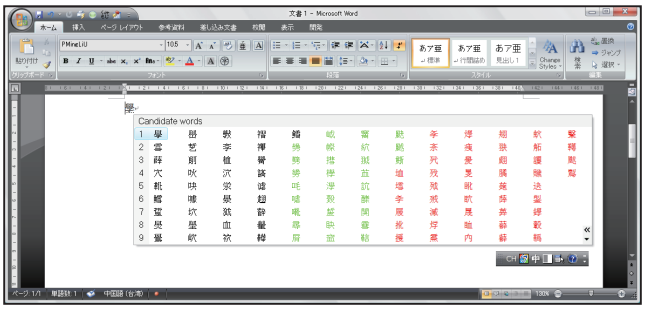
Office 2007 の各アプリケーションは、上記以外にも細かな変更が加えられている。

Word では、ステイタスバー左の言語表示をクリックすることで「言語の選択」が呼び出せるようになった。これは直感的でわかりやすい改善である。

ルビがらみでは、「フィールドコードの表示 / 非表示」を選択しても、ルビのフィールドコートが表示されなくなった。このため、ルビのフィールドコードは、右クリックメニュー「フィールドの編集」から操作しなくてはならない。従来はルビのフィールドコードを表示させ、

```
{EQ ¥* jc2 ¥* “Font:ＭＳ 明朝" ¥*
hps8 ¥o¥ad(¥s¥up 7(ルビ),漢字)}
```

新注音 IME10.0



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

この「¥up」を「¥down」と書き換えることで、ルビの位置を漢字の下に移動させることが出来るのだが、2007 の場合は、右クリック「フィールドの編集」→「フィールドコード」で「¥down」に書き換えた後、更に右クリック「フィールドコードの表示」で括弧内のルビ文字列のフォントサイズを指定してやらなくてはならず、非常に手間がかかるようになった。

また、筆者の Vista 環境では、日本語以外の自動ルビ機能が働かず、中国語のピンイン・注音ルビが振れない。ただし Windows XP 環境では問題なくルビが振れるようなので [1]、Vista 乃至筆者の環境設定に問題があるのかもしれない。

期待はずれだったのが Excel で、VBA は相変わらず Unicode 未対応で、JIS 外字を入力すると「?」化けする。ユーザーのレガシーマクロへの配慮かもしれないが、このことが多言語・多漢字処理上のユーザビリティを非常に損なっているので、いいかげんに対応してほしいものだ。

❑ 終わりに

以上のように、Windows Vista・Office 2007 の多言語・多漢字機能は、従来の Windows XP・Office 2003 のそれを基本的に継承しつつブラッシュアップしたものであると言えよう。言語機能そのものは従来と変わらないが、Ext.B への標準対応、中国の少数民族言語への対応などの面で大きな進展がある。特に Office 2007 については、革命的なインターフェイス変更に対応するリスクに見合った機能アップがあるかどうか、ユーザーを悩ますことになそうだ。

なお、Windows Vista 登載フォントのうち、日本語フォントについては清水氏のレビューを、それ以外のフォントについては以下の「フォント」レビューをご参照いただきたい。

注

[1] 清水哲郎氏の検証による。

フォント

千田　大介

❑ Windows Vista の中国語フォント

■ Ext.B フォントの標準化

2007 年 1 月のデビューがアナウンスされている Windows Vista では、漢字フォント環境がかなり大きく変わっている。日本語に関して、JIS X0213 が公式にサポートされることは、一般のパソコン誌でも報じられており、本誌でも清水哲郎氏のレビューに詳述されている。

一方、中国語フォントについても、Windows Vista では大きな進展が見られる。とりわけ注目されるのは、Unicode の CJK 統合漢字 Extension B 対応フォントの標準登載である。登載されるのは、簡体字系の SimSun-ExtB と、繁体字系の MingLiU-ExtB である。両者とも、漢字は Ext.B 領域のみを収録している。

「Windows Vista & Office 2007」レビューで触れたように、注音 / 倉頡 IME 10.0 は Ext.B 領域の漢字変換に対応しているので、これでようやく、実用的な Ext.B 使用環境が標準で提供されるようになったと言えよう。

■ 香港政庁外字対応 MingLiU

台湾版 Windows 標準の繁体字明朝体フォント、MingLiU は、バージョン 6.01 になり、従来の MingliU・PMingLiU のほか新たに MingLiU_HKSCS が TTC パッケージに加えられて、いずれも、CJK 統合漢字＋ Ext.A の漢字を収録する。また、HKSCS とは Hong Kong Supplementary Character Set、すなわち香港増補字符集、いわゆる香港政庁外字のことで、広東語表記用の漢字 5,000 字弱が従来は外字フォントとして無償配布されていた。Windows Vista の MingLiU_HKSCS フォントには、CJK 統合漢字・Ext.A に加えて私用領域の U+E000 以下に香港外字が標準収録されている。香港政庁外字は、外字であるだけ

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

に、日本語環境での運用に何かと困難がつきまとったが、これで問題なく利用できるようになった[1]。なお、注音 / 倉頡 IME 10.0 は香港外字の入力にも対応している。

Big5 系フォントとしては、このほか Microsoft JhengHei（微軟正黑體）・DFKai-SB（標楷體）が収録されている。収録漢字は、前者が CJK 統合漢字＋ Ext. A、後者が CJK 統合漢字のみである。繁体字系のゴチックフォントが標準登載されるのは喜ばしいことであるが、Windows 2000/XP では台湾版 Windows 標準の「標楷體」フォントが他の言語版に登載されなかったことを考えると、日本語製品版では β 版に収録されたこれらのフォントが省略される可能性もある。

■ GB18030 対応フォント

Vista に標準搭載される GB 系フォントは以下の通り。いずれも GB18030 対応になった。

- SimSun & NSimSun
- SimHei
- KaiTi
- Microsoft YaHei
- FangSong

こちらも、これまでの例からすると、日本語製品版に登載されるのは、SimSun と SimHei だけになるのかもしれない。

なお、以上は Windows Vista β 2 に基づくため、製品版とは異なる可能性があることをお断りしておく。

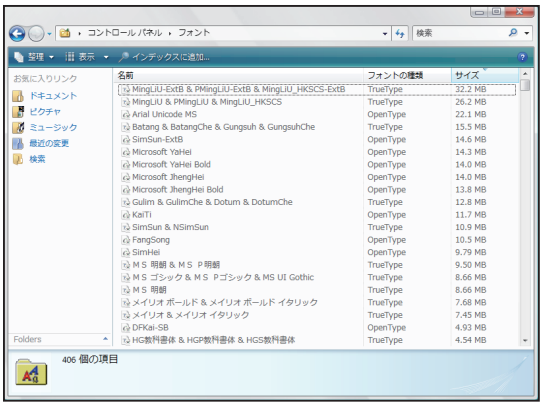
❏ OpenType フォント

■ モリサワ OT パレット

2 万字ものグリフを定義する Adobe Japan 1-5 は、従来のヒラギノに加えて、モリサワ、更にはダイナフォントの安価なフォントパッケージなどが昨年来相次いで発売され、特に組み版の現場では InDesign などの OpenType 対応 DTP ソフトが増加しつつあるので、今後対応が進むことだろう。しかし、Windows 環境のワープロやエディタでは Adobe Japan 1-5 フォントを持っていても Unicode と重なるグリフしか扱えないため、折角組み版が対応しているそれらの文字

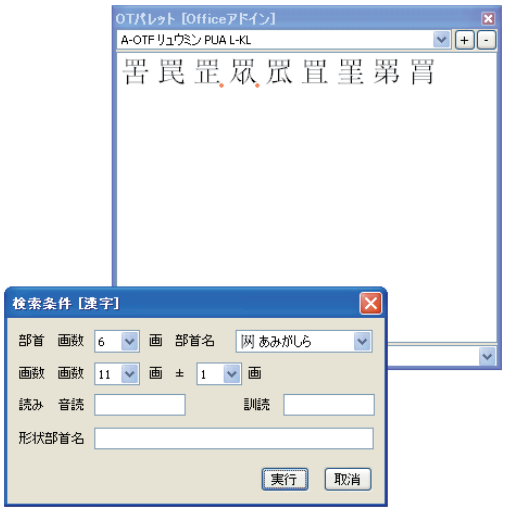
MingLiU-ExtB（IME 2007 の IME パッドで表示）

SimSun-ExtB（IME 2007 の IME パッドで表示）



Windows Vista の漢字フォント

OT パレットで漢字検索



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

をデータ入稿で利用できない、という問題もある。

モリサワが発売したOTパレットは、一般のWindowsアプリでもAdobe Japan 1-5を使えるようにするユーティリティである。Word・Excel用の文字検索アドインであり、パッケージには専用OpenTypeフォントがバンドルされる。

OTパレットをインストールすると、Word・Excelのメニューバーに「OTパレット」メニューが追加される。

OTパレットでは、部首・画数・音読み・訓読みなどを指定することで、手軽に漢字を検索することができる。特に、画数検索ではプラスマイナス一画の曖昧検索オプションが用意されているが、このアイデアは秀逸である。また、特殊記号や丸付き数字や括弧付き数字を検索したり、漢字を指定してその異体字を検索したりするようなこともできる。動作は極めて軽快である。

Officeが対応していないAdobe Japan1-5の文字を、OTパレットではどうして扱えるのか、その秘密は同梱の専用フォントにある。同梱のフォントはリュウミンPUA L-KL・ゴシックMB101 PUA Rの2書体で、いずれもUnicodeに定義されていないAdobe Japan 1-5のグリフを私用領域に並べたものである。それぞれ、リュウミンPro5 L-KL・ゴシックMB101 Pro5 Rに相当する。

しかし当然のことながら、これらのフォントで作成されたテキストは、そのままではOpenType対応DTPソフトに読み込むことはできない。従って、OTパレットのテキスト書きだし機能でテキストファイルを出力することになる。

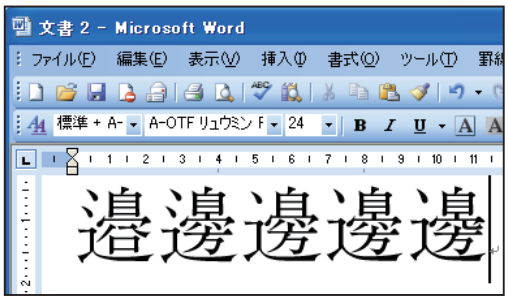
ところが、この機能で書き出されるテキスト（正確には、外字部分の書式）は、モリサワのDTPソフトであるMC-B2対応形式であり、InDesignで読み込むことができない。しかし、テキストを置換処理して、InDesignテキストに加工し読み込むことは可能である。OTパレットは私用領域に割り振られた文字を

```
\_cCID番号
```

という形式ではき出す。InDesignタグ付きテキストでのCID番号による文字の指定方法は以下の通り。

```
<pstyle:><clig:0><pSG:CID番号>
<cotfcalt:0>■<clig:><pSG:>
<cotfcalt:>
```

OTパレットがはき出したテキストをこの形式に置換し、InDesignテキストのヘッダを記述してBOM無しUCS16-LEで保存、ファイルをInDesignの編集画面にドラッグすればよい。なお、■の部分には制御文字、U+001Aが入る。InDesignの文字パレットから、Unicodeに定義されない丸付き数字を入力[2]してテキストに書き出してエディタなどで開き、ヘッダ・制御文字などをコピーして使うのが楽だろう。Perlなどで変換フィルタを作るのも難しくない。



Wordからテキスト書き出し

↓

OTパレットテスト

```
\_c13407\_c14235\_c14236\_c14237\_
c14238
```

↓

InDesignテキストに加工

```
<UNICODE-WIN>
<pstyle:><clig:0><pSG:13407><cotfca
lt:0>■<clig:><pSG:><cotfcalt:>
<pstyle:><clig:0><pSG:14235><cotfca
lt:0>■<clig:><pSG:><cotfcalt:>
<pstyle:><clig:0><pSG:14236><cotfca
lt:0>■<clig:><pSG:><cotfcalt:>
<pstyle:><clig:0><pSG:14237><cotfca
lt:0>■<clig:><pSG:><cotfcalt:>
```

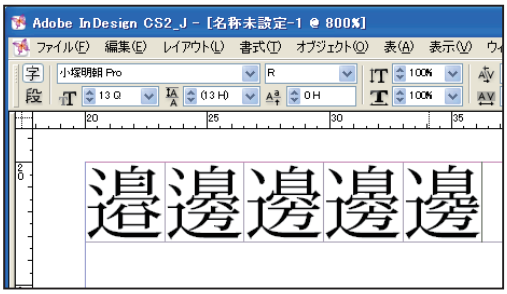

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。


```
<pstyle:><clig:0><pSG:14238><cotfca
lt:0> ■ <clig:><pSG:><cotfcalt:>
```

↓

InDesign にドラッグ＆ドロップして流し込み



これを実際に活用する際には、執筆者が OT パレットで作成したドキュメントを Word ファイル入稿し、編集担当者がデータをテキストに出力・整形して DTP、というワークフローになろう。その際にネックになりそうなのが、15,750 円という価格である。モリサワの高品質なフォントが同梱されていることを考えれば、決して高い価格ではないのだが、Windows の一般向けソフトとしては少々高く感じられるのも事実である。

ともあれ、Unicode に定義されない異体字や記号をよく使う、あるいは軽快な漢字検索ソフトを求めている人にとっては、充分に購入の価値はあろう。

❑ ピンインフォント

中国大陸で使われている中国語発音のローマ字表記法、いわゆるピンインを Windows で使用することは、しばらく前まで色々と困難がつきまとった。Unicode 環境の普及とともに、独自コード系中国語入力ソフトを購入しなくても、Times New Roman や Arial などのフォントを使って、声調符号付きピンインを表記できるようになった。しかし、それらのフォントでは、基本的に欧文のアクセント記号、マクロン・アキュート・キャロン・グレイブを声調符号の代わりに用いることになるため、声調符号としては長さが短く、視認性に劣るという問題があった。

近年、フリーの Unicode 対応声調符号付きピンインフォントがいくつか公開されたことで、こういった問題は基本的に解決されている。そのようなフォントには以下の二種類がある。

●東方ピンイン

http://www.toho-shoten.co.jp/tohopinyin/index.html

東方書店が中国語辞書編纂の際に制作したピンインフォント。無償ダウンロードが可能で、非商用にかぎり自由に利用できる。実際のフォント開発はヒラギノをデザインしたことで知られる字游工房が行っている。OpenType フォーマットでセリフ系の W3・W5、それとゴシック W5 の 3 書体がセットになっている。

ê・n・m + 声調符号は外字として収録されている。このうち「ŃńŇň」の 4 文字は Unicode のラテン拡張 A に定義されているのだが、そのコードポイントは使われていない。また、ASCII コード互換ではなく、「#$%&*」などの符号が省略されている。

●WG Pinyin

http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/

筆者が GNOME プロジェクトのフリー TryeType フォント「Bitstream Vera Fonts」をベースに、改造・配布するフォントである。上記サイトの「ダウンロード」以下から入手できる。提供される書体は、セリフ系「WG Pinyin Serif」とサンズセリフ系「WG Pinyin Sans」の二書体。それぞれ、欧文フォントに設定された基本版のほかに、簡体字中国語フォントに設定された「＋」版が用意されている。両者ともに収録グリフ・デザインは同じだが、Unicode のラテン拡張 B 領域を欧文フォントで表示できないソフト対策として＋版を作成している。簡単に言えば、Excel 等でピンインを崩れることなく表示するために使うものである。収録グリフは Unicode に準拠しており、Unicode に定義されていない ê・n・m ＋声調符号の一部は収録していない。

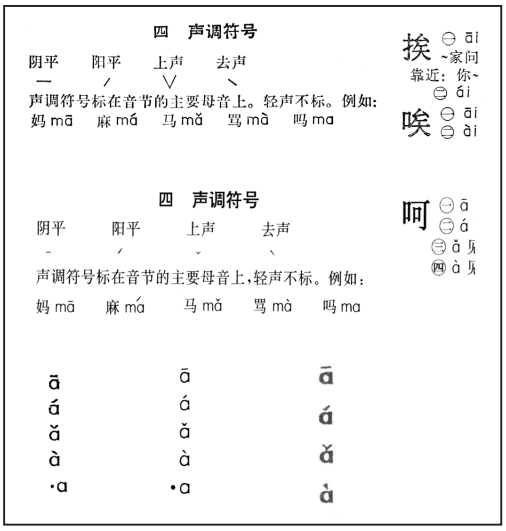
フリーソフトであり、商用・非商用を問わず自由に利用できる。またフォントファイルの改編・再配布も、フォント名を変更するという条件を充たせば許可されている。

■ ピンインフォントの書体差

ところで、筆者はピンインフォントの開発に当たり、

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。



さまざまな辞書のピンイン書体（上：《新华字典》1971 年修訂重排本　中：同 2000 年新版　下左：《现代汉语词典》1983 年第二版　下中：同 2005 年第五版　下右：《漢語大詞典》索引）

例えば二声の声調符号は左が太いのか、右が太いのか、それとも太さは一定なのか、三声声調符号の角度は何度か、といった細かなルールがないものか、声調符号付きピンインの規範書体を定めた規格を探してみたが、どうしても見つけられなかった。

印刷物では、ピンイン標記のルールを定めた《汉语拼音方案》は引用する辞書によって書体がまちまちであるし、《现代汉语词典》・《新华字典》なども版による違いが大きい。二声の声調符号は、太さが一定の場合もあれば出だしが太くなっている場合もある。いずれにせよ、細かな書体規範が定められているとは到底思えない。

もっとも、筆者にしてもフォントのデザインの必要から細かいところが気になっただけで、常識的に考えれば、声調符号の要諦は線に明確な角度を付けること

ピンインフォントの書体サンプル

TohoPinyin W3	：	ēīéíěǐèì
WG Pinyin Serif	：	ēīéíěǐèì
TohoPinyinG W5	：	ēīéíěǐèì
WG Pinyin Sans	：	ēīéíěǐèì
Times New Roman	：	ēīéíěǐèì

にあるのだから、そこまで細かくデザインを決める必要が無いのが当然である。

むしろ深刻なのは、ê・n・m＋声調符号などのグリフが GB18030 でも完全には定義されていない点である。中国の学校教育にも取り入れられており、外国人中国語学習者にとっても不可欠なピンインに対するこのような冷遇は、少々問題ではないか。

このような背景もあり、東方ピンインと WG Pinyin とを比較すると、声調符号のデザインに細かな違いがある。例えば、東方ピンインでは二声声調符号は左が太く右が細い。WG Pinyin は逆であるが、この方が中国語二声の発音を直感的に表現できると考えた上での判断である。

また声調符号の左右幅は、東方ピンインではアルファベットごとに調整されているが、WG Pinyin ではいずれも同一幅になるようにデザインしている。i＋声調符号を比較すると、違いがはっきりわかろう。語句のピンイン表記を印刷する場合は幅が調整してあった方が見栄えがいいのだが、教室で映像を投影して提示する場合は、幅が一定していた方が視認性が高い。WG Pinyin で三声声調符号の谷部分の厚さを抑えたのも、同様の理由による。

つまり、東方ピンインは辞書のピンイン表記用にデザインされた印刷用に最適化されたフォントであるが、WG Pinyin は Web 上や教室での教材提示時の視認性をも考慮してデザインされていることが、これらの相違を生んだ所以であろう。

ともあれ、これらのフォントによって、声調符号付きピンインの利用がより手軽になっているので、是非とも積極的に活用していただきたい。

注

[1] MingLiU_HKSCS では、外字ファイルが設定されていても、香港政庁外字部分が優先表示される。しかし、MingLiU・PMingLiU などとは一つの TTC パッケージになっているがフォント自体は別扱いなので、中央研究院外字や香港中文大学外字などの利用には支障が無い。なお、Vista の外字の扱いは、基本的に XP と同様であるようだ。

[2] 漢字の異体字や丸付きかななどを書き出すと、異体字番号タグ / 丸付き指定タグ＋親文字というマークアップになってしまうので注意すること。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

Windows Vista の日本語フォント環境

清水　哲郎

❏　一新される日本語フォント環境

長らく Longhorn の開発コードで知られていた Windows の次期バージョン Windows Vista における日本語フォント環境が一新されることは、既に昨年の本誌第 6 号において秋山陽一郎氏が速報されている [1] 通りだ。今回は、この 6 月に一般向けに Windows Vista のベータ 2 日本語版がダウンロード公開された [2] のを受けて、その概要をお伝えしたい。

なお、本稿は同ベータ版ならびに執筆時点で入手できた資料 [3] に基づいているため、製品版においては細かな仕様が変わる可能性がある点にはご留意いただきたい。

■ JIS X 0213:2004 に対応

Windows95 時点で JIS X 0208（JIS 漢字）、Windows98 時点で JIS X 0208 ＋ JIS X 0212（補助漢字）と拡張してきた Windows の日本語フォント環境だが、Windows Vista ではあらたに JIS X 0213:2004 の文字セットに対応して、（X 0212 との重複を除く）約 900 字の漢字が追加された結果、標準添付される「MS 明朝」や「MS ゴシック」などの 5 書体にはおよそ 1 万 3 千字の漢字が収録されることとなった。

現行の Windows XP の「MS 明朝」などと、フォントのバージョン・収録されるグリフ数・対応する JIS 規格を比較すると、以下の表の通りとなる。

JIS X 0213 への対応によって、あらたに図 1 のような漢字を Unicode 対応のアプリケーションで利用できるようになる。

フォント名	Windows XP	Windows Vista
MS 明朝	Ver.2.31 17,807 グリフ	Ver.3.00 19,197 グリフ
MS ゴシック	Ver.2.30 20,458 グリフ	Ver.3.00 22,089 グリフ
対応する規格	JIS X 0208 JIS X 0212	JIS X 0208 JIS X 0212 JIS X 0213

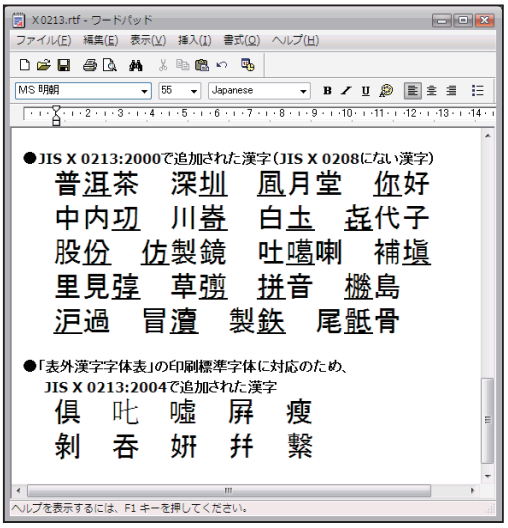


図 1　Vista の「MS」フォントで利用できるようになる漢字（例）

■ 印刷標準字体を採用

Windows Vista における新しい日本語フォント環境をめぐっては、「MS」フォントの漢字のうち、一部の字体が「印刷標準字体」に変更されるというエポック・メイキングな出来事も無視できない。

「常用漢字表」に載っていない漢字（表外漢字）については標準字体が決められていなかったため、商業印刷物とパソコンなどのフォントとの間で字体の異なる漢字が散見し、とくに出版関係者などからこれを問題視する声があがっていた。そこで、2000 年に国語審議会が『表外漢字字体表』を答申 [4]。JIS 側もこの新しい国語施策に対応すべく、2004 年に JIS X 0213 を改訂して、その例示字体として『表外漢字字体表』に示された「印刷標準字体」を採用した。こういった一連の流れを受けて、マイクロソフト社でも Windows の標準日本語フォントに「印刷標準字体」を採用するに至ったものだ。

同社資料によると、JIS 第一・第二水準漢字のうち、96 文字の漢字の字体が「印刷標準字体」に変更されているという（図 2）。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

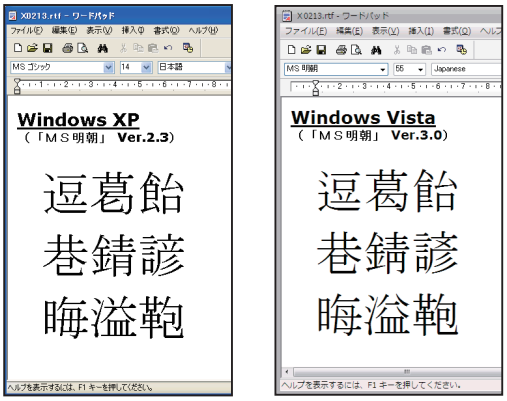


図２　Vista 添付の「MS」フォントで字体の変わった漢字の例

注意すべきは、この変更があらたな日本語フォントの追加という形ではなく、従来と同じ「MS 明朝」や「MS ゴシック」というフォント名のまま行われる点だ。この字体の変更に伴い、例えば、「かつしかく」と変換入力した時、Windows XP 環境では下がカタカナの「ヒ」の「葛」字体で表示・印刷されるのに対して、Windows Vista 環境では「葛」字体で表示・印刷されることとなる。あるいは、Windows XP 環境で「葛」字体で作成した文書を Windows Vista 環境で開くと、この漢字が「葛」字体で表示・印刷される「文字化け」現象となる。1983 年に行われた JIS 漢字改訂に伴って発生した「新 JIS・旧 JIS 問題」を彷彿させるもので、Windows のシェアの高さや「MS」フォントの利用率などを考えると、社会に対する影響力はけっして小さくないと考えるが、この点については「印刷標準字体」採用によるメリットと字体変更に伴う一時的な混乱を天秤にかけた時、許容範囲内として容認する向きが多いようだ。

■ マイクロソフト社の移行支援策

一般的にはメリットが大きいと見られる「印刷標準字体」への対応だが、字体が変わる漢字が使われている地方公共団体などでは相当の混乱が発生すると予想されるし、これらの字体を区別するためにわざわざ文字鏡などの特殊な仕組みを採用してきた研究機関や図書館などにおいても相応の注意が必要となるだろう。

そこで移行に伴う混乱を少しでも和らげるためにマイクロソフト社では以下のような移行支援策を予定している。

①中期的支援策

Windows Vista 向けに 122 文字 [5] の字体を従来と同じにした「MS」フォントをダウンロード提供する（フォントのバージョンは 2.5）

②長期的支援策

従来の Win32 に代わる新しい API である WinFX 提供予定の OS（Windows Vista など）向けに 122 文字の字体を切り替え可能な OpenType 形式のフォントを提供する（フォントのバージョンは 3.2）

①は 2 種類の字体のいずれかを利用する、排他的な策であるのに対して、②は既に Illustrator や InDesign などで採用されている字体切り替えと似た仕組みで、WinFX や OpenType に対応したアプリケーションにおいて動的に 2 種類の字体を切り替えできる策だ。マイクロソフト社では将来的に後者を根本対策と考えていると見られる。

❏ 新しい液晶画面用フォントを搭載

Windows Vista では、標準的な日本語フォントである「MS」フォントが JIS X 0213:2004 に対応することに加えて、もう 1 つ、「メイリオ（Meiryo）」と称するまったく新しい日本語フォントが添付される点も注目される [6]。

この「メイリオ [7]」はマイクロソフト社が開発したスクリーン上のフォントを見やすくする技術である「ClearType」に対応し、もっぱら液晶画面上での横書き文書の可読性（読みやすさ）を追求して開発されたサンセリフ系（ゴシック系）フォントで、レギュラーフォントとボールドフォントの 2 種類が提供される。

Windows Vista ベータ 2 に添付する「メイリオ」フォントの仕様は以下の通り。

- Ver.0.98
- 収録グリフ数：20,684 字 [8]
- JIS X 0213:2004 対応
- 印刷標準字体採用

従来の「MS UI Gothic」に代わり、Windows Vista 日本語版ではこの「メイリオ」がメニュー表示などのユーザ・インタフェースに採用される [9]。試しに

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

Windows Vista 上の Internet Explorer 7（ベータ版）の表示フォントを「メイリオ」に変更してみたところ、図 3 のように可読性にひじょうにすぐれていることを確認できた。

また、同フォントは仮名や漢字などの日本語と半角の英数字とのバランスにも相当の注意が注がれて開発されている由なので、Word を用いて、仮名漢字と英数字が交じった文書を「メイリオ」フォントだけで作成してみたが、確かに日本語文章中の半角の英数字が浮いてしまうこともないし、とても読みやすい。「MS」系のフォントとは元々、目的を異にするフォントのため、1 つの文書中に「メイリオ」と「MS」系のフォントを混在させるのは好ましくないだろうが、単独で使用する分には「メイリオ」はなかなか使い勝手のよさそうなフォントである。

図 3　Internet Explorer7 の表示フォントを「メイリオ」に変更してみたところ

注

[1] 秋山陽一郎「Unicode 対応フォント」（本誌第 6 号所収）

[2] Windows Vista 日本語版ベータ 2 の一般向け公開は 2006 年 6 月上旬から同月いっぱい行われた。

[3] マイクロソフト社プレスリリース「Windows の次期バージョン Windows Vista(TM) において日本語フォント環境を一新」（**http://www.microsoft.com/japan/presspass/detail.aspx?newsid=2353**）
同社プレスセミナー資料「Windows Vista における JIS2004 対応について」
「小形克宏の「文字の海、ビットの舟」――文字コードが私たちに問いかけるもの」（INTERNET Watch 連載）
http://internet.watch.impress.co.jp/www/column/ogata/

[4] **http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kokugo/toushin/001218.htm**

[5] 122 文字という数は、Windows Vsita 添付の「MS」フォントで字体の変わった漢字数（96 文字）にデザイン差ながらも見た目の違いが顕著な 26 文字を加えたため。

[6] 「メイリオ」および「ClearType」についてはマイクロソフト社発行の小冊子『メイリオースクリーンで快適な読書を楽しむためのスタンダード』（非売品）や同社プレスセミナー資料「ClearType & Reading on Windows Vista」が開発の経緯などを詳しく解説してある。

[7] 「メイリオ」というフォント名は日本語の「明瞭」に由来している。

[8] このグリフ数は Windows Vista 添付の「MS」フォントのグリフ数とも異なる。JIS X 0208・0212・0213:2004 の各規格の漢字を網羅しているほか、U+3614（「嚔」＝「口」＋「賽」）や U+20BB7（「吉」＝つちよしの「吉」）などの漢字が追加されている。その収録基準は不明だが、それらの内の 20 字ほどを調べてみたところでは Adobe-Japan-1 に収録されているという共通点がみられた。

[9] Windows Vista 英語版においても、従来の「Tahoma」に代わり、「Segoe UI」という新しい ClearType フォントがシステムフォントとして使われる。

[補注] 本稿校正中に公開された Windows Vista RC1 ビルドでは、「MS 明朝」フォントのグリフ数は 19,321 字、「MS ゴシック」フォントのグリフ数は 22,213 字と、微増している。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

Intel Mac

師　茂樹

❏ Intel を搭載した Mac

本誌前号が発刊されてからの Apple をめぐる動きは慌しかった。

2006 年 1 月、かねてより予告されていた Intel 製の CPU が搭載された iMac と Mac Book Pro、それに対応する Mac OS X を発表した。これまでの PowerPC ベースの Mac は、2007 年中には完全にラインナップから外れることになるという。

Intel 製 CPU の搭載によって「Mac で Windows が動くのではないか」という憶測が流れ、一部のハッカーが実際に成功したというニュースが流れると、Apple は 4 月、Intel ベースの Mac で Windows XP の利用を可能にするソフトウェア Boot Camp を発表した。執筆時点ではパブリックベータ版が公開されているが、次期バージョンの Mac OS X Leopard では Boot Camp が標準搭載されることになっている。

8 月には Google CEO のエリック・シュミット氏が Apple 社の取締役に就任した。Microsoft と正反対のビジネスモデルを持ち、Microsoft の天下を終わらされることができる唯一の企業とされている Google が Apple と手を結んだということで、すでにインターネットのあちこちで様々な憶測がささやかれるようになってきた。

一方、Apple が Intel ベースへ移行するのにあわせて、Microsoft による Mac 製品のサポートが次々と終了している。Internet Explorer は開発が終了し、8 月には Virtual PC の Intel ベース Mac 向けバージョンの開発を進めないという決定を下したというニュースが流れた [1]。また Office for Mac については、次期バージョンが開発中で、Windows 版 Office 12 の発売以降に登場するとのことであるが、Visual Basic スクリプトのサポートを打ち切られるとのことである [2]。Windows Media Player もバージョンが止まったままだ。年内には iPod に対抗した Zune を発売するとのことで、Microsoft 対 Apple という懐かしい対立図式が、再び現実味を帯びてきたような感もある。

❏ Intel ベースでの問題

以上のような状況の中で、古くからの Mac ユーザーにとって最大の問題と言えば、Intel ベースへの移行によって Mac OS 9 以前の所謂 Classic 環境のサポートが終了してしまうことだろう。もちろん、古い Mac のエミュレータはインターネット上で公開されているのでそれを使えば何とかなる可能性はあるが、公式サポートがなくなってしまうのはやはり影響が少なくない。Mac OS X に移行していないソフトウェアに依存するデータは、行き場を失うことになる可能性がある。評者の周りでは、高機能な多言語ワープロとして東洋学研究者のユーザーも多い Nisus Writer のデータや機能拡張のためのスクリプトが失われるのではないか、という懸念の声をよく耳にする。メーカーのサポートに期待するだけでなく、そのようなデータのユーザーは、今のうちに何らかの対策をしておく必要があるだろう。

注

[1] 一方、VMWare や Lismore Systems、Parallels と言ったメーカーが、Intel ベースの Mac 用の PC エミュレータ（仮想環境）を発表している。

[2] http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0608/08/news033.html

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❖アプリケーションソフト

一太郎2006 ＆ ATOK2006

山田　崇仁

❑　はじめに

一太郎と ATOK の新バージョンは、年度末に発売されるのが定例である。今年も無事バージョン 2006 が発売された。ここではそのレビューをお送りする。

まずは、昨年、知的財産権関連の注目すべき訴訟となった松下電器との裁判は、知財高裁での審判の結果ジャストシステム側の勝訴に終わり、無事に販売を継続できることとなった。ユーザーとしては大変喜ばしい限りである。

一太郎関連ニュースとしては、シマンテック社が「一太郎」の未知の脆弱性を悪用したウィルス「Trojan. Tarodrop」を確認したとの報道があった [1]。コンピュータウィルスそのものは唾棄すべき存在ではあるが、レビュワーは「一太郎もウィルスのターゲットになるまで元気が戻ってきたのかなあ？」と妙な感慨に浸ってしまった [2]。事実はどうあれ、セキュリティーホールが存在するのは確かなのだから、利用者は必ずジャストシステム社から公開されたセキュリティ更新モジュールを適応しておいていただきたい [3]。

締め切り直前に、9 月 1 日より一太郎がダウンロード販売されるとのニュースが飛び込んできた [4]。新たな一手がユーザーの裾野を広げることになるのか？一太郎の動向に注目したい。

❑　一太郎 2006

今年度版の一太郎は、画面デザインの刷新など、細かい使い勝手の変更がメインである。MS Office 2007 のように、オペレーティングシステム提供メーカーならではの大胆な使い勝手の変更はさすがに無理なものの、従来のユーザーが「よりかゆいところに手が届く」的な喜びを見いだせるような作り込みをしてくるあたりは、老舗ならではといえるだろう。

この使い勝手は、他の部分にも生きている。Word との連携の強化もそれである。最近は「打倒 Word ！」の意気込みこそすっかり萎えてしまったようだが、根強い一太郎使いのためにとばかり、Word との互換性を向上し、更には Power Point のファイルさえ読み書きできるようになった。世の中には、文書ファイル＝ Word と思いこんでいる御仁が大勢おられるようなので [5]、これらの機能は結構助かる。

他にも、印刷機能の強化が挙げられる。今バージョンから「冊子印刷」機能が実装された。これは、雑誌や書籍のように、見開き印刷後に平とじや中とじをしてもページ数がずれないようにする、製本を意識した印刷のことである。この機能のありがたさは、ページ割りなどで悩んだことのある方ならばだれしも納得するだろう。また、印刷するページを任意に指定できるようになったこともありがたい。これまでは、ページ範囲の最初と最後を指定する形式しか実装されていなかったので、「1, 3, 5」のようなページを一度に印刷するのは面倒だったのである。他の Windows 用アプリケーションがこの機能をほぼ標準的に実装していることからすれば、一太郎の対応は遅きに失しているのだが、それでもないよりは遙かにましであろう。

一太郎は、文書作成ソフトとしては、ほぼ完成の域に来ているのであろう。来年以降のバージョンではどのように変わるのか（変えるところがあるのか？）楽しみなところである。いくつかレビュワーの希望・注文を羅列しておくことにする。

- ショートカットキーのバリエーションに Windows 準拠のものも用意して欲しい。

一太郎のショートカットキーは、昔からの蓄積で「これじゃないとだめ！」という御仁も多いだろうが、他

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

のソフトと同じショートカットキーの選択肢もあると便利だろう（[Ctrl] + [F] で「検索」。[Ctrl] + [H] で「置換」等）。

- サロゲートペアに完全に対応して欲しい。

一太郎は、文書入力に関してはUnicodeのサロゲートペアに対応しているものの、ダイアログボックスへの入力など、まだまだ未対応の部分がある。この辺りの対応を進めて欲しい。

- MS Office 2007のユーザーインターフェイスにどう対応？するのか。

本誌該当レビューをみるように、MS Office 2007は大胆なユーザーインターフェイスの変更が特徴である。これに対し、一太郎はどう対応するのだろうか？

これは一太郎のみならず、他の多くのWindows用アプリケーションが対応策を検討する問題だと思われる。従来と変わらずか、Officeに対応した大胆なユーザーインターフェイス変更を行うか、楽しみな限りである。

❑ ATOK2006

Windowsのみならず、他の多くの情報機器で使われている日本語入力用システムATOK。そのフラッグシップであるWindows用最新版が2006である。

今回の目玉機能は「入力しなおした単語を学習」「推測候補モード」「日付入力支援機能」「使い方を誤りやすい表現を解説」である。

「入力しなおした単語を学習」は、単語を入力する際、入力し直した単語を学習する機能である。単語の半自動登録化とも言い換えられるだろうが、便利な反面、時々じゃまだなあ～と思う時もある。

その他、「推測候補モード」は携帯電話で定評のある省入力機能。「日付入力支援機能」は、「きょう・きのう・あさって…」と言った単語から「2006/10/01」といった該当する日付に変更する機能である。また、「使い方を誤りやすい表現を解説」は、「役不足」などのような日本語入力時に間違えやすい単語を解説してくれる機能である。いずれも、一太郎と同様「かゆいところに手が届く」機能と言えるだろう。

❑ おわりに

ここ数年、悲観的な論調で一太郎とATOKのレビューを書いてきたような気がする。今年は、普通？のレビューよろしく新機能を中心に紹介をした。これは見通しが明るいというよりも、レビュワーが既に枯れた（悟った？）境地になってしまったためなのかもしれない。レビュワーは、論文こそ一太郎で書くものの、ミーティング用のテキストはWikiで、授業のレジュメはInDesignで書くという変わり者であり、一太郎はあくまで文書作成手段の一つという位置づけでしかない。それでも、日本語の長文を執筆する際に、一番使い勝手の良いのはやはり一太郎である。Wordのような「小さな親切余計なお世話」的な機能もなく、InDesignほど重くもなく、Wikiでは出来ない使い勝手の良さがやはり一太郎には備わっている。

いつまで一太郎を使い続けるのかはわからないが、それでも年度末になるとなんとなく一太郎の新版を買うという習慣は、これからもつづくのだろう。

注

[1] シマンテック社の該当Webページ。**http://www.symantec.co.jp/region/jp/avcenter/venc/data/jp-trojan.tarodrop.html**

[2] 実際には一太郎そのものというよりも、一太郎が官公庁向けに強いとされるために、そちら方面のデータ漏洩をねらって一太郎が選択されたのかもしれない。

[3] **http://www3.justsystem.co.jp/download/ichitaro/up/win/060818.html**

[4] Vector（**http://www.vector.co.jp/**）やジャストシステムの直販サイトであるJust MyShop（**https://www.justmyshop.com/app/mypage/doc/index.html**）で取り扱うとのことである。

[5] レビュワーも以前、Linuxがメイン環境の方に「ぼくパソコンできないんだよ～。だって、今時って「パソコンができる＝Word, Excelができる」だからねえ。」と冗談交じりで言われたことがある。また、メールで「詳しくは以下の添付ファイルで確認してください」とWordのファイルを送られたことは数知れない。相手がWordファイルを見られるという無意識の思いこみのなせるわざであろう。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

WWW ブラウザ

上地　宏一

❏ シェア拡大中の Firefox

本誌恒例の OneStat.com によるブラウザシェアによると 2005 年 11 月の調査において、ついにシェア 10% を超え、さらに拡大中であることが判明した。

WWW ブラウザ	2005/4	2005/11	2006/7
Microsoft IE	86.63%	85.45%	83.05%
Mozilla Firefox	8.69%	11.51%	12.93%
Apple Safari	1.26%	1.75%	1.84%
Opera	1.08%	0.77%	1.00%

昨年ほどの上昇率（11 ヶ月で 6.5 ポイント）ではなかったものの、着実にシェアを伸ばしつつあることが見て取れる。一方で、Safari については、大きな変化は見られないようだ。また、Opera はパソコン用ブラウザについては停滞気味であるが、携帯端末における採用が目立っている（詳しくは後述）。

❏ ブラウザこの一年

引き続き、主要ブラウザごとの動向に注目したい。

■ Microsoft Internet Explorer (IE)

昨年発表のあった IE7 は 2006 年 9 月 11 日から RC1 の公開が開始された。正式版の公開は 2006 年第 4 四半期とのことで、正式名称は Windows XP 版が「Windows Internet Explorer 7 for Windows XP」、Windows Vista 版が「Windows Internet Explorer 7 in Windows Vista」という具合に別々の名前になる。

ところで Web 記事 [1] によると、IE7 は Windows の自動更新により強制的に配布されるとのことで、実際の配布は IE7 正式版のリリースから 6 ヵ月後に予定されている。このことが与える影響は実は非常に大きく、IE6 をメインターゲットとして用意されている各種 Web サービスが、IE7 でも同様に動くかどうかの検証が求められるわけであるが、特に日本語版の Windows 自動更新による配布については、検証のための時間を確保してほしいという強い要望によって、他言語版よりも長めの 6 ヶ月という猶予期間が設けられた、とのことである。

Windows XP のサービスパック 2 におけるセキュリティ機能の変更により、オンラインバンキングなどの各種 Web サービスにおいて混乱が見られたが、それに近い状況が 2007 年に再来する可能性がある。

■ Mozilla Firefox

シェア 10% を超えたことは先述のとおりであるが、Firefox の 2 億ダウンロードが 2006 年 7 月 31 日に達成されたと発表された。日本での Firefox の普及率が他国に比べて低いというデータ [2] もある一方で、Firefox 普及活動である「Spread Firefox」の日本における活動 [3] が東京・秋葉原でのプロモーションを皮切りに開始したほか、RealNetworks 社のメディアプレーヤーである RealPlayer の配布時に従来の Google Toolbar に加えて Firefox も一緒に同梱される方針が発表されている [4]。また、日本向けの Firefox マスコットも登場した [5]。

そして本誌前号で次バージョンと紹介した Firefox 1.5 が 2005 年 11 月に正式に公開された。その後短い間隔で改良・修正が行われ、2006 年 9 月の時点でバージョン 1.5.0.7 となっている。

このほか Firefox バージョン 2.0 についてはベータ 2 版が公開されている。バージョン 2.0 については、各種機能強化が施されているわけだが、筆者の個人的な感覚としてはアンチフィッシング機能が目玉かと思われる。

Mozilla については、拡張機能（extension）が豊富なことで知られており、たとえばブラウザ画面上から Javascript や Cookie 機能の ON/OFF を切り替えられるもの（QuickJava, Cookie Button in the status bar）や、Web ページを丸ごと保存するもの（ScrapBook）など、大変便利であるが、Firefox のバージョンが変わるたびに動かなくなるものもあり、バージョンが新しくなるのは良いことであるが、一方で不便さを感じることもある。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

■ Safari

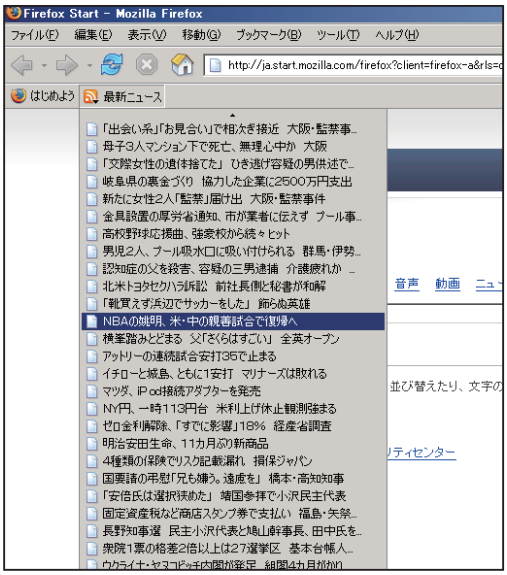
MacOSX 10.4（Tiger）向け Safari はバージョン 2.0.3 となり、MacOSX 10.3（Panther）向けについては 1.3.2 となっている。いずれもセキュリティ修正、安定性の向上が主で大きな変更はない。MacOSX 10.2（Jaguar）向け Safari については 2005 年 1 月以降、更新が止まっている。

■ Opera

本誌前号刊行直前の 2005 年 9 月に Opera は広告型ブラウザから完全無料型ブラウザに移行したことは記憶に新しい。日本においても代理店であったライブドアから移管された、Opera Software ASA が直接配布を行っている。バージョンは 9.0.1 となり、機能としては BitTorrent によるファイルダウンロードに標準で対応したほか、ウィジェットと呼ばれる小型 Web アプリケーション（天気予報、電卓、ニュースなどの小物）に対応している。

Opera はまた一方で PC 以外の電子機器への搭載にも力を注いでおり、たとえば携帯型ゲーム機であるニンテンドー DS にカスタマイズされた Opera ブラウザ「ニンテンドー DS ブラウザー」が発売されている。このほかにも携帯電話向けのフルブラウザや PDA 用ブラウザでの採用が続いている [6]。このように Opera は Firefox とは異なった方向性を打ち出しているといえる。

図 1：RSS 情報



■ 今後 1 年のシェア争いは IE7 の評価次第か

これまで Windows ユーザーが標準の IE の代わりに Firefox や Opera を使う理由といえば、1 つにはセキュリティ面での優位性があり、また機能面での新規性などが挙げられた。しかし、セキュリティ面に関しては、もはやどのブラウザであっても（セキュリティ修正に対するスピードやポリシーに差があるとはいえ）大きな違いは存在しないのが現状である。そうなると今度は IE7 の機能向上がどれだけユーザーに受け入れられるかによっては、また IE のシェアが増加することも大いに考えられるし、逆に移行が順調に進まずに IE6 と IE7 が混在する状況による混乱に乗じて他のブラウザが躍進する可能性も否定できない。いずれにしても Web コンテンツ管理者にとっては頭の痛い 1 年になりそうである。

❏ RSS とは何か？

ところで、本誌前号において、最近のブラウザ機能のキーワードは「SVG」と「RSS」である、と述べた。SVG についてはすでに紹介したので、本稿では「RSS」について触れたいと思う。

RSS とは Web サイトの更新情報をまとめて配信するためのデータ記述形式（または配信されるデータ）のことを指す。RSS 形式には複数の版があり、それぞれ記述方法が異なるため、多少混乱が見られるが、日本では主に RSS 1.0 が利用されている。

百聞は一見にしかず、まずは Mozilla Firefox の標準 RSS 機能の画面を見てみよう（図 1：RSS 情報）。

このように、Firefox に標準で用意されている「最新ニュース」と名前のついた RSS 情報（Firefox ではこれを「ライブブックマーク」と呼ぶ）として、現在の朝日新聞「アサヒコム」のニュース一覧が表示される。1 行が Web の 1 ページに相当し、すなわち記事 1 つ分に相当する。それぞれの記事をクリックすることで該当するページにジャンプする。RSS とは簡単に言ってしまえばこれだけのことであるが、最近では記事の更新頻度の高いニュースサイトやブログサイトをはじめ広く活用されはじめている。RSS に記述される内容としては、「題目（title）」「概要（description）」「URL（link）」のほか、書誌情報のメタデータとして国際標

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

準規格にもなっているダブリンコア（Dublin Core）の要素も含めることができるため、「情報発行者（dc:publisher 等）」「日時（dc:date）」「分類（dc:subject 等）」などの情報を含めることも可能である。

❏ 各ブラウザ標準機能としてのRSSリーダー

RSS 情報を専用に扱うアプリケーションも存在するが、ここではブラウザに標準搭載されている RSS リーダー機能について簡単な評価を行った。

■ Firefox

筆者の個人的な感覚では、Firefox の RSS リーダー機能が一番便利だと考えている。Firefox の場合は、先の図のようにナビゲーションバーからポップダウンリストとして RSS フィードの内容が表示される。表示される内容は「題目」のみである。これ以上の情報は表示されないが手軽に Web 更新情報をチェックすることができる。

また、拡張機能の一つ「Sage」を利用すると、他のブラウザと同様に「概要」などを表示することができる（図 2：Sage による RSS 表示）。

■ IE7 および Safari

IE7（実際に確認したのはベータ 3 版）と Safari の場合は、RSS フィードを 1 つのページ上で見ることになる。情報は、「題目」「概要」のほか、「日時」などにも対応している。RSS フィードリストのソートや内容の検索にも対応しているほか、Safari では「概要」の表示情報量を調整できる（図 3：Safari の RSS 表示）（図 4：情報量を減らした場合）（図 5：Safari でのアサヒコム RSS 表示）。また IE7 では「カテゴリ（分類）」ごとの件数表示にも対応している（図 6：IE7 でのアサヒコム RSS 表示）。

■ Opera

Opera の場合は、同様に標準機能となっているメール機能の拡張と位置づけられているようで、メールソフトのような画面配置となっている（図 7：Opera でのアサヒコム RSS 表示）。IE7 や Safari と同様に「題目」以外の各種情報の表示が可能である。

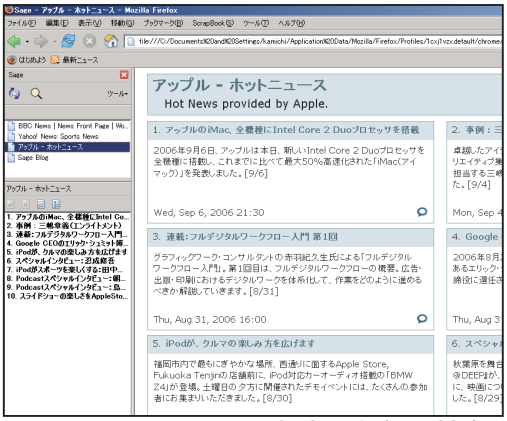


図 2：Sage による RSS 表示

図 3：Safari の RSS 表示

図 4：情報量を減らした場合

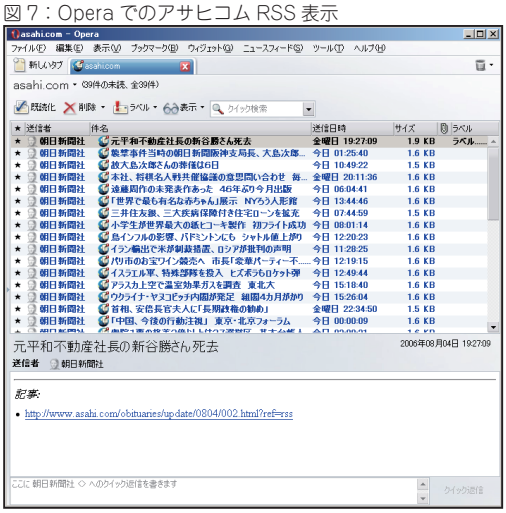
一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

図５：Safari でのアサヒコム RSS 表示

図６：IE7 でのアサヒコム RSS 表示

図７：Opera でのアサヒコム RSS 表示



■ まとめ

RSS リーダー機能については Firefox と非 Firefox で大きく異なり、あくまでも Web 情報が更新されているかどうかを題目で確認する目的に特化されている Firefox に対して、より詳しい内容までを確認できる非 Firefox といった特徴に分けられる。必ずしもすべての RSS 情報が「概要」「日付」「分類」を含んでいるわけではなく（例：「アサヒコム」は「概要」が空である）、サイトによって配信される情報の量、質はバラバラである。なお、中国語 RSS の表示についてはすべてのブラウザが対応していた。今後多くのサイトが RSS 配信に対応すると考えられる。是非この新しい機能を活用してほしい。

❑ お知らせ

漢字文献情報処理研究会でも RSS 配信を開始しました。

URL **http://www.jaet.gr.jp/index.xml**

この RSS は JAET-BBS の最新記事の題名が配信されます。非会員の方もご覧になれますが、実際にリンクされている BBS の記事は会員のみ閲覧可能です。記事の題名にご興味をもたれましたら是非当研究会へご入会ください（本誌巻末に入会案内があります）。

注

[1] Impress Internet Watch
http://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2006/07/27/12810.html

[2] Impress Internet Watch
http://internet.watch.impress.co.jp/cda/event/2006/03/02/11091.html

[3] Spread Firefox Japan
http://www.spreadfirefox.com/node/23210/

[4] Real Networks
http://www.realnetworks.com/company/press/releases/2006/real_mozilla_google.html

[5] **http://spreadfirefox.jp/mascot/**

[6] Opera 社によるプレスリリース
http://jp.opera.com/pressreleases/

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

EmEditor Ver.6

山田　崇仁

❏ はじめに

EmEditor[1] は、米 Emurasoft, Inc. の開発するテキストエディタで、この種のソフトウェアの中では、いわゆる「定番」に位置づけられている。

EmEditor は、シェアウェアとよばれる有料のソフトウェアである。以前は、教育関係者の利用料を無料とするアカデミックライセンス制度があったが、個人情報保護法の施行に伴ってこのライセンスの新規発行が停止された。アカデミックライセンス制度が停止となったのは残念であるが、その代わりに利用状況に応じて価格と機能の異なる三バージョン「EmEditor Free（無料）」・「EmEditor Standard（3150 円）」・「EmEditor Professional（4200 円」）が提供されるようになった [2]。とりあえずの利用には Free 版でも十分だが、EmEditor の豊富な機能を使いこなしたい人向けには、Professional 版がお勧めである。

❏ フル Unicode に対応した数少ないテキストエディタ

世の中に、Unicode に対応していることをうたうテキストエディタは数多く存在する。しかし、その中の多くが「Unicode のテキストファイルは読めるものの、実際に表示・編集できるのは JIS X 0208 相当まで」という「疑似 Unicode 対応」でしかない。

本誌読者の中には、中国語などいわゆる JIS 漢字コード以外の文字も日常的に使用している方もおられるだろう。当然これら「疑似 Unicode 対応」のテキストエディタではそのようなニーズに答えることができない。また、JIS X 0213 の第三・第四水準に収録される漢字の一部は、Unicode の CJK 拡張領域 B に収録されている。もちろん「疑似 Unicode 対応」のテキストエディタは、この領域に対応していない。

従って、世の中の多くのテキストエディタは「日本語の文字コードに完全に対応できない」のである [3]。

しかし、EmEditor は、Unicode の全ての文字の表示・編集に対応している。当然、JIS 第一・第二水準以外の Unicode 収録漢字（CJK 統合漢字、拡張領域 A, B）に対応しており、各領域の字体を収録したフォントさえあれば、表示・編集には何の問題もない [4]。

また、複数のファイルやフォルダのテキストファイルを指定して検索する、いわゆる grep と同様の機能を提供する「ファイルから検索（検索するテキストファイルの文字コード指定は、Professional のみ対応）」と同じく置換機能を提供する「ファイルから置換（Professional のみ提供）」でも、JIS X 0208 以外の Unicode 文字を使用できる。この機能についての詳細は、本誌特集 1 を参照していただきたい。

❏ プラグイン・マクロ・外部ファイル

EmEditor は標準の機能だけでも十分に役立つが、これ以外に拡張機能を利用すると更に便利になる。

これら拡張機能は、プラグイン・マクロ・外部ファイルの大きく三つに分けられる。

■ プラグイン

C 言語を使用して作成された、EmEditor の機能を拡張するプログラムである。Emurasoft, Inc. が提供するものの他に、有志による多くのプラグインが公開されている。

ここでは本志読者に便利だと思われるプラグインをいくつか紹介しておこう。

●簡体字に変換
●繁体字に変換

いずれも選択範囲の文字を簡体字・繁体字に変換してくれる。ただし、日本で使われる新字体からの簡体字・繁体字変換には対応していない。

●Unicode のデコード
●Unicode のエンコード

JIS X 0208 の文字以外を Unicode の実体参照（佾 → 佾）へと変換（またはその逆）をする。Unicode に対応していないソフトウェアとデータをやりとりする場合に便利。

以下のプラグインは、Ver.6 以降でのみ提供される

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

ものである[5]。これらのプラグインは、本体インストールと同時にインストールすることも可能。

●Search（Ver.6 のみ提供）

EmEditor の文字編集領域の外にウインドウを表示し、現在開いているファイルを対象に検索を行う機能。

●アウトライン（Ver.6 のみ提供）

一定の書式に従って、アウトライン表示を行う。

●Web プレビュー（Ver.6 のみ提供）

html, XML などマークアップ言語をブラウザで解釈して表示する。ブラウザをその都度起動しなくとも、結果を簡単に確認できるようになったのは便利。

●エクスプローラ

編集画面の隣にフォルダーツリーの画面が表示され、そこからファイルを選択して開くことが可能。一々、［ファイル］→［開く］を実行してフォルダを移動するのが面倒な人にお勧め。

その他にも多くのプラグインがある。Emurasoft, Inc. の「プラグイン一覧[6]」を参照されたし。

■ マクロ

プラグインを作るまでもないような簡単な機能を自動実行するために、マクロ機能が提供されている。マクロ言語には JavaScript または VBScript が利用できるので、自分の好みで選択すればよい。また、EmEditor Professional Ver.6.00 以上では、#language 指示子を用いて、perl や ruby など、任意の ActiveScript を利用できるようになった。

基本的な作成方法は、EmEditor のマクロレファレンスに記述されているが、マクロ記録機能もあるので、まずはそれを使って簡単な作業を自動化することから始めるとよい[7]。

■ 外部ファイル

EmEditor の編集結果を、コマンドプロンプトや WWW ブラウザなどに渡して実行する機能である。

工夫次第で、「EmEditor で選択した文字列を WWW で開いてサーチエンジンに登録して検索」などの機能が実行できるので、これも使いこなすと相当便利。

❑ おわりに

以上、簡単ではあるが、EmEditor の機能を紹介した。アカデミックライセンス制度が無くなったのは残念な限りであるが、Ver.6、特に Professional 版で提供される豊富な機能は、その購入を十分に検討する価値があると言える。

上述のように、本誌特集 1 では、EmEditor を使用した検索と置換について誌面を割いている。そちらも併せて参考にしていただきたい。

注

[1] EmEditor の公式日本語版 Web サイトは、**http://www.emeditor.com/jp/** である。最新版の入手や各種プラグインについてしるために、時々チェックしておくことをお勧めする。

[2] Standard, Professional 共に 1 ライセンス辺りの価格。大口購入割引もある。

[3] 一応、JIS X 0208 の符号化方法の一つである Shift-JIS という方法の中で JIS X 0213 を使用可能にする方法もある。しかし、現状のオペレーティングシステムやフォントベンダーの対応は「JIS X 0213 への対応は、Unicode 上で」という方針である以上、お勧めしない。Mac OS X では既に OS, フォントの双方が対応済みであるし、Windows でも次期バージョンの VISTA では JIS X 0213:2004 対応フォントが提供される予定。詳しくは本号の清水氏によるレビューを参照されたし。

[4] フォントや入力方法については、本誌第 6 号の関係記事を参照のこと。

[5] 他にも、Ver.6 用プラグインはいくつかあるが、レビュワーの日頃使っているもののみを紹介してある。

[6] **http://www.emeditor.com/jp/plugins.php**

[7] ちなみに、中国語などを使用した他言語混在のマクロファイルの保存は、UTF-16LE のエンコードで保存しておくとよい。UTF-8 などの他のエンコードで保存した場合、上手く動作しない場合もある。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

Chinese Writer 8

金子　眞也

❏ はじめに

Chinese Writer が 7 から 8 にバージョンアップしたのは 2005 年 11 月。本誌第 6 号には惜しくも間に合わなかった。既に 1 年近く経過した今になっても、その新しさ、いわゆる「とんがった所」は色あせていない。以下、「まんべんなく総花的に」ではなく、本ソフトの「とんがった所」を中心にとりあげて、その「お買い得度」を考えていきたい。動作検証には筆者自作機に 06 年 7 月 21 日付けアップデートをあてた Chinise Writer 8 MASTER をインストールして用いた。

❏ 1. GB18030 対応 IME とフォント

新しさの第一は IME である。Chinise Writer は、中国の国家標準 GB18030 に 2003 年 9 月発売の前バージョン「7」でいち早く対応しているが、今回の「8」では新語を大幅に拡充するなど IME に一段と磨きがかかっている。また、新たに広東語入力にも対応した。GB18030 対応フォントを実装しているのはもちろんである。

GB18030 の入力方法は、①“朱镕基”の“镕”や女性を表す二人称の“妳”など、ピンインで直接入力する頻用文字、②部首引きで入力する文字、③コード入力によって入力する文字の 3 種類に分かれるようである。GB18030 には一般人の見たこともないような珍しい文字も多数含まれているので、入力の上でのこのような線引きは合理的であろう。

❏ 2. 中国語デジタルマルチ大辞典

Chinese Writer 8 で最も評価に値するのは「中国語デジタルマルチ大辞典」の存在である。市販の電子辞書が小学館（第一版）一辺倒に近かった 2005 年 11 月に、パソコン用ソフトでありながら『中日大辞典』を収録したのは、まさに衝撃的出来事だった。

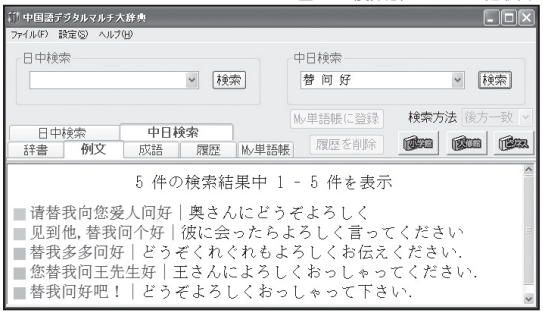
- 中日大辞典　増訂第二版（愛知大学／大修館）
- 中日辞典　第一版（小学館）
- 日中辞典　第一版（小学館）
- 中国語新語ビジネス用語辞典（大修館）
- 日中パソコン用語辞典（日経 BP 社）

一気に上記 5 種類の辞書の検索ができることがこの「大辞典」の特徴で、単語はもちろん、単語と単語の間にスペースを入力すれば、複数のキーワードを含む例文の検索もできる。ワイルドカードももちろん使用可能で、「?」で任意の一文字、「*」で（そこに文字が入らない場合を含む）任意の文字数を表わす。ピンインに声調を入れないまま検索を行うと、声調にとらわれない検索結果が得られる。パソコン用ソフトであるから、検索結果はそのままワープロ等に貼り付けできる。この辞書検索の便利さが Chinese Writer 8 の最大のメリットである。“替”“问”“好”で複数検索した結果を図 1 に示そう。

この全文検索機能については、前段となるエピソードがあるので以下に紹介しておく。Chinese Writer の開発販売元である高電社は、PDA 用に「日中翻訳 Walker」というソフトを販売していて、2004 年の 12 月に筆者の勤務校龍谷大学で開催された「中国語 CAI 研究会」の席で、この「日中翻訳 Walker」のデモが行われた。

参加者の喝采を博したのは「日中翻訳 Walker」のもつ全文検索機能であり、「これが PDA 用でなくてパソコン用のソフトだったら便利なのに」という声が会場からあがった。その翌年秋に出たのがこの「Chinese Writer 8」なのである。この時の会場の声が反映した

図 1　複数辞書から一括検索



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

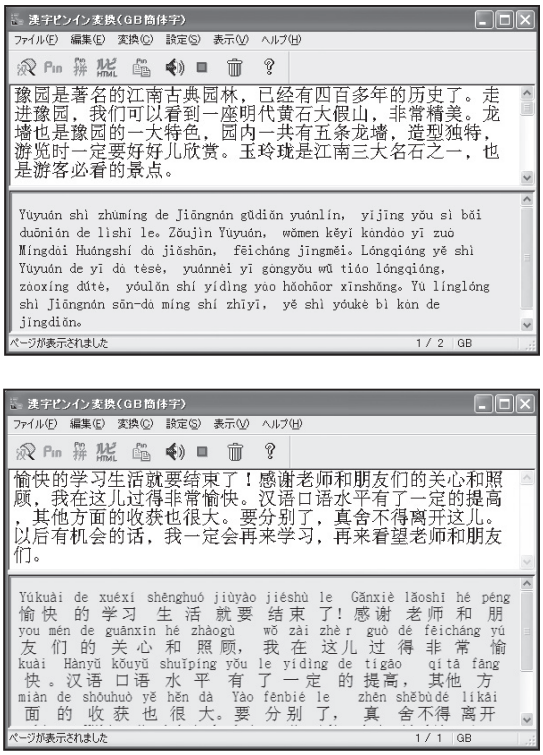


図２　漢字ピンイン変換

図３　中文ファイルプレーヤー２

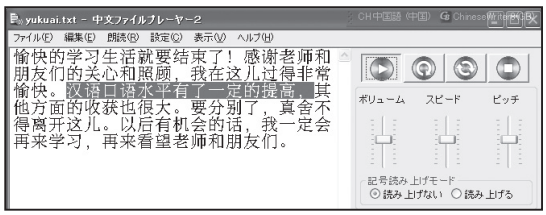
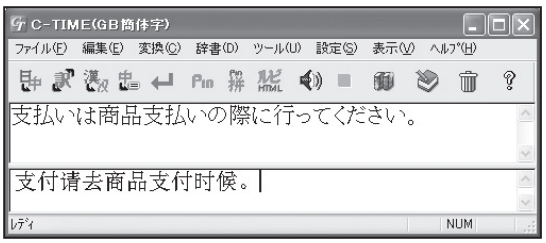


図４　C-TIME で翻訳



結果かどうかは定かでないが、ソフトウェアの改良にはユーザの声をくみ上げることが大切である点は、開発元には銘記していただきたい。

さて、非常に使い勝手の良い「中国語デジタルマルチ大辞典」であるが、大きな問題が二つ存在する。

その第一は、収録辞書が小学館の第一版で古いことである。小学館の辞書を第二版に入れ替えるか、電子辞書用に既に電子化がなされている講談社の『日中・中日辞典』に差し替える、そしてこれまた電子辞書用に電子化されている《现代汉语词典》を追加する。もしこれを実行したら、辞書機能だけで「Chinese Writer」が最強になることだろう。高電社には検討をお願いしたい。

第二番目に、合成音の問題があげられる。音声が不自然であるばかりか、一部の単語については音声の一部が出力されない欠陥がある。

例を二つあげよう。“馄饨”を引くと『小学館日中・中日辞典』のみヒットするのだが、その音声を再生すると、前半の“馄”の部分の音声しか再生されず、“饨”の部分が聞こえない。もう一例、“骆驼”を引くと『小学館日中・中日辞典』・『中国語新語ビジネス用語辞典』・『中日大辞典』の三点ヒットするが、他の二点の辞書の音声は正常に再生されるものの、『小学館』で“骆驼”を再生すると“骆”のみで“驼”の部分が聞こえない。このような例は他にも幾つか気づいているのだが、困ったものである。どうも軽声の処理に難があるように思われてならない。

ほかに“儿化”の処理にも難があり、“儿”が“er”と再生される。“一点儿”を再生するととても悲しい気持ちになる。

❑　3. 漢字ピンイン変換

次に便利な機能として「漢字ピンイン変換」があげられる。声調付きピンインにもピンインのルビにも変換可能である。

図２でお分かりいただけると思うが、Microsoft Word よりずっと楽にルビを振ることができる。中国語の教材作りには大変便利な機能だといえよう。

❑　4. 中文ファイルプレーヤー２

Chinese Writer 8 の音声関係の機能には、テキスト

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

フィルを読み込んで再生する「中文ファイルプレーヤー 2」も付いている。こちらは文中の切れ目ごとに解析をしているらしく、自動読み上げのレベルもややマシであるが、“儿化”の処理にはこちらも難がある。

❏ 5. C-TIME

高電社からは 06 年 8 月末に機械翻訳ソフトの新バージョン「j・北京 V6」が発売されている。Chinese Writer に付属する C-TIME の機械翻訳機能は、あくまでオマケと考えた方がいいだろう。

❏ Chinese Writer 8 は「買いか」

Chinese Writer 8 の持つ豊富な機能の中には他の無償ソフトで代用出来るものも多い。

簡体字にピンインを振るだけなら、鈴木慎吾氏作成の「中国語教師用クラス名簿一発作成ツール」[1] が簡単で初心者にも使いやすいだろうし、簡易機械翻訳なら同じ高電社が web 上で無償提供 [2] してくれている。Chinese Writer のとちがって web 上の翻訳は日中・中日両方がそろっている。オンラインの中国語辞典 [3] も語彙数は不十分ながら簡単に利用できる。

学生を対象にして有用性を検証する機会が得られなかったのと紙数の関係で今回は省略したが、Chinese Writer 8 MASTER には CALL の簡易版のような機能までついていて、「抑揚変換 for Chinese Writer 8」という発音矯正のツールが付属する。お手本と学習者の音声の差を波形表示して比較するのが主な機能だが、これとても、類似のものが成蹊大学中国語音声データベースシステム [4] から提供されている。

さて、Chinese Writer 8 は「買い」なのだろうか。辞書の全文検索機能だけでも充分「買い」だと筆者は考える。これに加えて便利なツールが多数集められているのだから、欠点はあるとしても、かなりの「お買い得」である。

中国語をツールとしてバリバリ使い、中国語で長文を書く機会の多い人は、きっと大変重宝することだろう。

注

[1] 下記サイトが入り口である。本来は、日本漢字を簡体字に変換し、さらにピンインを振るスクリプトだが、簡体字を直接貼り付けてもちゃんとピンインに変換することができ、多音字もきちんと指摘してくれる。
http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~suzukish/index.html

[2] **http://www.excite.co.jp/world/chinese**

[3] 一例をあげれば、**http://www.excite.co.jp/dictionary/chinese_japanese/**

[4] **http://chinese.jim.seikei.ac.jp/chinese/pages/top.jsp** が入り口である。

「いきなり中国語」1980 円教材ソフトは「使える」か

田邉　鉄

❏ 1980 円の中国語学習ソフト

「安かろう、悪かろう」というわけではない。「いきなり中国語」基礎編・実践編は、ソースネクストが展開する、1980 円ソフトシリーズ初の中国語学習教材である [1]。もちろん各編とも 1980 円だが、2 本セットになったパック商品は 2970 円と、さらに「おトク」になる。

このソフトは、上海のフーシャン・メディアが開発し、オムロンソフトウェア等で販売されていた [2]「聞いて効く中国語会話」シリーズの仕様を一部あらため、パッケージしたものである。

基礎編に相当する「聞いて効く中国語入門」が発売されたのが 1998 年、実践編に相当する「聞いて効く中国語　役立つ会話集」が発売されたのが 1999 年。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

図１　「いきなり中国語」のパッケージ

ソフトウェアとしては相当「古い」が、中国語教材（教科書）として見れば、許容範囲であろう。ちなみに「聞いて効く」は発売当時 9800 円。のちに 2 本の内容を合わせ、教科書や音声 CD の付いた Ver.2 も出たが、こちらは 13440 円だった。

フーシャン・メディアに限らず、これまでパソコン用中国語学習ソフトのほとんどは、6000 円台から 1 万円台半ば、といった価格設定だった。外国語を学ぶ時に、教科書と辞書が手に入る金額をパソコンソフトにつぎ込める人は少ない。ようやく「買える人は使わない、使いたい人は買えない」という状況が解消されたと言える。

❑　基礎編

では、各編の内容を見てみよう。

基礎編は、発音・単語・会話・決まり文句・練習の各コーナーに分かれている。文法シラバスに基づいた教科書等とは異なり、練習以外の各コーナーの内容は独立しており、特に関連性はない。また、順を追ってステップ学習するようにもなっていない。好きなところから学べるようになっている。「解説」では発音→会話→決まり文句→練習と進むように、と指示してあるが、単語については触れていない。一方、「ソフトの使い方」の説明では、まず決まり文句から入り、その後は発音・会話・単語を好きな順序で学び、練習で試す、となっている。「どっちやねん！？」と迷ってしまうが、もともとこの教材は「最初は文法を勉強してはいけない」という趣旨で作られているので、順番なんかどうでもいい、とも言える。

まあそれにしても、中国語にはじめて触れる人が使うのだから、標準学習パターンを示すとか、ナビゲーション機能を付けるとかした方が親切だと思う。「いきなり」この教材を起動したら、最初はかなり戸惑うことになりそうだ。

発音コーナーには、声母 21 個と単母音 6 個を発音する口元を写したビデオ映像が収録されている。

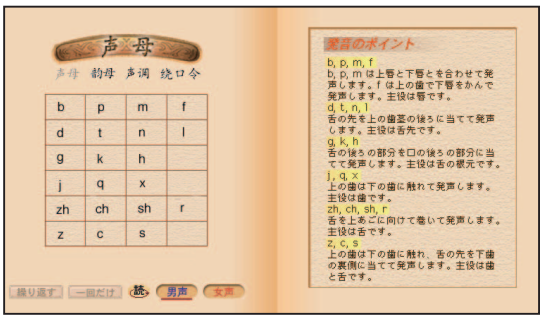
単語・会話・決まり文句の各コーナーの学習方法は、いずれも「文や語をクリックしてネイティブの発音を聞く」の繰り返しである。「一回だけ」と「何度も繰り返す」を選ぶことができ、後者にすると、別の文や語をクリックするまでいつまでも繰り返し発音する。ネイティブの発音は男声と女声が両方収録されている。

文字はピンイン、漢字、日本語訳が表示されるが、ピンインと日本語訳は隠すこともできる。面白いのは簡体字－繁体字の切り替え機能で、表示中の単語やフレーズを繁体字で表示してくれる。変調表示も考えられた機能である。三声が連続していて変調する漢字に赤色の枠がつき、クリックすると変調の説明がポップアップする。これらは学習者にちょっとうれしい機能と言えよう。

各コーナーを通して、自分の発音をネイティブの発音と聞き比べたり、波形を見比べたりするための録音機能が使える。波形を似せようとすることは、必ずしも発音の改善にはつながらないのだが、興味を長続きさせるのには、多少は役立つだろう。

内容面では、語彙が単語コーナーだけで 900 語以上とボリュームは十分なのだが、選び方が恣意的で、偏りが大きいという問題がある。たとえば、常用語というジャンルには 48 の単語が収められているが、その中に「封筒」・「切手」・「小包」・「書留」・「速達」・「航空便」と、郵便にかかわる語が 6 つも含まれている。常用語とは、別に項目のある動詞と形容詞を除い

図２　発音コーナー（声母）



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

た語のうち、入門者がぜひ知っておくべき、よく使う言葉、という意味であろう。そのベスト 48 に、「切手」はともかく「書留」や「速達」は入らないだろう。また、単語の日本語訳に、他の単語の訳が当てられている間違いが数カ所あった。「聞いて効く」から引きずっている間違いなのだろうか。凡ミスはきちんとチェックして直しておいてほしい。

会話コーナーは「是」・「有」・「的」などの重要語を軸とした基本文型 18 種と、「レストランで」・「航空券を買う」・「タクシーに乗る」など場面別表現 9 種を取り上げ、それぞれに 10 程度の例文が上げられている。基本文型にはコンパクトにまとめられた文法説明も載っており、発音コーナーを済ませた学習者は、会話コーナーから手を付けるといいのではないかと思う。

決まり文句コーナーは、「感謝」・「要求」・「願望」といった表現別に分類された、実用フレーズ集である。12 の分類があり、それぞれ 10 ～ 15 程度のフレーズが収められている。

練習コーナーは、単語とフレーズを聞き取る三択問題である。難易度によって 6 段階に分かれている。選択肢の順番は毎回変わるが、単に問題データベースからランダムに出題しているだけのようで、1 回のチャレンジで同じ問題に何度もぶつかることがある。間違えた問題が優先されるというわけでもないらしい。学習記録も作らない。ゴールはなく、学習者から「やめます」と言わない限り、いつまでも出題されつづける。本誌 4 号でも紹介したが [3]、とにかく何度も繰り返し練習すれば上達する、という、この「超詰め込み学習法」は、フーシャン・メディアの教材に共通する特徴である。確かにその通りなのだが、よほど我慢強くなければ、あっという間に飽きてしまい、耐えられなくなりそうではある。

❑ 実践編

実践編はさらに、「日常会話集」と「ビジネス・観光会話集」に分かれている。

「日常会話集」は単語と会話という二つのコーナーからなり、基本的には基礎編と同じ構成である。ただ、単語数は 1500 近くに増え、会話は 50 ジャンル 500 例が並ぶ。語の選択に首をかしげたくなるものが多いのは相変わらずで、「旅行」関連の語彙は「テント」・「寝袋」・「キャンプ」と、アウトドア関係が充実していたりする。

図 3　会話コーナー

「ビジネス・観光会話集」は、日本人のビジネスマンが上海に出張に行く、という設定で、招聘状が来てから帰国するまでを追いかけた、70 課からなるダイアログ集である。各課は 10 文程度から構成されているので、全 700 文、ストーリーのある連作ダイアログとしては中国語教材の中でもトップクラスの分量であろう。

内容はビジネスマンに合わせてあるが、観光にも対応可能な表現を集めた、というのがウリ文句である。なるほど、食事や買い物で用いる表現、日本の風物に

図 4　起動時にどちらか選択する

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

図５　実践編 ── 単語集

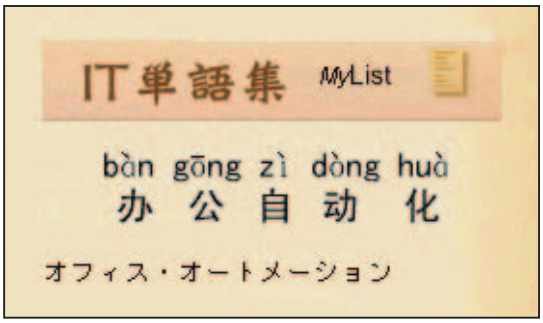


図６　IT 単語集

関するおしゃべりなど、どんな立場でも使えそうな一般的なダイアログを多く集めている。テレビドラマや携帯電話を話題にしている箇所では、少し内容の古さが目立つのはやむを得ないところか。細かな内容の改訂までは行われなかったようだ。

「ビジネス・観光会話集」にはさらに、「IT 用語集」という 590 語からなる単語集も収録されており、ピンインの頭文字から引ける。「ブログ」など最近の用語は収められていないし、日本語から逆引きできないので、実用的な意味はあまりないかもしれないが、暇な時に拾い読むには面白いコンテンツである。

❏　どんな用途に向いているか

以上、「いきなり中国語」基礎編と実践編を概観したが、語彙と例文が「てんこ盛り状態」であることがわかると思う。

これだけの内容を中国語教師について学ぶのであれば、初級教材としては十分すぎるほどだと思う。だが、これは自習用教材である。中国語を初めて学ぶ人に、これだけを渡して、さあ好きなところから勉強しなさい、と言っても、あまりに内容が多すぎて、また適切なナビゲーションもなく、立ち往生してしまうだろう。真面目に最初から取り組むには少し重すぎる教材だ。

台湾ドラマなどで中国語にちょっと興味を持った時、中国旅行に出かけようとする時に、試しに覗いてみる、というぐらいのスタンスで臨むといいかもしれない。デタラメにいろいろなところをクリックしてみれば、思わぬ発見があるだろう。ひとつでもふたつでも、発音できる単語、聞き取れる単語ができれば、それだけでも十分楽しいし、元を取った気になるだろう。

中国語を勉強したことがある人の、再入門用には適していると思う。この場合も、コンプリートすることよりも、面白そうなところを拾い読みしていくのが、長続きするコツ、だと思う。

❏　「日用品」としてのソフトウェア

ソースネクストの廉価版ソフトウェアは、値段や豊富なラインナップ、書店やコンビニでも買える販売チャネルの広さなどで、順調に売り上げを伸ばしている。

ソースネクストは「ソフトの日用品化」を戦略に掲げている。10 万円を下回る価格でパソコンが買える時代に、パッケージソフトは未だに安くても 1 万円前後。「ソフトをいろいろ使える」という汎用マシンの魅力を活かすには相当な出費を覚悟しなければならない。そんなパソコンソフトを、日用品化し、誰もが様々なソフトウェアを使えるようにしよう、1980 円シリーズにはそんな願いが込められているという。

ここまで見てきたように、「いきなり中国語」はどちらかと言えば、中国語を「覗き見」するのに向くソフトである。コンビニで情報誌を買って読む感覚、とでも言うのであろうか。中国語パソコン教材が普及するには、「いきなり」手にとってレジに持って行ける価格が必要だった、ということか。嗚呼！

注

[1]　http://www.sourcenext.com/products/ikinari_chinese/

[2]　2002 年から日本法人株式会社フーシャンメディア・ジャパンで販売。

[3]　「市販中国語ソフトは使えるか」P.90-95

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

学術リソースレビュー

昨年後半から今年にかけて、IT 業界では「Web2.0」のムーブメントが起こっている。

本レビューでは、基本的に各分野の研究上に役立つ Web サイトを中心に紹介してきたが、今年採り上げる Web サイトの中にも、「Web2.0」的なものが増えてきた。今年はその中でも特に「Google」と「Wikipedia」を大きく採り上げている。

これらは何れも大手の Web サービスに属するものだが、両サイトが提供するサービスは、学問的方法論・研究成果の公開・教育など、多方面で中国学のみならず、多くの学問分野に多大なる影響を与える（現に与えつつある）といえよう。

特に Google の繰り出すサービスにより、将来的には図書・論文へのアクセスが容易になり、また、研究者以外にも、当該分野の研究状況やそれぞれの研究の他者への影響が曝されてしまうのである。研究者本人の意識化では「偉大な論文」と思っていても、Google はそれを「独りよがりの自己満足」という容赦ない評価を下すのかもしれない。

いやまて、中国学はそれについては心配する必要はない。そう、日本の中国学は論文のデジタル化や Web などの媒体による研究公開に対しては及び腰であるため、Google は評価できないからだ。但し、それは、「業界全体が取り残されているね…」という別な意味での容赦ない評価と同義ではあるのだが…。

Contents

学術サイト	中国 IT・ネット業界の動向	千田　大介 154
	Google	師　茂樹 160
	Google と学術情報	小島　浩之 162
	中国史	山田　崇仁 165
	仏教	藤原　敦 169
	Wikipedia とは何か	藤原　敦 171
	Wikipedia アンケートのまとめ	師　茂樹 175
	二松学舎大学における日本漢文学研究の取り組み	町　泉寿郎・上地　宏一 178
	mixi の「中国語学」関連コミュニティ	山崎　直樹 182
学術ソフト・製品	『中国基本古籍庫』—世界最大の漢籍データベース—	二階堂善弘 187

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❖学術サイト

中国IT・ネット業界の動向

千田　大介

❑ 混戦のポータルサイト

■ 百度 MP3 サーチの敗訴

ここ 1 年ほど、ポータルサイト業界は著作権訴訟の嵐に見舞われている。発端は、百度（**http://www.baidu.com/**）の MP3 サーチである。

中国で著作権意識の普及が遅れていることは周知のとおりであるが、こと音楽に関しては、ファイルサイズが小さく取り扱いが簡単であることもあり、新譜から海外の楽曲まで、ネット上に MP3 ファイルが満ちあふれている。もはや、音楽は無料で聞くものだと思われてしまっているかのようだ。

このため、中国のポータルサイトには音楽ファイル専門の検索サービスを提供しているところが多い。例えば中国トップシェアのサーチエンジン・百度の MP3 サーチ（**http://mp3.baidu.com/**）は、中国の音楽検索シェアの 20% を占め、一日 1,200 万ものアクセス数を誇る中国で最もポピュラーな無料音楽入手サービスになっていた。

百度 MP3 サーチ

これは無論、レコード会社にしてみれば営業妨害行為にほかならない。かくて 2005 年、百度をターゲットにした一連の著作権裁判が起こされた。9 月中旬に EMI の子会社・上海歩昇音楽文化伝播が MP3 の著作権侵害で百度に勝訴、下旬にはソニー BMG・EMI・ワーナー・ユニバーサルなどが共同で百度を訴えている。

百度側は単なる検索サービスを提供しているだけであり、データそのものは他の Web サイトが提供したものだと、P2P 裁判によく見られる論法で反論した。しかし、おそらく百度のシステムが MP3 データをキャッシュしてそれをダウンロードさせる形式になっていたためであろう、反論は通用しなかった。

現在も百度の MP3 サーチは相変わらずサービスを提供しているが、キャッシュからのダウンロードは廃止された。また、和解交渉と並行して、中国国内のレコード会社とタイアップした正規の音楽提供サービスの試みも始まっている。

周知のように、中国は海賊版が猖獗を極めているため、ソフトウエア・コンテンツ産業が成長しないという問題を抱えている。女子十二楽坊が日本や欧米での売り込みを優先している理由の一つはここにある。百度事件は、音楽提供サービスの正規版化・正常化につながる動きが始まるきっかけになったという意味で重要である。

またこの裁判は、中国の著作権問題の解決には民間企業による賠償請求訴訟が有効であることを示している。現在、中国国内のレコード会社が多額の賠償を求めてポータルサイトを起訴する例が増えてきているから、百度事件は広く中国インターネットの著作権問題是正へと発展していくかもしれない。ほぼ同時期に、中国政府の通達によって中国の大手メーカー製 PC がいずれも正規版 Windows をプレインストール販売するようになったこととあわせ、2005 年秋は中国 IT 著作権問題におけるメルクマールとなった。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

■ 増える地図検索

前号で、捜狐が提供するオンライン地図サービス、捜狗 MAP（**http://maps.sogou.com/**）を紹介したが、その後、各ポータルサイトが地図サービスの提供を開始し、競争が激しくなっている。

●Google 本地捜索

http://bendi.google.com/

Google は中国市場への直接参入の動きを強めており、2004 年に取得した百度株式を売却し、2006 年 4 月には中国語正式名称を「穀歌（谷歌）」に決定している。その Google のキラーコンテンツの一つが、2005 年 9 月よりベータ版の提供が始まった Google Map 中国版である。インターフェイスは英語や日本語のサービスと同様であるが、地図自体は Mapabc（**http://maps.sogou.com/**）のソリューションを利用している。

●百度地図捜索

http://map.baidu.com/

Google Map 中国版の後を追いかけるように、2005 月 9 月下旬にサービスを開始した。地図ソリューションは Mapbar（**http://main.mapbar.com/main.jsp**）。

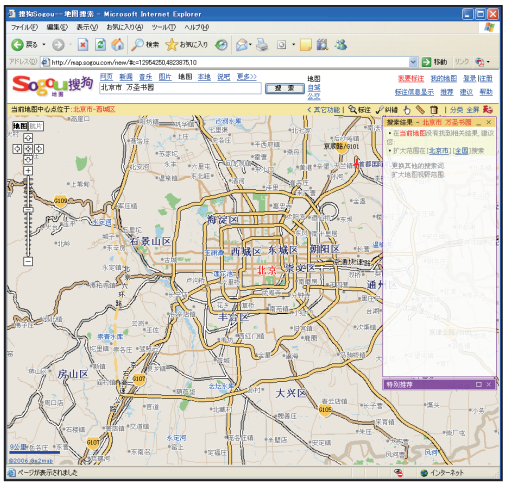
●愛問本地捜索

http://bendi.iask.com/

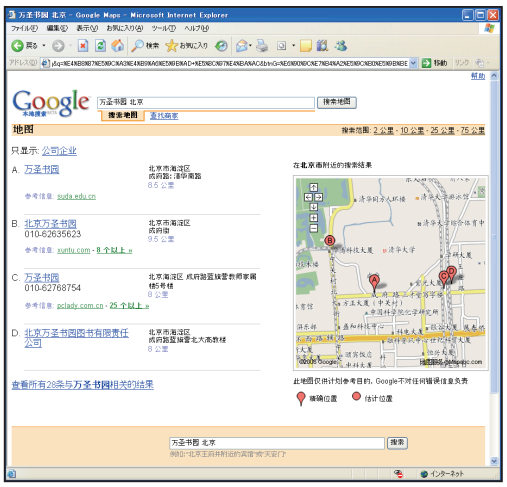
新浪が提供する地図検索サービス。中国のポータルサイトの地図サービスとしては、最も古いものの一つ。地図ソリューションは Google 同様 Mapabc で、インターフェイスも Google Map に似ている。

このように一気に増えた地図検索サービスだが、比較してみると使い勝手にかなりの差が見られる。地図検索は、企業・商店を有償登録するビジネスモデルで成り立っているが、その登録数にかなりの違いがあるのだ（図は、北京の万聖書園を各サービスで検索した結果である）。

筆者が試した限りでは、百度と愛問がヒットする情報数が最も豊富であった。Google はヒット数が多く検索結果の表示順位は的確であるが、Web から収集したものか街路名だけで番地の無いデータが多く、具体的位置が地図で表示されない例が目立つ。捜狗は登

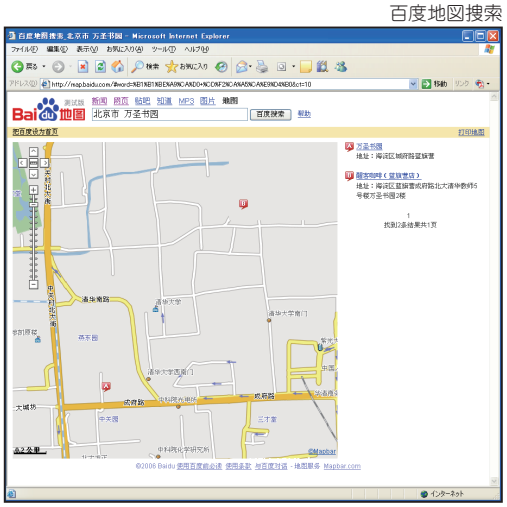


捜狗 Map（ヒットせず）



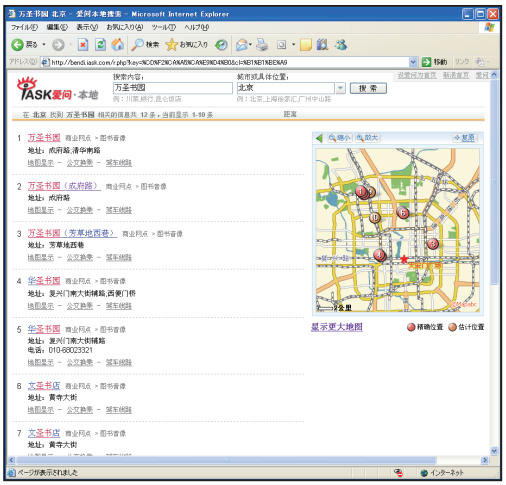
Google 本地捜索

百度地図捜索



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。



愛問本地搜索

録数が他よりもあきらかに劣っている。

ただ、いずれのサービスも、まだまだ登録数は足りないし、インターフェイスも一長一短である。また、ユーザーが地図の API を弄ることができないので、自分のページに地図を引用するような使い方ができなければ、地図の API を弄ることもできない。日本では Google Map API を活用したさまざまな地図サービスの提供が始まっているが、中国でも同様の使い方ができるようになると嬉しいのだが。

❑ ハイテク開発の光と影

■ 漢芯事件と C コアの挫折

C コア（中国芯）とは、中国が独自の技術によって開発した処理チップのことである。2000 年頃より、中国では科学技術省の 863 プロジェクト（中国ハイテク研究発展計画）の一環として、さまざまな C コアが開発された。竜芯・鳳芯・方舟そして漢芯、その成果は CPU から DSP まで多岐にわたり、やがて C コアが世界を席巻するのではないかと思わせるほどの勢いを見せた。しかし、2005 年から 6 年にかけて、C コアの信頼性を揺るがす事件が相次いだ。その象徴が、中国の黄禹錫事件こと漢芯事件である。

漢芯は、上海交通大学の陳進教授が開発したとされた DSP である。2003 年、中央政府や上海市幹部が列席する中、漢芯一号は世界一流の性能を備えた DSP チップとして華々しく発表された。以来、漢芯二号・三号・四号と相次いで発表され、IBM のオーダーを受けた、産業化も間近だ、などとアナウンスされ、40 項目もの助成金を助成金を獲得してきた。

しかし、2006 年初頭、清華大学の BBS に漢芯の内部告発文書がアップされた。漢芯一号はモトローラ製チップの表面にヤスリをかけて漢芯とプリントした偽造品、二号・三号もなんらの先端性を備えていない看板倒れ、陳進は国家のプロジェクト予算をアメリカの個人口座に貯めて私腹を肥やしている……。ネット上は、陳進らの責任を追及する声に満ちあふれ、果ては告発文でモトローラチップにヤスリをかけたとされた出稼ぎ労働者こそが、世界最先端チップを磨き出せる“超級民工”（スーパー出稼ぎ労働者）であると称えられる始末であった。

4 ヶ月の沈黙ののち、5 月になって上海交通大学による調査結果が発表され、偽造の事実を正式に確認するとともに、陳進に処罰が下された。しかし、大学当局の責任も、ピン数の違いから一目瞭然で偽造とわかるはずの漢芯一号を審査・認証していた上海市当局の責任も問われないという、非常にわかりやすい幕引きであった。

C コアの挫折は漢芯だけではない。かつて組み込み用 32 ビット CPU を発表し、“中国第一芯”として脚光を浴びた方舟。方舟を組み込んだネットワークコンピュータは、一時期大いに喧伝され政府によって大量に買い付けられたが、やがてそれが教育にも業務にも役に立たなかったことから放棄されてしまうと、2004 年には大量の国家の助成金を獲得しながらも CPU からの脱却を宣言して研究開発を中止し、2006 年、方舟は雲散霧消してしまった。

このほか、同じく 863 プロジェクトの成果であった麒麟 OS も、2006 年 4 月に海外のソースコードを引き写しただけの代物であったことが露見している。

■ 補助金がもたらす腐敗

漢芯・方舟・麒麟、いずれも、政府の助成金あるいは政府購買といった公的資金の大量注入が、かえって不正や失敗の温床になっているという共通点がある。

中国政府が毎年支出する科学研究経費は、合計 1,000 億元にも達するという。こういった研究資金を獲得するため、研究機関や大学のトップは各政府機関をかけずりまわる、いわゆる“跑部钱进”[1] に励んでいる。助成を決定する政府当局者は専門知識に欠け

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

ていてプロジェクトの可否を見抜く力を持っておらず、またメンツと保身のために自らの間違いを認めることはありえないので、評価はまったく機能しない。漢芯偽装事件の後始末が象徴的である。助成を受ける側にしても、苦労して研究開発し産業化するよりも、政府の金をもらって、あとは適当に誤魔化す方が商売としてははるかに美味しい。結果としてニセの研究成果が横行することになってしまう。

経済学者の楊小凱は後発劣位論を唱え、先進技術を導入することで発展途上国は一時的に経済成長することができるが、政治制度改革がなされないことが足かせになってやがては発展が頓挫してしまうだろうと警鐘を鳴らした。Cコアをめぐる事件は、現在中国が拠って立つ後発優位論の立脚点であるはずの科学技術開発さえもが、政府の過保護のために制度的腐敗に陥りつつあることを物語っている。

現在、共産党政権は政権の維持を最優先課題とし、制度改革に本格的に取り組む気配を見せていない。そろそろ危険水域に近づいているように見えるのだが。

❏ EVD 狂騒曲

■ EVD とは何か

EVD（Enhanced Versatile Disk）は中国独自の次世代 DVD 規格である。数年前から日本でも断片的にニュースが流れていたので、ご存じの方も多いだろう。中国独自の次世代 DVD 規格、中国でこれが普及したならば、その巨大な市場を背景に、ブルーレイでも HD DVD でもない第 3 の規格として成功を収めるのではないか、と考えた方もいることだろう。

しかしその実、EVD は、BD や HD DVD と真っ向戦えるような規格ではない。そもそも、EVD は光ディスクの規格ではなく、従来の DVD ディスクに、独自のコーデック・セキュリティによる高精細映像（1920 × 1080）を収録するものである。このため、収録時間は DVD よりも三割ほど短い。

ディスクが DVD 互換であるから、EVD はメディアプレーヤー影海風雷 2006 を入手すれば、PC でも再生できる。影海風雷 2006 は盛世竜田社の高精細映像対応メディアプレーヤーで、同社 Web サイト [2] から入手できる。英語版を使えばロケールを切り替えることなく、日本語 Windows 上で EVD を再生できる。ただし、高精細映像のデコードに多大な負荷がかかるようで、デュアルコア CPU のみの対応となっている。このように、「次世代 DVD 規格」の「DVD」は DVD ディスクのことではないのであり、むしろ「次世代 DVD-Video 規格」と言った方が正しい。

影海風雷 2006

EVD は 2004 年初頭に発売され、2005 年に中国情報産業省から電子業界推薦規格に認証された。しかし、EVD の登場は一般に 2 年遅かったと評されている。時期的に、BD・HD DVD という正真正銘の次世代 DVD 規格と真っ向対決を余儀なくされてしまったからである。

現在、EVD 対応プレーヤーは新科など一部のメーカーから発売されている。一方、EVD ソフトの供給はと言うとはなはだ心許ない情況である。中国・香港の映画会社の作品の一部が供給されているのみで、ハリウッドなど海外の有力映画会社の取り込みには完全に失敗している。北京では、2・3 の大規模小売店が 1 棚を EVD に割いている。しかし、売り場面積はいずれも DVD の 1/20 にも満たない。その他の都市では、そもそも EVD ディスクを見かけないところが絶対多数である。BD・HD DVD が発売された今となっては、EVD は早晩淘汰される運命から逃れ得ないであろうと、中国国内でも予測されている。

■ 内紛の勃発

このような EVD の窮状を際立たせているのが、昨年来、世間と業界を騒がせている EVD 陣営の内紛である。

EVD 規格制定の中核を担ったのは、張宝全の今典グループと北京阜国数字社である。今典は規格の開発投資を行い、上広電・新科などの投資によって設立さ

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

れた阜国が、EVD の技術開発および規格の運用にあたっていた。しかし、EVD が収益を上げるまでには育たず、また今典との関係も悪化する中で、2005 年 11 月、阜国は VMD という片面四層ディスク技術を持つ英国 NME 社との間で、自社株 69.09% を 850 万ドル＋ NME 株 40% と交換することで合意した。

このニュースが流れるや、張宝全は EVD 技術を海外に売り渡す売国奴であると阜国を糾弾し、さらに阜国の社長・郝傑を今典グローバルの資産を横領したとして告発、郝傑が 2006 年元旦から一ヶ月ほど収監される結果となった。その後も、阜国は EVD 特許を抵当に資金を調達していることが明らかになるなど、苦境が続いている。

一方の今典は、各地の映画館や学校に EVD デジタル映画上映システムを寄贈するとともに、全国に EVD ディスク専売店をオープンし、BD・HD DVD の中国進出前に、販売チャンネルを確立しようと躍起になっている。

■ 独自知財権路線の限界

EVD 開発のきっかけは、DVD 特許権使用料支払い問題にある。中国電器メーカー各社は 1990 年代末以来、なんらの特許使用料を支払うことなく安価な DVD プレーヤーを世界に輸出し、DVD 規格の開発にあたった日系メーカーや正規のライセンスを受けた各国メーカーのシェアを浸食し、2002 年時点で世界シェアの約 70% を占めるに至った。このため、2000 年前後から DVD6C（日立・松下・三菱・東芝・タイムワーナー・JCV ＋ IBM・三洋・シャープ）・3C（ソニー・フィリップス・パイオニア）・1C（トムソン）などの DVD 共同ライセンス組織は、欧米での中国製 DVD プレーヤーの輸入差し止め提訴、中国メーカーとの特許権支払い交渉などの働きかけを強めた。そして、中国が WTO に加盟した翌年、2002 年には、DVD プレーヤー 1 台あたり 6C に 4 ドル、3C に 5 ドル支払うことで交渉は妥結した。

これは中国が初めて直面した国際的な知的財産権紛争であり、その教訓として、独自の知的財産権を保有する必要性が広く業界に認知されるようになった。EVD 開発のきっかけもここにある。

しかし、前述のように EVD は DVD-Video の代替規格でしかない。従って、特許権支払い義務が消えるのは、DVD-Video 規格の MPEG-2 特許に対してのみであって、DVD ディスク再生装置としての特許はまた別問題である。まして、EVD ディスクが普及せず、従来の DVD とのコンパチブルにならざるを得ない現状では、EVD と DVD、特許料の二重払いが必要になるので、中国独自規格であるメリットは無い。

C コアの問題についても言えるが、中国は一足飛びに世界のトップに肩を並べる夢の虜になっている。これは、世界の経済や産業のシステムを理解した上で、その頂点を占めて世界のヘゲモニーを握ろうという、ある意味、日本の場当たり的な政策・戦略に比べて遥かに志の高いやり方であるとも言えるのだが、いかんせん中国の場合は基礎の部分が脆弱すぎる。

ここ二三年、「中国が独自の知的財産権を保有する」というカンバンのもと、さまざまな最先端工業製品が発表されている。しかし、神舟ロケットにせよ悲劇の国産新幹線・中華之星にせよ、主要な部品は海外製に頼っているのが現状である。国際標準に認定された携帯電話 3G 規格・TS-SCDMA でさえ、全特許のうち中国側が保有するのはわずか 7% に過ぎず、しかも携帯電話機用チップの供給体制の不備といった問題から、商用化が遅れに遅れている状態である。国際的な成果を目指す華々しいプロジェクトに大量の資金が注がれる一方で、基礎研究は軽視され、企業の研究開発意欲も低い。

EVD も、最先端光ディスク規格の開発という志は大いに結構だが、実際に光ディスクそのものを開発するだけの研究・技術の蓄積が無いために中途半端なものしか生み出しえず、結局は失敗の運命を免れられない。これは、DVD 特許事件への過剰反応であり、大躍進的な成果主義の反映でもある。特許料という不労所得を獲得する、あるいは巻き上げられないための独自規格バクチの重要性が説かれる一方、特許料を支払いつつもデザイン・機能・性能などの付加価値によって売れる商品を作る、というごく当たり前の地道なビジネスモデルの重要性が見失われているのである。

筆者は悲観的な見方をするクセがあるので、ついつい中国の将来についても悪い方に考えてしまう。しかし、考えてみれば中国の改革開放の歴史はわずか 30 年、社会主義市場経済に至ってはわずか 10 年そこそこである。これらの事件や失敗も、百年の視点に立てば、中国に市場経済や公正な社会ルールが定着する上で避けて通れない、通過儀礼的な学習の機会であるのかもしれない。いや、是非ともそうあって欲しいと思う。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❏ 人文情報処理企業の動向

■ 書同文

書同文[3]は前号でも紹介したように、近年携帯電話ショートメッセージなどの通信付加価値業務に傾倒しているが、文献データ製品の開発・発売も続けており、『清会典』・『清実録』CD-ROM の発売が 2006 年内に予定されている。技術的には、これまでの各種文献データ CD-ROM と同様のものであろう。また、開発が伝えられていた『四部備用』については、画像収録に関する権利問題が解決していないため、発売の目途は立っていないとのことである。

また、清華同方と共同で、CNKI と古典文献データベースとを融合した、オンライン学術プラットフォームの研究開発を進めているという。完成の暁には、論文全文データベースと古典文献データベースが連係した、これまでにない高度な学術情報データベースになるものと期待される。

ただし、同社のシステムは今のところ Ext.B への対応が不完全であるという。完全な対応は、現在開発中の新バージョンの文献処理ソフトの登場を待たねばならないようだ。

■『文淵閣四庫全書電子版』バージョン 3.0

創新力博[4]では春節前後に『四庫全書』の新バージョンのデータ作成を完了した。そして現在、既に四庫全書電子版のオフィシャルサイト[5]には、発売時期は明記されていないものの、バージョン 3.0 に関する情報が出ている。それによれば、旧版が HTML・CJK+（CJK 統合漢字＋Ext.A＋外字）であったのが、バージョン２では XML・Unicode 4.0（サロゲートペア含む）対応となり、従来電子テキスト化されておらず画像処理だった史書・地方史等の表、あるいは図版のキャプションなどが電子テキスト化され検索できるようになる。この表の中の文字が検索できない点は、旧版で最も不便を感じた点であるから、今回の対応は喜ばしい。これにともない、文字数も旧バージョンに比べて一千万字以上増加している。また、この過程で、Unicode 4.0 未収録の漢字が 1 万字ほど見出され、それらは外字として処理されている。あるいは将来的に Unicode への追加申請があるかもしれない。

『四庫全書』バージョン 3.0 は、2006 年末か 2007 年初頭には発売されるのではないかと思われる。ただ、日本の大学の予算情況では、旧バージョンを新バージョンに買い換えるのはかなり難しいのではなかろうか。販売元の香港迪志文化には、是非とも格安のバージョンアップ版を設定していただきたい。

❏ 出版規制とインターネット

■ 論文のネット補完

中国では胡温新政が始まっても、期待された言論の自由化は進まず、むしろそれ以前の路線を踏襲・強化した言論引き締めの動きが強まっている。中国では、学術書や論文であっても、そこから逃れることはできないのであり、政治的に不穏当とみなされた部分は出版に際して自主規制で削除されてしまう。

このような現実に対して、ここ数年、インターネットを利用した論文補完という方法がしばしば見られるようになっている。

筆者は『Chinese Culture Review』という本を邦訳しているが、原書の原稿にあった過激な記事が、紙版で書き換えられたり削除されたりした例が多々見られる。そうした記事は、大抵が原著者のブログなどにそのまま書き込まれているのである。現代文学・文化関係の論文や研究書についても、同様の例が多く見られる。中国では、インターネットの言論規制は紙版ほど厳しくない（あるいは徹底できない）ので、ことのような現象が発生するのである。こと学位論文については、削除されていない完全版を見るために、香港中文大学のライブラリーを訪問する研究者が増えていると側聞している。

言論統制は、なにも今に始まったことではない。中国の知識人は王朝時代以来の「春秋の筆法」の伝統を受け継いで、何重ものオブラートに筆鋒を包み込んだり、あるいは筆を曲げたりしてきた。それが、ネットの出現によって、本人を訪ねて本音を聞き出す困難な努力をせずとも、堂々とアクセスできるようになってきたのである。

ともあれ、中国研究、特に近現代研究では、言論統制を念頭に、インターネット検索や独自の情報網を活用してインターネット情報を確実に入手しなければ、学術論文の本当の意図を見誤る可能性が高くなってい

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

る。もはや紙媒体だけでは中国を研究し得ない、そんな時代に突入しているのである。

注

[1] 「省庁を駆け回って、お金を得る」の意。“跑步前进”「駆け足で前進して進む」に掛けた言葉。

[2] http://www.longixsoft.com/

[3] http://www.unihan.com.cn/

[4] http://www.ilibo.com/

[5] http://www.sikuquanshu.com/

Google

師　茂樹

❑ 進化する Google

■ すでに／はじめから検索サイトではない

アメリカと比べ日本では Google はあまり人気がないとのことであるが、何か調べものをする際、「とりあえずググる」という人は多いのではないだろうか。

図 1　Google Spreadsheets

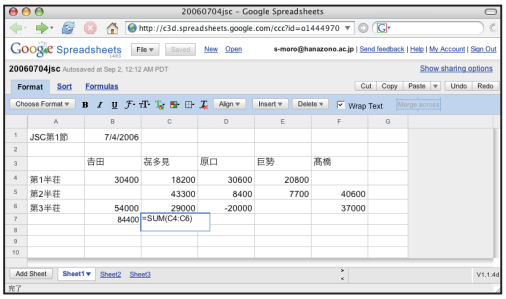
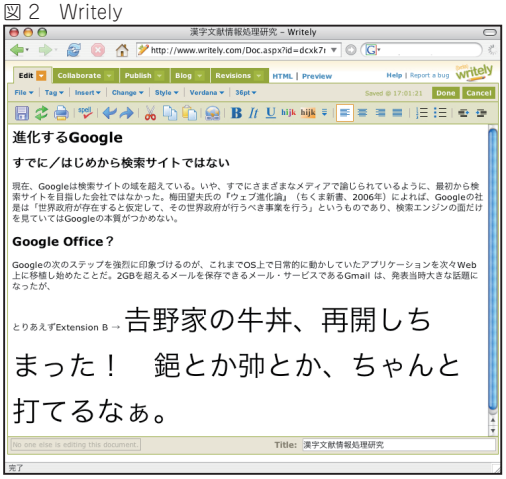


図 2　Writely



しかし、検索サービス以外の機能について、どの程度利用しているだろうか。

現在、Google は検索サイトの域を超えている。いや、すでにさまざまなメディアで論じられているように、最初から検索サイトを目指した会社ではなかった。梅田望夫氏の『ウェブ進化論』（ちくま新書、2006 年）によれば、Google の社是は「世界政府が存在すると仮定して、その世界政府が行うべき事業を行う」というものであり、検索エンジンの面だけを見ていては Google の本質がつかめない。最近の Google の動向について、簡単に見てみよう。

■ Google Office ？

Google の次のステップを強烈に印象づけるのが、これまで OS 上で日常的に動かしていたアプリケーションを次々 Web 上に移植し始めたことだ。2GB を超えるメールを保存できるメール・サービスである Gmail[1] は発表当時大きな話題になったが、今度は表計算アプリケーションの Google Spreadsheets[2]（図 1）が公開された。また、Google はウェブ上のワープロを開発する Writely[3] を買収しており、その β 版がすでに利用できる（図 2）。

いずれもブラウザ上のアプリケーションなので Microsoft Office のような高機能は望めないし、また DTP などの専門的なソフトウェアなどは提供されることはないだろう。

しかし、インターネット上にギガ単位のディスクスペースが提供され、そこにファイルを保存しておけば一般的なブラウザさえあればどこでも日常的な仕事ができるというのは、ワープロのファイルを USB メモリに入れて常時持ち歩いている、というような人には魅力的に見えるのではないだろうか。多言語機能など

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

は基本的にブラウザの能力に依存するため、本誌読者にとって気になる多漢字環境は Unicode ベースですでに実現されているし、Google にもとからある強力なファイル検索機能も便利だ。何より、メール、ワープロ、表計算、ファイル管理システムなどのアプリケーションがブラウザ上の統合環境で利用できるというのは、インターネット上のオフィス・スイートであると言ってよい。Google Apps for Your Domain[4] というサービスはまさに、そのためのものであるという。

ここまで来ると次は Google OS か、という憶測が流れるのも故のないことではない。実際、YouOS（図 3）のような所謂ウェブ OS が公開されており、技術的には問題のない話だ。現在 Google はこのような方向性について否定的なようだが、Windows のような GUI を持つかどうかはともかく、プラットフォームと呼んでよいようなものにはなっていくのではないだろうか。

❑ 古典学業界にも進出？

話は変わるが、本誌読者（の一部）に関心があると思われる話題として、Google が古典に関するサービスを開始したことがあげられるだろう。6 月、Google Book Search という書籍検索サービスの中に “Explore Shakespeare with Google” というページ [5] が開設された。また 8 月には、同じ Google Book Search の中で著作権の切れた古典作品（『ハムレット』『神曲』など）を PDF で公開できるサービスを開始している。

これだけ見ると、単なるプロモーションか、あるいは著作権処理が容易なところから手をつけただけのようにも見える。しかし、Google がこのようなことに着手したということは、インターネット上の古典作品／古典学が、研究者が認定してきた従来の価値体系から、前掲の梅田氏の言う「民主主義」による「世界中の知の再編成」に晒されるということである。漢字文献にこの話がおよぶのはまだまだ先になりそうだが、注目しておくべきことではないだろうか。詳しくは、後述の小島氏のレビューを参照されたし。

❑ Google 八分

さて、その「民主主義」であるが、これは PageRank[6] という方法によるものであるが、必ずしもこれだけによって運用されているわけではなく、Google

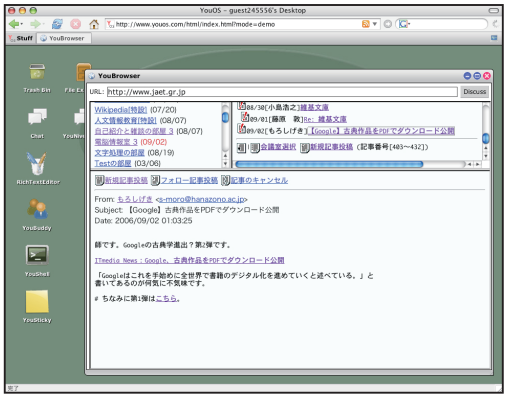


図 3　YouOS

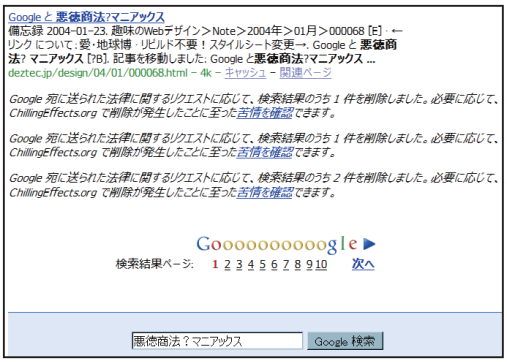


図 4　いわゆる「Google 八分」の一例

による「調整」がなされている。この「調整」は、例えば「Google 宛に送られた法律に関するリクエストに応じて」行われるようであるが（図 4）、その基準が明確にされておらず、「検閲だ」「Google 八分（＝Google による村八分）だ」と問題視する声も少なくない。

中国で Google の検索結果に対して検閲が行われていることは知られているが [7]、日本でも同様のことが行われているのである。

注

[1] http://www.gmail.com

[2] http://spreadsheets.google.com

[3] http://www.writely.com

[4] https://www.google.com/a/

[5] http://books.google.com/googlebooks/shakespeare/（http://www.google.com/shakespeare でもアクセス可能）

[6] 「Google の人気の秘密」（http://www.google.co.jp/intl/

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

ja/why_use.html）、馬場肇「Google の秘密 - PageRank 徹底解説」（http://www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/~baba/wais/pagerank.html）

[7] 千田大介「中国 IT・ネット業界の動向」（本誌第 6 号、2005 年）

Google と学術情報

小島　浩之

❏ Google の席捲

ここ数年、Google が単なる検索エンジンに止まらず、様々な業界に着々と進出してきている。Google については佐々木俊尚氏の『グーグル 既存のビジネスを破壊する』（文春新書 501）が非常によくまとまりこの企業の実態を明解に論じている。この書の中で佐々木氏は、もはや Google は単なる検索エンジンの会社ではなく、「検索エンジンを軸にして新たなインターネットのパワーを生み出し、そのパワーをテコにしてありとあらゆる業界へと進出を図ろうとしている巨大企業」だと指摘する。佐々木氏の本の副題に“既存のビジネスを破壊する”とあるのは、まさに Google の企業的性質を言い当てた言葉だと言える。

Google が学術分野にも不可欠なツールになっていることは、本誌第 6 号で既に山田崇仁氏が採り上げた通りである [1]。学術分野と特に関係の深い部分では Google Scholar と Google Book Search がある。前者は学術記事や学術論文の、後者は書籍の検索を専門とするものであって、ものによってはそのまま全文を閲覧できる電子ジャーナル・電子図書館的な機能を有している。図書館はビジネスとはほど遠い業界であるが、このように Google は図書館をも席捲しつつある。Google は“既存のビジネス”に限らずビジネスとはほど遠い分野にもその勢力を一途に拡大しつつあるのだ。

Google Scholar や Google Book Search は既に数年前から公開されている。従ってその内容については本レビューでとっくに採り上げられていなければならないはずである。しかしその全貌がなかなか見えず、また筆者の力量不足もあって、どのように論評すべきか手をこまねいたまま数年が過ぎてしまった。日本語版が公開されないこともあって筆者に論評しなければならいという切迫感がなかったことも要因の一つかもしれない。ところが最近、Google Scholar 日本語版が公開され、Google Book Search は日本の出版社の参加を呼びかけはじめた。さらに中国では Google との共同プロジェクトがかなり進んでいるという。こういった状況になっては本レビューで採り上げない訳にはいかなくなったのである。そこで本レビューでは例年と趣を変え、Google の動向を軸にして図書館界を垣間見ることにする。遅きに失した感もあるが、しばらくお付き合いいただければと思う。

❏ Google Scholar

■ 日本における Google　Scholar

Google Scholar は 2004 年 11 月に β 版が公開された。長らく欧文サイトだけの時期が続いたが、今年に入ってから数カ国語での提供が開始されている。この間 2005 年夏には九州大学附属図書館が“きゅうと LinQ”という学内で利用可能な電子ジャーナルを検索するサイトを開設した。この際に Google Scholar と連携し、九州大学内の IP アドレスであれば Google Scholar の検索結果から直接に九州大学の契約する電子ジャーナルにリンクしているという。

また 2006 年 8 月 7 日付の日本経済新聞朝刊では、Google が国立情報学研究所（以下 NII）などと連携し、日本語の学術論文をインターネットから無料で検索できる Google Scholar 日本語版のサービスを年内に開始すると報道された。NII に登録される約 130 学会・50 万件程度の論文が検索の対象となるとのことである。おそらく現在の CiNii の内容 [2] のうち旧 NACSIS-ELS に相当する部分が対照となるのだろう。

2006 年 9 月 1 日現在、まだ NII との連携はなされていないが、Google Scholar 日本語 β 版はひそかに公開されている。

●Google Scholar 日本語 β 版
http://scholar.google.com/intl/ja/

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

■ 中国における Google　Scholar

現在 Google Scholar で日本語論文はほとんどヒットしない。これに対して中国語論文のヒット数は膨大である。実は中国では日本より若干早い時期に Google Scholar と出版界・図書館界との連携が進んでいた。中国国家図書館では 2005 年に、また中国科学図書館は 2006 年 4 月に Google Scholar と連携している。万方数据库、唯普数据库をはじめとして電子ジャーナル発行元や各種出版者との提携も盛んで、2006 年 1 月には Google Scholar 中国語 β 版がリリースされてる。

●Google Scholar 中国語β版

http://scholar.google.com/schhp?hl=zh-CN

●Google Scholar 台湾β版

http://scholar.google.com.tw/

■ 今後の展望

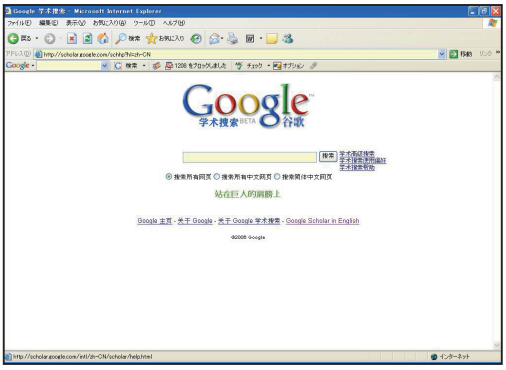
Google Scholar の機能で特に興味深いのは、Citing すなわち他文献への引用数を表示していることだろう。これは NII の CiNii でも一部の分野に実験的に行われている。自然科学の分野では論文の学術的価値を計る尺度として引用数が用いられている。Google が引用数を明示したことで、この流れが人文・社会科学分野にも本格的に波及する可能性がある。

また Google Scholar はジャーナルだけに止まらず、書籍でない学術文献をも対象としている。例えば中国国家図書館では金石拓本、西夏文献、敦煌文献などがその対象になっている [3]。先の師氏のレビューでも、Google Book Search による西洋古典の公開について触れられていたが、Google は古典業界にも着々と進出を計っているようである。今後、研究機関の公開する電子化資料や電子図書館のコンテンツなどが一挙に Googl Scholar で検索できるようになるかもしれない。

❏ Google Book Search

■ Google Print から Google Book Search へ

Google Book Search は当初 Google Print と呼ばれていた。しかし Print の語が印刷を連想させるとして、2005 年の秋に名称が改められた。ただ本稿では、両者を時期によって使い分けるのは煩雑なため Google Book Search に表記を統一する。



Google Scholar 中国語β版のトップページ

Google Book Search は大きく二つのプロジェクトに分けて進められている。一つは出版社との、もう一つは図書館との連携である。

■ 出版業界と Google Book Search

初期の段階では出版社との関係に重点が置かれていた。Google Book Search は 2003 年から実験がはじまった。当初は専門の利用者インターフェイスは無く、暫くしてから専門のインターフェイスβ版（英語版）が公開され、Google の検索コンテンツの一つとなったように記憶する。

●Google Book Search　β版

http://books.google.com/

2005 年には対象地域を世界 14 カ国に広げ、2006 年には日本語β版（日本語名 : Google ブック検索）を公開予定し、日本の出版社の登録を呼びかけている [4]。

Google Book Search では、検索によりキーワードに合致する書籍があれば、書誌などの基本情報を表示するページへと導かれる。この時、著作権の有無や許諾の有無により内容が数頁から全頁表示される場合もある。利用者は内容を確認した上でさらにリンクされているオンラインショップで書籍を購入できる仕組みになっている。

■ 図書館界と Google Book Search

一方で、Google は図書館に対して “Google Books Library Project” を立ち上げた。これは図書館の所蔵する書籍を Google がスキャニングし電子化して、Google Book Search で公開しようというものである。もちろん当該書籍が販売されている場合は、先に述べ

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

たようにオンラインショップへリンクされている。

このプロジェクトは当初、ハーバード大学図書館、スタンフォード大学図書館、ミシガン大学図書館、オックスフォード大学図書館，ニューヨーク市立図書館が中心であった。さらに今年に入って、ケネディ大統領図書館の文書、写真、記録といった非図書文献のデジタル化にも取り組んでいる。またアジアでは中国の清華大学出版社と少年児童出版社が Google Book Search のプロジェクトに加わることも判明した [5]。なお日本では、今のところ当該プロジェクト始動の予定はないそうである。

■ 著作権問題

Google Book Search は世界で著作権に関する議論を巻き起こし、一部では訴訟沙汰にまでなっている。このため “Google Books Library Project” による書籍のスキャン事業は、一時停止にまで追い込まれた。これは一部の図書館について著作権の有無に関わりなく、全蔵書をスキャンする計画になっていたことに、権利者団体が反発したことによる。最終的に Google 側が計画を変更し、著作権が消滅するか著作権の無い書籍に限って、全文を公開することとした。

ただ、一連の報道や Google 側の公開情報を見る限り、著作権の存在する書籍についてスキャン自体を取りやめたのか、スキャンはするが公開しないということなのか、判然としない。日本の場合、後者であると著作権法に抵触する可能性が高い。たとえ公開をしないのであってもスキャニングという複製行為は行われている。企業の事業として行う以上、私的複製には当たらない。図書館と提携するといっても、図書館における複製だと主張するのは無理がある。つまりスキャニング自体が複製権の侵害に当たるのである。さらにスキャンしたデータを検索用のインデックスとして、サーバー上に置いているなら、公衆送信権の侵害に当たる可能性もある。

種々の媒体で日本の図書館も早く Google と提携できるようになって欲しいとの声がある。しかしこの点が明らかにされない限り、図書館は安易に連携をとるべきではないだろう。

❏ おわりに

昨年度のレビューで筆者は「Google による google scholar, google print といったサービスの拡張は、図書館の驚異ともタッグを組むべき仲間ともなっている。」[6] と述べた。Google Scholar や Google Book Search の登場は、著作権の問題もあり出版界にとっては驚異の対象になったようだ。他方、図書館においては以外と好意的に受け取られている。Google は既存のビジネスにとっては驚異であったかもしれないが、ビジネスからほど遠い存在の図書館にとってはタッグを組むべき仲間となっているようである。この意味で中国国家図書館副館長の陳力氏の次の言は非常に興味深い。

> 物事は常に発展していく。図書館は常に前進していく。Google も発展を続けていくだろう。もしも Google やその類似品が図書館の社会的責任を担えるようになり、図書館のすべての機能を搭載できる日が来るとすれば、図書館員はむしろそれを喜ぶべきだと私は思う。なぜならそれは、この世界にまたひとつ超大型図書館が加わるということなのだから [7]。

「昨日の友は今日の仇」とならぬよう、利用者のことを第一に考え、双方がよりよい連携を続けられることを切に願いたい。

注

[1] 山田崇仁・小島浩之「データベースナビゲータ」（『漢字文献情報処理研究』第 6 号 , 2005.10）

[2] CiNii については昨年度の本レビューを参照のこと。（拙稿「図書館と OPAC・漢籍目録」（『漢字文献情報処理研究』第 6 号 , 2005.10））

[3] http://www.people.com.cn/GB/paper1787/16430/1449356.html

[4] http://books.google.com/intl/ja/googlebooks/about.html

[5] http://www.libnet.sh.cn/yjdd/list.asp?id=2383

[6] 前掲注 [2] 拙稿

[7] 陳力「Google と図書館」（『情報管理』48-5, 2005.8）http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/48/5/292/_pdf/-char/ja/

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

中国史

山田　崇仁

❏ はじめに

Web 上でのテキストデータの公開は、結局の所中央研究院のコピー系が相変わらず幅をきかせている。また、元々そのデータの出所すらわからなくなっている電子テキストも数多いのではないだろうか。

現状では、新たな電子テキストの主戦場は、市販のデジタルデータベースに移っていると言えよう。本誌でも二階堂氏が紹介している『中国古籍庫』は、研究者垂涎の代物であるが、我が国にはこの存在を知りすらしない、あるいは知っていても値段の関係で購入できない研究機関も多いだろう。このような情報格差が研究にどのような影響を与えるのか、色々と複雑な思いがする今日この頃である。

❏ 漢籍電子文献 V.3 について

定番中の定番である漢籍電子文献のバージョン３が徐々にその姿を見せるようになってきた。このバージョンは、UTF-8 化による外字の排除や、XML による文書構造を活かしたデータ構築が注目すべきところであるが、問題も多い。

外字については、UTF-8 化による外字の排除は喜ぶべきだが、まだ外字のままのデータがあり、外字化されていない「●で表記」される部分はそのままである。加えて問題なのは、「Unicode にない文字を画像で表記」する点だろう。その意味では、検索に使える外字の方が使い勝手がよかったかもしれない。

さらに、既存の外字と Unicode との対応表が提示されておらず、どのように処理したのかが気になる。

また、XML による構造化処理も、昨今の流行を反映した試みであり、それ自体は評価できる。しかし、XML の構造自体に問題があり、結果としてバージョン３を使い物にできない代物にしてしまっている。一つだけ例を挙げよう。

伝統中国の根幹イデオロギーである「十三経」については、従来「十三経」という項目があったのが、バージョン３では、叢書のサブカテゴリーとなっている。現代の位置づけではそうなのかもしれないが、伝統中国学の四部分類の要素もカテゴリには加味してほしいものである。加えて XML で「本文＋校」の構造になっているが、恐ろしいことに、「本文」に「経文」・「疏」・正義」、「校」には「注」・陸徳明『経典釈文』・阮元『十三経注疏校勘記』が同レベルで扱われているのである。

本来、これらのテキストデータを XML でどう構造化するかはデータ構築をする側の自由である。しかし、漢籍電子文献バージョン３のような元々のテキストの構造を理解しない＋それを破壊する XML 構造化モデルは利用者の無用の混乱を引き起こすだけであり、むしろ使い勝手を悪化させる代物でしかない。

結局のところ、これらの混乱は、元テキストの構造を理解していないことに起因すると言える。従って現状では、人文系の分野との共同作業を怠った？　結果として引き起こされる悲劇の格好の事例になってしまっている。結局、単純にデータベースを作って終わり！　というのではなく、それぞれのテキストの構造に則したモデルを設定し、その上で、XML タグ付けを行い、モデルに問題があればそれを柔軟に変更可能な仕組みを作っておかないとだめなのだろう。

以前、本会で漢籍電子文献の立ち上げに尽力された陳弱水氏の講演を拝聴したが、その際に当該プロジェ

『礼記』王制の経文と正義を表示

【圖】

王者之制祿爵公侯伯子男凡五等諸侯之上大夫卿下大夫上士中士下士凡五等校　【二五象五行剛柔十日祿所受食爵秩次也上大夫曰卿。王者如字徐于況反十日人一反】

【圖】

[疏]王者至五等校　【王者至五等惠棟校宋本無此五字】○正義曰此一經論為王者之制祿爵公侯卿大夫以下及士之法凡王者之制度祿爵為重其食祿受爵之人有公侯伯子男並南面之君凡五等也其諸侯之下北面之臣有上大夫卿有下大夫有上士有中士有下士凡五等也南面之君五者校　【南面之君五者閩監毛本同考文云宋板者作等盧文弨校本云按下者字亦當作等而考文不著】法五行之剛日北面之臣五者法五行之柔日不以王朝之臣而以諸侯臣者王朝之臣本是事王

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

Google Earth を利用したディジタル・シルクロード・プロジェクトのディジタル・シルクロード地名集

クトは、新しいものには飛びつくが、継続的なメンテナンスやバグ取りには興味を示さないという事を伺った。なるほど、バージョン３の現状を見る限り、それは納得の仕様なのだなあと感じた次第である。

❏ Google マップを歴史研究に利用する

Google マップは、Google が提供する、いわゆる「Web2.0」的なサービスのひとつである。

地図と衛星および航空写真を組み合わせて、地球上のあらゆる場所を検索するという目的のもとに開発・公開されており、筆者も日常的に使用している。

Google マップ、特に衛星・航空写真の画像を眺めていて、ふと「これを授業に活かせないかなあ？」と考えたことがある。最近の更新で航空写真部分の増加されたことにより、精細な画像が見られるようになったこともその考えに拍車をかけた。

Wikipedia 日本語版　元（王朝）の項目

授業で中国史を教えていて、地図や画像をよく使う。それぞれの地図はよくできているが、どうしてもスペースの都合上一部が切り取られたものでしかなく、中国という空間全体、あるいは地形ふまえたやり方ができないかなあと考えていた。

レビュワーが大学院で学んでいるころは、ランドサット衛星写真のプリントされたものを利用していた。今でも、近年利用可能となったアメリカの偵察機・衛星の精細な写真をもとにした遺跡の調査が行われていると聞く。これらの写真は確かに便利だが、プリントである以上、ある一定の枠で切り取られているという限界がある。

ところが Google マップは、地球全体を対象にシームレスに画像データをつなぎ合わせているので、枠で切り取られるという制約がない。また、Ajax や Google Earth のデータファイルと組み合わせることにより、玄奘三蔵の天竺行の行程をたどるといったような動的に地図を閲覧することも可能である。

これは授業に活かさないわけにはいかないだろう。今のところレビュワーがやれているのは、単なる便利な地図としての利用でしかないが、Google マップこの類の授業をイメージの面で保管可能な可能性を十分に秘めているといえるだろう。

また、後で紹介する China Historical GIS やディジタル・シルクロード・プロジェクトは、Google の公開する衛星画像を利用してサービスを提供している。

❏ Wikipedia とどう向き合うか？

オープンソース百科事典として知られる Wikipedia（詳細は、本誌藤原・師両氏によるレビューを参照されたし）だが、サーチエンジンの検索結果上位に表示されるようになったこともあり、情報源の一つとして無視できない存在となってきた。

日本語版は芸能・サブカルチャーの情報が充実していると言われつつも、最近中国史関連の情報が徐々に増えつつある。また、外国の歴史である以上、Wikipedia 中国語版の情報はさらに充実している。レビュワーもよく利用しており、特に事実の羅列（皇帝の謚一覧等）に関わる情報については、非常に便利なので重宝している。

しかし、専門家としての目から見た場合、記述内容のレベルが極端なまでに分かれるなあと思うのが正

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

直なところである。「元（王朝）」のように、明らかに専門的知識を持った方が書いていると見受けられる項目もあれば、今から 30 年くらい前の概説書的記述に終始しているものもある。辞典である以上、多くの研究者が妥当だと了解している情報を載せるべきであり、多少古い情報が載るのはやむを得ないのだが、多くの人が Wikipedia を利用する今日、専門家の立場から積極的に執筆に参加すべきなのかもしれない。

Wikipedia 日本語版の伝統中国学関連の情報が異様に充実する。それ自体、日本中国学の学識を世間に発信することにもなろう。講座や学会ぐるみで取り組んでいただきたいと思うのである。

❏ 歴史地理関係

現在、レビュワーの仕事の関係で歴史地図に関わる仕事をしており、その中で見つけた Web サイトをいくつか紹介しておくことにする。

●行政区画網（GB）

http://www.xzqh.org/

有志による中国の行政区画に関する Web サイト。現在の行政区の変遷を追っかけるのがメインコンテンツだが、歴史的行政区画に関するページもある。

●中華文明之時空基礎架構（BIG5）

http://ccts.ascc.net/index.php?lang=zh-tw

中央研究院のプロジェクト。いわゆる GIS（地理情報システム）にもとづいた各種データを公開している。映像資料として、歴代の彊域・黄河・国都などの変遷を、時系列の変化に従って動的に変化可能なものを公開している。また、データベースとしては、中国歴史地名検索・中国地方志書目サーチなどが公開されている。

●China Historical GIS（英語）

http://www.fas.harvard.edu/~chgis/

ハーバード大学が公開する中国歴史地理 GIS である。地名検索（但しウォード式アルファベット入力）が可能だが、歴史地理といいつつ、情報が新しい（前世紀末）場合があるので注意。また、当該地名から各種地図（Google Map 等）にリンクが張られている。

●ペリー・カスタネダ地図コレクション：

http://www.lib.utexas.edu/maps/historical/history_china.html

米テキサス大学の所有するペリー・カスタネダ地図コレクションでは、多くの地図の画像が公開

中華文明之時空基礎架構

されている。Historical Maps of China に、清朝末～民国期の年の地図が多く掲載されている。そのほか、**http://www.lib.utexas.edu/maps/ams/china/** では、「China 1:250,000 Series L500, U.S. Army Map Service, 1954-」（旧米国陸軍地図局。元データは中華民国 29-30 年（1941-42）の実測）が閲覧できる。

❏ その他

●浙江工商大学 日本文化研究所（中国語・日本語）

http://www.zdrbs.com/

円仁『入唐求法巡礼行記』・成尋『参天台五臺山記』データベースなどが公開されている。

●中國哲學書電子化計劃（英語　中国語）

http://chinese.dsturgeon.net/

中国古典の電子テキスト＆検索機能を公開。テキストの入手先は不明だが、中華文化網系統のものだと思われる。GB18030 で構築されているのは珍しい。

『子』のように、原文と併せて現代中国語訳や英訳を表示する機能や、特定の語彙に対し、出現状況一覧へのリンクが張られているのが特徴。

●国学宝典

http://so.guoxue.com/

●百度国学

http://guoxue.baidu.com/

何れも、中国での電子テキスト構築の大手である国学に関わる Web サイト。簡体字であるため筆者は余り食指が動かないのだが、古典の普及という意味からはこういうデータが増えてくるのも好ましいと思える。

●維基文庫（UTF-8）

http://zh.wikisource.org/wiki/%E9%A6%96%E9%A1%B5

ウィキソース（Wikisource）の中国語版。ウィキソー

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

拓本文字データベースで「郡開國公」を検索した結果

スとは、主にパブリックドメインや GFDL で提供される文書などの収録公開を目的とするプロジェクト（以上、Wikipedia：ウィキソースの項より抜粋）。

本項関係のものでは、伝統的な中国古典が該当するが、研究上使用するには必須の版本情報が欠けているので、使用には注意が必要である。

●中国第一歴史档案館（GB）

http://www.lsdag.com/

明清期の官文書を保存・公開する文書館。Web サイトでは、利用方法などを公開している。

中華民国期の官文書を保存・公開する「中国第二歴史档案館（GB）**http://www.shac.net.cn/**」もある。

●中国歴史文化信息網（GB）

http://www.chc.gov.cn/

中国社会科学院に超星数字図書館が協力して運営する Web サイト。各分野の専門家の著作などを紹介しているが、著作の閲覧に超星の SSReader を使用するところが特徴。SSReader の仕様を前提とするため、日本語環境下で使用するには不便きわまりない。

●ディジタル・シルクロード・プロジェクト（UTF-8）

http://dsr.nii.ac.jp/

国立情報学研究所が主催する、シルクロードを対象地域とするデジタルアーカイブを初めとする様々な手法での文化資源活用と次世代への継承を試みるプロジェクトのサイト。コンテンツは多岐にわたるが、上記 Google Earth と連動したコンテンツである「地図で探るシルクロード」など、色々と参考になる。

●拓本文字データベース（UTF-8）

http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/djvuchar

京都大学人文科学研究所 21 世紀 COE プログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」の成果物の一つ。碑文（実際には拓本）の文字を検索して、その文字に該当する拓本の図像を一覧表示する。検索する文字によっては画像が大量に出てくるので、高速回線が必須。また、拓本の画像は DjVu 形式なので要注意。

❏ blog 系

昨今はやりの Web2.0 的サービスの代表である blog を公開する研究者も徐々に増えてきた。自らの研究・ゼミの運営・趣味のページと多岐にわたる内容は、当該分野研究の現在を進行形でみることができる。これは、情報発信という意味でも重要だろう。以下、いくつか研究者の blog を紹介しておく。

●Abita Qur（弘前大学松井太氏）

http://dmatsui.cocolog-nifty.com/abitaqur/

●Lingua-Lingua（中村雅之氏）

http://lingua-lingua.at.webry.info/

●中国環境史研究所ブログ

http://cunsong.air-nifty.com/

●村田雄二郎研究室

http://jdzg.exblog.jp/

●Nahoo's Moods（舩田善之氏）

http://blog.livedoor.jp/nahoo/

●綿貫哲郎 'S tere inenggi

http://manju.livedoor.biz/

●關尾史郎のブログ

http://sekio516.exblog.jp/i4

●桂堂徒然

http://quedong.blog16.fc2.com/

❏ おわりに

以上、中国史関係の Web サイト紹介を終わる。

最近、プロジェクト系の Web サイトが増えてきたように思える。最新の学術成果が世に行われるのはうれしい限りであるが、ことこの分野に関しては、個人からの情報発信がまだ少ないように感ずる。

「自分に外に出せるコンテンツがあるのか？」と疑問に思っている方は、是非岡本真氏の『これからホームページをつくる研究者のために』を読んでいただきたい。一読すれば、読者諸賢が何気なく持っておられるそれ自体が、実は重要なコンテンツであることが了解されるだろう。多くの個人の研究成果を公表する Web サイトが増えることを願ってやまない。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

仏教

藤原　敦

❏　定番サイトの動向

ここ 1、2 年、SAT[1] や CBETA、INBUDS[2] などの定番サイトは、以前の活発な時期と比較してその動きが落ち着いて来ている。今後の着実な成長を期待したい。

●CBETA：続蔵経の公開

http://www.cbeta.org/

2005 年 11 月に新纂日本続蔵経の 1 ～ 4 巻が、12 月には 5、7 ～ 10 巻、2006 年 7 月には、11 ～ 16 巻が相次いで公開された。これにより、続蔵経については 1 ～ 5、7 ～ 16、55 ～ 85 巻が公開されたことになる。以前に告知された公開予定とは、若干遅れているようであるが、近年中に全巻が公開されるのは間違いないであろう。

❏　所蔵品の公開

2000 年以降、博物館や美術館は、e 国宝 [3] や文化遺産オンライン [4] などに見られるように、所蔵品情報の公開や他館との共有化を積極的に進めている。

そうした中、2006 年 7 月に東京国立博物館にて公開研究会「博物館情報学の構築」が開催され [5]、経過報告が行われた。参加した筆者の見解としては、技術が先行している感がしないでもなかったが、今後、急速的な発展が予想される分野であり、注視していきたい。

●東京国立博物館：館蔵品ギャラリー

http://www.tnm.jp/jp/gallery/

こちらは、東京国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。「竹生島経」や天台座主慈円の「願文」など仏教関係の文化財を含む所蔵品の中から優美品約 500 点について紹介しているほか、各所蔵品の現在の展示状況についても説明している。

●奈良国立博物館：名品紹介

http://www.narahaku.go.jp/meihin/

こちらは、奈良国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。興福寺の旧境内という、博物館の所在地が影響しているのか、「紫紙金字金光明最勝王経」や「百万塔」など、他の国立博物館と比較して仏教関係の所蔵品が多い。

●京都国立博物館：収蔵品データベース

http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/

こちらは、京都国立博物館が収蔵する文化財のデータベースである。「明恵上人歌集」や「円仁入唐求法目録」など、5,000 点以上もの収蔵品に関する画像を閲覧することができる。

●九州国立博物館：収蔵品ギャラリー

http://www.kyuhaku.com/pr/

こちらは、2005 年 10 月に開館した九州国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。まだ紹介数が少ないが、今後の展開に期待したい。

❏　シルクロード研究

仏教がインドから中央アジアを経て中国へと伝播する経路であったシルクロードに関する研究プロジェクトの 1 つとして、国立情報学研究所 [6] が主催する「ディジタル・シルクロード・プロジェクト」[7] がある。同プロジェクトでは、主にこれまでに日本の研究機関が収集したシルクロードに関する文献、画像等のデジタル化、アーカイブ整備、公開等の活動を行っている。

図 1　奈良国立博物館：名品紹介

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

図２　「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース

●「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース

http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/

同プロジェクトの１部門として「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベースがある。

ここでは、財団法人東洋文庫[8]が所蔵するシルクロードに関する貴重書53冊をデジタル化し、約7,000点もの画像を公開している。

公開されている画像は精度が非常に高く、人物画の装飾品の細部まで見ることが可能である。画像それ自体が貴重であることも踏まえると、仏教美術を研究する上で非常に有効なサイトである。

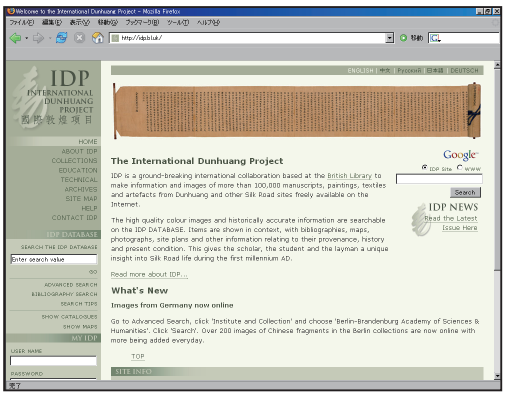
●ディジタル・シルクロード地名集

http://dsr.nii.ac.jp/geography/

同プロジェクトの１部門として、ディジタル・シルクロード地名集がある。

ここでは、これまた同プロジェクトの１部門である「シルクロード用語集」[9]とGoogle Earth[10]とを連動させ、Google Earth上でシルクロード関係の地点をクリックすると、そこに関する「シルクロード用語集」の当該項目を表示させ、リンクによって「写真でつなぐシルクロード」[11]等、更なる情報提供先へと閲覧者を誘導させる試みを行っている。

図３　国際敦煌項目



❑　敦煌文献

敦煌文献は1900年の発見以降、各国の探検隊によって中国国外に持ち出され、現在、各国の図書館、美術館等に分散保管されており、これまで横断的に研究を行うことが困難であったが、近年、各国の資料のマイクロフィルム化、書籍化、デジタル化が進み、横断的に研究を行うことが可能となった。更に、ここ最近は各国の研究機関が協力して、資料の共有化、関連研究論文の収集を進めており、今後ますますその発展が注目される研究分野となっている。

●国際敦煌項目

http://idp.bl.uk/

国際敦煌項目（International Dunhuang Project）は、大英図書館と中国国家図書館を中心とする各国の研究機関が共同で運営する敦煌文献研究サイトであり、各国がそれぞれ所蔵する敦煌文献、その他発掘品、現地の景観など、10万点余りの画像を閲覧することができる。

なお、各言語によって、それぞれサーバが異なっており、日本語は龍谷大学（**http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/**）が担当している。

●敦煌学研究論著目録資料庫

http://ccs.ncl.edu.tw/topic_3.html

敦煌学研究論著目録資料庫は、台湾の「漢学研究中心」の「典蔵目録及資料庫」にある敦煌に関係する研究論文の検索データベースであり、1997年に刊行された紙の「敦煌学研究論著目録」を基に、中正大学の鄭阿財、朱鳳玉両氏を中心とするメンバーによって公開されている。2006年７月現在、12,778点の論文を検索することができ、中国、台湾以外の地域の研究者の論文も検索可能である。

●敦煌吐魯番文

http://www.nlc.gov.cn/

敦煌吐魯番文は、中国国家図書館のデータベースの１つであり、国家図書館内の１部門である敦煌吐魯番

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

資料閲覧室[12]が所蔵する文献を中心に、中国国内外で刊行された敦煌・吐魯番に関する文献が検索できる。

具体的な検索方法については、国家図書館内の全体検索の際に、敦煌吐魯番文データベースを指定して検索することになる。

●『俄藏敦煌文獻』収載文献 Database

http://h0402.human.niigata-u.ac.jp/~dunhuang/doc/russiatop.htm

『俄藏敦煌文獻』収載文献 Database は、新潟大学敦煌研討班のプロジェクトの１つで、關尾史郎、玄幸子両氏によって作成された、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部が所蔵する敦煌文献に関するデータベースである。画像を閲覧することはできないが、各資料１点１点に付けられた番号、書籍の収録ページ数等が検索できる。

❏ 終わりに

全体的に、文献や画像の電子化については、一段落したように見える。特に、画像については、それを所蔵する国立の博物館・美術館が独立行政法人への移行に伴って、自己の存在意義を示すために広報活動の一環として所蔵品の電子化、公開を積極的に行ったため、急速に整備された。

今後は、それらを活用した研究が行われると共に、国際敦煌項目のように、共同で研究を行うことが主流になると思われる。

注

[1] SAT：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sat/

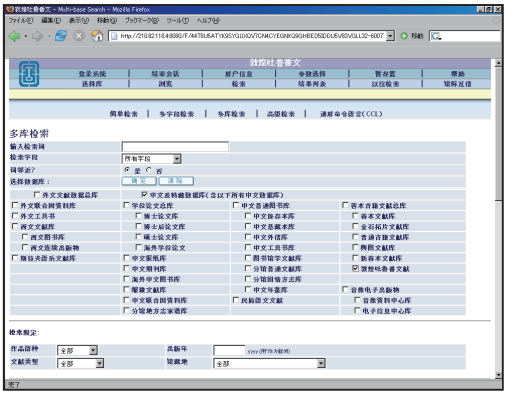


図４　中国国家図書館：敦煌吐魯番文

[2] INBUDS：http://www.inbuds.net/

[3] e 国宝：http://www.emuseum.jp/

[4] 文化遺産オンライン：http://bunka.nii.ac.jp/

[5] 東京国立博物館情報アーカイブ（仮称）＞公開研究会「博物館情報学の構築」
http://webarchives.tnm.jp/archives/

[6] 国立情報学研究所：http://www.nii.ac.jp/

[7] ディジタル・シルクロード・プロジェクト：
http://dsr.nii.ac.jp/

[8] 東洋文庫：http://www.toyo-bunko.or.jp/

[9] ディジタル・シルクロード用語集：
http://dsr.nii.ac.jp/term/

[10] Google Earth：http://earth.google.com/

[11] 写真でつなぐシルクロード：
http://dsr.nii.ac.jp/photograph/

[12] 前述の国際敦煌項目の中国担当部署でもある。
http://idp.nlc.gov.cn/

Wikipedia とは何か

藤原　敦

❏ はじめに

本稿では、今話題のオンライン百科事典 Wikipedia（ウィキペディア）[1]の概要を紹介すると共に[2]、その課題と将来について考察を行う。

❏ Wikipedia とは

Wikipedia とは、Wiki クローン[3]の１つである MediaWiki[4]を使用して共同で百科事典を作成するプロジェクトであり、アメリカの非営利団体、Wikimedia 財団[5]によって提供されている[6]。2006

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

年 8 月現在、200 以上の言語で作成され、合わせて 467 万もの項目が作成されている。

この Wikipedia は、2001 年 1 月に Nupedia[7] の編集担当であった Lawrence M. Sanger と、現 Wikimedia 財団理事長の Jimmy D. Wales によって英語版がまず創設された。

次いで、同年 5 月に日本語版、フランス語版、ドイツ語版など 13 の言語版が創設された。中国語版の創設は 2002 年 10 月である。

❏ 利用方法について

Wikipedia を閲覧する場合、特に閲覧料金等は発生しない。また、その内容についても、一部を除き、コピーレフト [8] を採用しているため、改変、転載等が可能である。但し、その場合には、後述する GFDL など、各項目 [9]・画像・音声ファイルごとに設定されているライセンスに従わなければならない。

■ 閲覧に際して

閲覧の際、各項目内のブラウザの初期の設定では青リンクとなっている単語（項目名）をクリックすると、同一言語版 Wikipedia の内部の当該項目が表示される。水色リンクをクリックすると、他言語版または百科事典以外のプロジェクト、或いは Wikipedia 外のサイトが表示される。

また、項目下部のカテゴリ欄に表示される各カテゴリをクリックすると、同一ジャンルに属する項目一覧が表示されるほか、当該項目について他言語版にも同じ概念を解説する項目がある場合には、項目左下に他言語版へのリンクが表示される。

各言語版の内容については、英語版は Nupedia の執筆者が移入したこともあり、主に自然科学分野が充実している。日本語版は、専門家の参加数が少ないこともあり、メインカルチャーよりもサブカルチャーの項目数が多い [10]。

図 1　Wikipedia 日本語版のメインページ

❏ 項目を編集するには

以下、特に断りがない限り、日本語版をモデルとして解説する。

さて、Wikipedia は誰もが編集できる百科事典であるが、具体的に Wikipedia の各項目を編集するには、各項目の上部 [11] にある［編集］タブをクリックする。すると、編集画面が表示されるので、適宜マークアップ言語を使用して、編集を行う。

この際、一般の項目で試しに編集を行い、その結果を保存してしまうと、結果の内容によっては悪戯と勘違いされる恐れがあるため、試しに編集を行う際には、「プレビュー機能」を使用して保存せずに編集結果を表示させるか、練習用ページである「Wikipedia: サンドボックス」にて編集を行う。

また、新たに項目を作成する場合には、既存の項目内の赤リンクとなっている項目名をクリックするか、ない場合には「プレビュー機能」を使用して赤リンク項目を作成する。

そのようにして編集作業を行い、保存すると、編集内容が直ちに項目に反映されると共に、当該項目の履歴ページ [12] に、自身の使用する IP アドレスが編集時間と共に記録される。なお、Wikipedia では同一 IP アドレスを使用する不特定多数の利用者と当該項目の編集者とを区別するために、アカウントの作成（無料）が推奨されている。アカウント作成者（ユーザ）には、自分専用の作業スペースが与えられる、任意の項目の更新状況をまとめて閲覧することができる等のメリットがある。

❏ GFDL について

さて、Wikipedia では Wiki クローンを使用

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

することにより、他者の文章を容易に改変することを、技術面で可能とした。

しかし、通常、他者の文章を改変するには、当該文章の著作権者の同意を得る必要があり、その権利処理には多大な時間と費用がかかる。

そこで、Wikipedia ではこれらのコストを短期間で適切に処理するために、GFDL[13] を採用した。

GFDL と は、GNU Free Documentation License の略称で、フリーソフトウェア財団 [14] が提唱するライセンス形式の１つ [15] で、コピーレフトに基づき、当該著作物の著作者の創造行為を尊重しつつ、適正な利用を広範囲に普及させることを目的とし、そのために、一定の条件 [16] の下に、他者による適正な改変や転載を認めるというものである。

Wikipedia では、このライセンスを採用することにより、他者の文章を改変することを法的に可能とし、ユーザに対し、自らの著作物を GFDL でリリースすることに、編集時に同意を求め、ユーザが編集内容の保存ボタンをクリックすることで、同意したとしている。各項目の履歴ページに個々のユーザの編集内容が日時と共に全て記録されているのは、この GFDL が求める条件に従っているからである。その他にも他言語版からの翻訳、肥大化した項目の分割、項目の改名などの編集行為には、GFDL の求める条件に従った手順通りに編集することが特に求められている。

図２　項目の編集画面

❑　編集・運営方針の策定

さて、そのようにして不特定多数のユーザが参加し、多数の項目が作成されるようになると、項目の編集内容を巡ってユーザ同士が対立 [17]、或いは百科事典の項目としてそぐわない内容が投稿されるなどの事態が発生した。

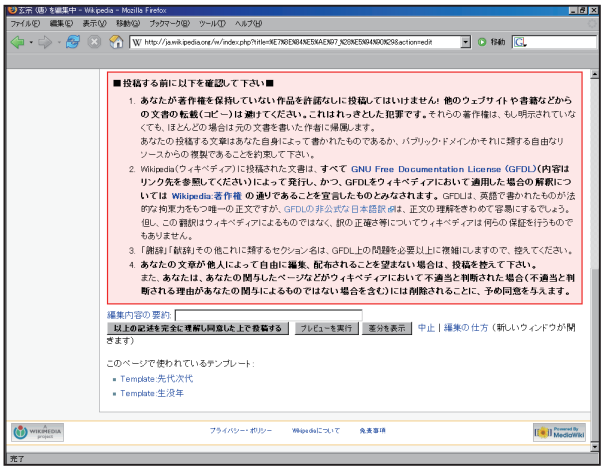
そこで、ユーザ間で協議が行われ、Wikipedia 全体の運営方針、編集、或いは他者との関わりの際の方針、及びガイドライン [18] が策定された。中でも、特に重要な方針は [19]、「Wikipedia: ウィキペディアは何でないか」と「Wikipedia: 検証可能性」、「Wikipedia: 独自の調査」、「Wikipedia: 中立的な観点」である。

「Wikipedia: ウィキペディアは何でないか」では、Wikipedia をオンライン百科事典として定義し、それ以外の何かであることを否定し、「Wikipedia: 検証可能性」と「Wikipedia: 独自の調査」では、Wikipedia に執筆する内容は、必ず査読を経た文章を参照として執筆し、執筆者が独自に研究した内容を投稿してはならないと規定し、「Wikipedia: 中立的な観点」では、執筆する際には特定の観点からの解説のみを記載することなく、様々な観点からの解説を記載することを求めている。

Wikipedia では、これらユーザ自身で策定した方針・ガイドラインに従って活動することが求められる。

しかし、中にはこれらの方針を守らず、不適切な行動を執り続けるユーザや、ユーザ間で合意が成されず、

図３　GFDL への同意確認画面



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

1つの項目をお互いに自身に都合の良いように編集を繰り返す、「編集合戦」が発生することがある。

そうした利用者の閲覧に支障を来す状態を改善させるため、同じくユーザ間の協議によって策定された「Wikipedia: 追放の方針」や「Wikipedia: 保護の方針」、「Wikipedia: 削除の方針」等の方針に基づいて、対象となるユーザ、項目それぞれ1件ごとにユーザ間でその扱いを審議し、その決定に従って、特定ユーザの編集制限や、特定項目の編集制限、特定項目の削除などの具体的な処理が、ユーザ間の選挙によって信任された管理者と呼称される当該処理に必要な一部の機能をコミュニティより信託されているユーザによって行われる。

❏ 課題と将来について

Wikipediaはその創設から現在に至るまで活動を続け、特にここ1、2年はGoogleなどの検索結果の上位に表示されるようになったことから閲覧者、ユーザが急速的に増加し、Alexa[20]の調査では、2006年8月現在、Wikipediaは世界の全サイト中、17位のアクセス数を記録している[21]。

閲覧者、ユーザが増加することは喜ばしいことではあるが、それに応じて、以前では大問題とはなからかった問題が次々と起きている。

まずは、運営資金の問題である。

Wikimedia財団は非営利団体であり、その運営資金の殆どは寄付に頼っている。そうした中での急速的なアクセス数の増加に、サーバの増強が追いつかずにいる。賛助企業のサーバに間借りさせて貰ってはいるが、それでも追いついていないのが現状である。

また、アクセス数の急増により、コミュニティサイト、質問サイト、宣伝など、Wikipediaを百科事典以外の目的に使用するユーザも増加している。

アクセス急増以前から批判されている点もある。それは内容の正確性についてである。

これまでにJohn Seigenthaler氏の経歴改竄事件[22]やNatureによるBritannicaとの比較[23]、アリアドネのアンケート[24]等で耳目を集めているが、そもそもWikipediaはその誰もが編集できるという性質上、その内容は時と共に変化するものであり、また、アカウントの作成の際に、特に個人情報の入力を求めていないため、誰が編集しているのかが分からないものである[25]。従って、その内容に誤りが存在するのは、その特質上やむを得ないことである。そうした点を批判することは誰にでもできることであり、建設的とは言えない。

ではあるものの、財団はそうした批判に答えるべく、今後は量よりも質を重視する声明を発表し[26]、Mediawikiの改訂による投稿制限やピア・レビューの導入、専門家による諮問委員会の設立などを検討している。

■ 将来について

Wikipediaを含むWikimedia Projectは、これまでもそうであったように、今後も発展し続けていくものと思われる。

但し、今後はこれまでとは異なり、規模の拡大よりも、上述したように、社会に好意的に定着することに重点が置かれていくものと思われる。

博士号保持者による査読付きNupediaから出発し、誰もが編集できるWikipediaとなり、そしてまた、多少の編集制限、簡易査読を設けたWikipediaに—。

計画というものは予想通りにはいかないものであり、社会に受け入れられるためには多少の妥協も必要であるが、そのWikipediaが持つ自由性に制限がかかりすぎると、人々は離れていってしまうだろう。今後Wikipediaがうまくいくかどうかは、この1、2年にかかっていると筆者は考える。

参考文献

- 「Wikiつまみぐい第7回—ウィキペディア日本語版の世界　前編」（Gleam著、『Software Design』2006年2月号、技術評論社）
- 「Wikiつまみぐい第8回—ウィキペディア日本語版の世界　後編」（Gleam,Suisui著、『Software Design』2006年3月号、技術評論社）
- 「デジタル・レファレンス・ツールとしてのWikipedia」（兼宗進著、『情報の科学と技術』56-3号、2006年、情報科学技術協会）

注

[1] Wikipedia：http://www.wikipedia.org/

[2] 詳細についてはWikipedia内の「Wikipedia: ガイドブッ

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

ク」を参照のこと。

[3] Wiki クローンについては、本誌 5 号（2004 年）の特集 1「Wiki・Weblog と人文学」を参照のこと。

[4] MediaWiki：**http://www.mediawiki.org/**

[5] Wikimedia 財団：**http://meta.wikimedia.org/**

[6] 同財団が提供する Wikipedia 以外のプロジェクトとして、辞典の Wiktionary（**http://en.wiktionary.org/**）、教科書の Wikibooks（**http://en.wikibooks.org/**）、画像・音声等のメディアファイル収蔵庫の WikimediaCommons（**http://commons.wikimedia.org/**）などがある。

[7] Nupedia: 執筆者を博士号所持者に限定し、査読制度も設け、項目の質の維持に重点を置いたオンライン百科事典。2000 年 3 月に運営が開始されたが、参加者が少なく、活動的とは言えなかった。2001 年 1 月に Wikipedia が開始されると、参加者がそちらへ移動したため、休眠状態となり、2004 年にその活動を終えた。

[8] コピーレフト : 著作物の利用を促進させるために、著作権者が指定するライセンスに従う事を条件に利用・改変等の制限を緩和する思想。

[9] 項目 : ウィキペディア内では「記事」と呼ばれていることもある。

[10] メインカルチャーの中では、生物学、数学が比較的充実している。

[11] スキンによっては上部にない場合もある。

[12] 履歴ページ : ［編集］タブの右隣の［履歴］タブをクリックすると、閲覧することができる。

[13] GFDL：**http://www.gnu.org/licenses/fdl.html**

[14] フリーソフトウェア財団：**http://www.fsf.org/**

[15] 同財団が提唱するその他の有名なライセンスとしては、ソフトウェアの分野で採用されている GPL（GNU General Public License）がある。

[16] 条件の詳細な内容については、注 13 のリンク先を参照のこと。

[17] 項目の編集内容についての討論は、各項目のノートページ（［編集］タブの左隣の［ノート］タブをクリックすると表示される）にて行う。

[18] Wikipedia では、「方針」は全ユーザが遵守すべきもの、「ガイドライン」（或いは「指針」）は尊重すべきものと解されている。

[19] その他の方針等については、Wikipedia 内の「Wikipedia: 基本方針とガイドライン」を参照のこと。

[20] Alexa：**http://www.alexa.com/**

[21] 因みに、1 位は Yahoo! で 2 位は MSN、16 位は Amazon である。

[22]「成長の痛みを味わう Wikipedia—2 つの「事件」で問われる在り方」（CNET Japan,2005.12.06）：**http://japan.cnet.com/news/media/story/0,2000056023,20092212,00.htm**

[23]「『ネイチャー』誌、ウィキペディアの正確さを評価」（Hotwired Japan,2005.12.15）：**http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20051219302.html**

[24] アリアドネのアンケート：**http://ariadne.jp/enquete200602/cgi-bin/enquete.cgi**

[25] 誰が編集しているのかが分からないという点については、Wikipedia 以外のサイトについても同じことが言えるのだが。

[26]「ウィキペディアのウェールズ氏、ウィキメディア財団のこれからを語る」（CNET Japan,2006.08.07）：**http://japan.cnet.com/news/media/story/0,2000056023,20193547,00.htm**

Wikipedia アンケートのまとめ

師　茂樹

❏ アンケートについて

■ 経緯

本アンケートは、オンライン百科事典の Wikipedia（本誌藤原氏のレビュー参照）の内容をどのように評価すべきか、という一連の議論 [1] と問題意識を共有している。

■ 質問方法

アンケートは、7 月 18 日から 9 月 9 日の間、漢字文献情報処理研究会の BBS および mixi のコミュニティ「漢字文献情報処理研究会」[2] で行われ、12 人

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

の回答を得た。協力して頂いた方々には感謝申し上げる。

なお、質問の際、BBS 上での議論や発言は本誌『漢字文献情報処理研究』の関連記事に引用もしくは反映する場合があること、誌面での引用に際して回答者の氏名は匿名扱いにすることがあらかじめ回答者に伝えられている。

■ 質問項目

1. Wikipedia を利用していますか？

□利用経験有り。
□利用経験無し。

2.～ 4.については、1. の解答で、「経験有り」と答えた方のみにお尋ねします。

2.どの言語版の Wikipedia を利用された経験がありますか？

□日本語版
□英語版
□中国語版
□その他の言語（具体的に：　）

3.Wikipedia をどのような目的で利用していますか？（複数解答可）

□専門的な分野の情報源として利用する。
□趣味などの情報源として利用する。
□実は Wikipedian（項目の執筆・訂正者）である。
□ちょっとのぞいた程度の利用経験しかない。

4.自分の専門分野について、Wikipedia（ここでは日本語版に限定します）の内容がどの程度の信頼性（最新の知見を反映している等）があると判断していますか？（複数解答可）

□基本的に妥当で、新しい知見も積極的に盛り込んでいる。
□妥当だが、記述内容が古い。
□問題が多い。
□どちらとも言えない。

5.コメント（専門分野に関する詳細なコメントや、他分野に関するコメントもあり。言語版での違いなども書いていただけると助かります。）

❏ 回答結果

■ 単純集計（質問 5. を除く）

1.Wikipedia を利用していますか？

利用経験有り	12
利用経験無し	0

2.どの言語版の Wikipedia を利用された経験がありますか？

日本語版	12
英語版	7
中国語版	10
その他の言語	1

（具体的な言語：フランス語、ドイツ語、ベトナム語）

3.Wikipedia をどのような目的で利用していますか？

専門的な分野の情報源として利用する。	8
趣味などの情報源として利用する。	11
実は Wikipedian である。	2
ちょっとのぞいた程度の利用経験しかない。	0

4.自分の専門分野について、Wikipedia の内容がどの程度の信頼性があると判断していますか？

基本的に妥当で、新しい知見も積極的に盛り込んでいる。	2
妥当だが、記述内容が古い。	2
問題が多い。	1
どちらとも言えない。	9

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❑ 分析

質問 4 の結果を、半ば強引にアリアドネのアンケート結果と比較してみると、グラフのように「問題が多い」が今回のアンケートでは少なく、その分「どちらとも言えない」が増えていることがわかる。

詳しく見てみると、全体的な傾向としては、自分の専門分野に関する記述については不満な点もあるが、それ以外は概ね満足である、というものである。これは裏を返せば、非専門家にとって Wikipedia は特に不満がないということであり、さらに言えば Wikipedia という知識のエコシステム（生産／消費の循環系）とでも言うべきものの中に研究者が必ずしも必要とされていないということを示すものとも言えるだろう。学術的な知が一般社会においてどのように受容されているのか、という問題を考える上でも、Wikipedia の存在はたいへん興味深い。

また「不満」という意見に対しては「内容が正しくないとお感じになられたのであれば、専門家以外に専門家はおりませんので、是非、修正して頂きたく思います」という反論が見られたが、このような意見は各所で言われていることでもある。今回のアンケートの回答者の中では Wikipedian（Wikipedia の執筆に参加している人）は 2 名（内日本語版の管理者が 1 名）で、この数字が多いのか少ないのかは判断できないが、それ以外の回答者の中にも「自分で書く」ということを意識している者が少なくなく、回答者の参加意識の高さがうかがえる。

一方で、「見守るだけで、自分が書かないのは、専門的な知見を反映して百科辞典の項目を書ける力量が無い！ってのが一番の理由」という意見も見られたように、「専門家」のコミュニティで訓練され要求される知識の発信／受信のやり方と、Wikipedia を含む百科事典的な知のあり方というのは別物であると考えるべきで、専門知識があれば参加できるというものではないだろう。これに関連して「Wikipedia や Google が信用できないのであれば、専門家コミュニティによるリソースを制作すれば良い」という意見もあり、正論であると思うが、一方コミュニティが活発かつ継続的に活動するようなネットワークの構築に多くの困難があることは、インターネット上の各種サービスが死屍累々であることを見ればわかるように、それ自体が研究テーマとなりうるような大きな問題でもある。

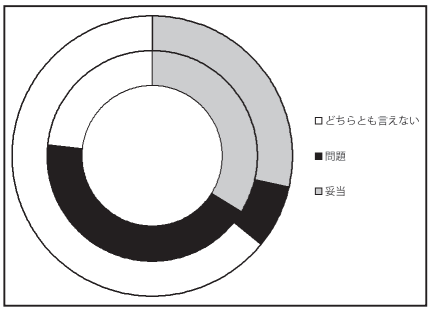
一方、興味深かったのは、学生の「丸写しレポート」の元ネタとして Wikipedia が使われており、それをチェックするために Wikipedia を利用する、という大学教員の立場からの回答がいくつか見られたことである。中には「自分の専門分野ではない卒論の副査を担当することになった時、安直だなと思いつつ、Wikipedia を引いてみたら、卒論の一節がまるまる Wikipedia からのコピー＆ペーストであることを発見したことがありました」という回答があったが、ありそうな話であるとは言え、やはり衝撃的である。これも、うがってみれば、学生が考える知のあり方と教員の考える知のあり方とのずれを表すものであるとも言えるだろう。

注

[1] 科学分野では Wikipedia とブリタニカ百科事典とに大きな差はないという記事が発表されると（“Internet encyclopaedias go head to head,” *Nature* 438, December 2005, **http://www.nature.com/nature/journal/v438/n7070/full/438900a.html**）、ブリタニカ側がにそれに反論（“Fatally Flawed: Refuting the recent study on encyclopedic accuracy by the journal *Nature*.” March 2006, **http://corporate.britannica.com/britannica_nature_response.pdf**）し、大きな話題となった。それを受け日本でも、アリアドネ上において「ご自分の専門分野の記述に関して、ウィキペディア日本語版をどう評価されますか？」（http://ariadne.jp/enquete200602/cgi-bin/enquete.cgi）というアンケートがなされた。

[2] **http://mixi.jp/view_community.pl?id=1067180**

アリアドネ（内円）と本会 BBS（外円）でのアンケート結果の比較



一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

二松学舎大学における日本漢文学研究の取り組み

町　泉寿郎・上地　宏一

❏ はじめに

本稿では、二松学舎大学が取り組んでいる21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の概要と、2006年3月より運用を開始した「日本漢文学データベース検索システム」についての紹介を行う。

❏ 本プログラムの主旨――日本学のツールとしての漢文研究――

■ 研究対象

二松学舎大学では、2004年度より5年間にわたり文部科学省の助成を受けて、21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築[1]」を推進中である。本プログラムが研究対象とする「日本漢文」は、漢詩文や漢学にとどまらず、宗教・歴史・自然科学・芸術等の諸分野にわたり、日本人が漢文訓読法によって受容した中国の学術文化の内容と、日本人の手になる中国的な学術文化上の所産とをあわせたものである。

■ 意義・目的

近時、日本の学術文化に対する国際的な関心の高まりとともに、「日本学」研究の新たな方法論的確立が問題となっている。もともと日本語には和文脈と漢文脈とがあるが、近代以降、国語国文学が成立する過程において、和文脈が主たる研究対象とされたため、漢文脈に対する研究蓄積は十分とはいえない。かつ日本漢文関連の研究を見渡すとき、宗教学・歴史学・思想史学・文学等の分野ごとに研究者とその成果が分散しており、この状況の改善は日本学研究の急務に属する。この偏向と分散の改善のために、近代以前の日本の学術文化の諸分野にわたって、その根幹に位置した漢文を研究対象とすることは、有効と考えられる。

さらに、日本における漢文は、前近代の東アジア漢字文化圏における共通語の性格や、中世・近世の欧州語におけるラテン語のような文章語の性格を見出しうるものであって、漢文は日本を相対化する作業のための、すなわち日本学研究の方法論的確立のための不可欠な要素である。この意味において、日本学研究の基礎に漢文をしっかりと位置付けることが、本プログラムの目的である。

■ 国際化の必要性

外国人の日本学研究者は近30年に急増し、質的にも急速に深化してきている。にもかかわらず、日本漢文に関する理解度は不十分であり、今後の日本学研究の十全な発展のためには、日本漢文の意義を海外に向けて積極的に打ち出すことがぜひとも必要である。かつ日本漢文の独自性は、前述のとおり朝鮮語・ベトナム語・ウィグル語等の東アジア漢字文化圏の各国語による漢文読解との比較を通して、また欧州語におけるラテン語の文化史的・言語史的意義と日本漢文のそれとの対照などによって、はじめて明らかにしうることであって、ここに日本漢文研究を国際的研究体制によって進めることが必須である理由がある。

❏ 具体的な取り組み

■ 4本の柱と研究班

日本漢文が紛れもなく日本学の基礎であることを証明するために、この5年間（2004～08年度）はデータベース構築や研究協力体制作りといった、基盤整備と情報発信に全力を注いでいる。プログラム着手当初より、以下に掲げる4本の柱を基本に置きつつ、8つの研究班単位で個別研究を進めている。

- 1： 日本漢文学関連文献データベースの構築と情報の公開
- 2： 日本漢文学研究者の世界的ネットワークの

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

構築
- ●3： 若手研究者および書誌技能者の養成
- ●4： 漢文教育の研究と振興

▪研究班単位
- ●上古中古班
- ●中世班
- ●近世近代班
- ●日中文化交流班
- ●日韓文化交流班
- ●辞書訓詁語法班
- ●漢文教育班
- ●書誌目録データベース班

■ 業績の公開・発信

これまでの業績ならびに構築中のプロジェクトについてまとめた。

▪日本漢文関連文献データベース
- ●文献所在データベース
- ●論文著作目録データベース

この他に日本漢文著作全文データベース・基本漢籍全文書き下しデータベース・日本医人伝データベース・江戸漢学書目データベース・江戸明治漢詩文データベースを構築または構想中である。

▪定期刊行物
- ●ニューズレター『雙松通訊』（年 3 回）
- ●紀要『日本漢文学研究』（年 1 回）

▪各班による研究成果報告書
- ●中世班
  - ▶藤原通憲資料集
  - ▶雅楽資料集（研究編）・同（資料編）
  - ▶声明資料集
- ●近世近代班
  - ▶江戸漢学書目
  - ▶江戸明治漢詩文書目
  - ▶（倉石武四郎講義）本邦における支那学の発達
  - ▶三島中洲研究
- ●辞書訓詁語法班
  - ▶漢文文法と訓読処理

■ 国際化の取り組み

- ●国際シンポジウム（年 1 回開催）
- ●海外拠点リーダー会議（年 1 回開催）
- ●国際学会への参加・報告
  - ▶台湾大学国際日本漢学シンポジウム・EAJRS・北京フォーラム・中文文献資源共建共享合作会議など
- ●海外研究機関との連携
  - ▶北京大学（「儒蔵」編纂）・タイ チュラロンコン大学（漢文学講座に講師派遣）・浙江工商大（シンポジウム共催）など

■ 若手研究者の養成

若手研究者および書誌技能者の養成のために、毎年春期・秋期に公開講座を開設して、日本漢文関連講座と書誌目録関連講座を開催した。さらに、COE 研究員・研究助手を中心とした若手研究者の研究発表の場を増やすように努めている（COE 研究会・三島中洲研究会・紀要『日本漢文学研究』など）。

■ 漢文教育・漢文振興

大学および大学院の授業において使用するための、各種の漢文教科書（「二松漢文」）を、漢文教育班を中心に計画し編纂している。中国学・東アジア研究のツールとしてではなく、日本学のツールとしての漢文である以上、この漢文教科書が目標とするところは、日本古典語と中国古典語双方の語学的知識に裏打ちされた正確な漢文訓読法の習得である。

また、漢文衰退傾向の一因が、漢文に対する社会的無理解に求められると考えられることから、市民講座や公開シンポジウム、また漢詩コンクールや漢文検定などを通して、漢文の意義を広く社会にむけて普及してゆく考えである。

❑ データベース化の取り組み [2]

日本漢文学の基盤整備の一つとして、また国際的研究体制確立のため、本プログラムでは日本漢文関連文献データベースの構築を行う。このうち文献所在 DB および論文著作目録 DB については「日本漢文文献目

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

録データベース[3]」として、実際に2006年3月より運用を開始した。このデータベースは散在する各種目録情報をデータベース化し、Web上にて検索することを可能としたものである（図1：日本漢文文献目録データベース）。

■ 概要

「日本漢文文献目録データベース」が対象とする書誌データは、日本漢文、和刻漢籍、準漢籍[4]、一般和書、洋書、論文、雑誌記事といった日本漢文学に関するあらゆる資料を対象とし、100万レコードの収録を目標としている。

検索システムは、キーワードを指定して検索を行う「簡易検索」と、書誌レコードの各項目を細かく指定して検索を行う「詳細検索」の2方式を用意している。各項目については、四部分類、日本十進分類、書名、編著者名、刊年、出版者、出版方法、冊数、収蔵機関名、函架番号、目録名、頁番号などがあり、これらの項目についての検索を行うものである（図2：詳細検索画面）。

図1：日本漢文文献目録データベース

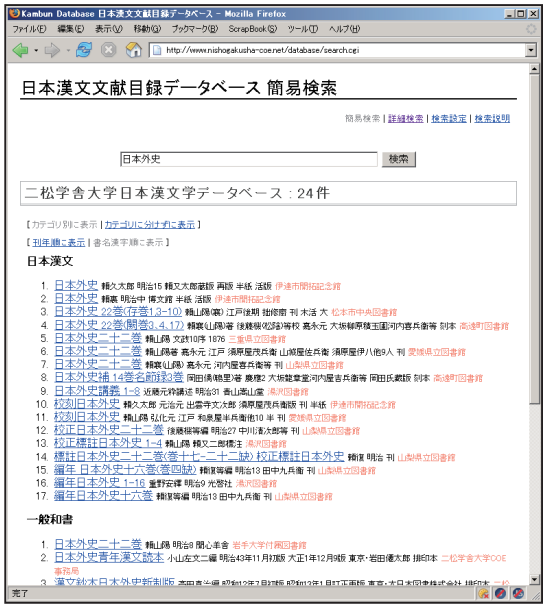
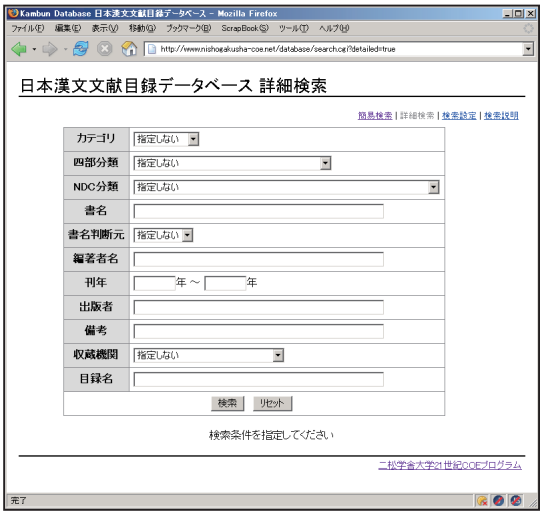


図2：詳細検索画面



■ 本データベースの特性とそれに由来する諸課題の解決

本データベースの登録データは、その多くはすでに目録化されたものであり、目録が異なれば情報項目や記述方式には差異がある。当初、本データベースの書誌情報登録項目を決定する際はこの特性を加味した結果、従来の書誌データベースとは異なり、必須項目や項目記述形式の制限をゆるやかなものとしているが、これは逆に検索時に必要なデータを得にくいという特徴を持つ。また、本データベースは、日本のみならず、広く世界に公開することを目的としているため、日本語以外の言語による検索への対応が求められる。さらに、二松学舎大学の所有するデータベースだけでなく、他機関のデータベースとの連携も視野に入れているため、その対応も必要となる。これらをまとめると以下のような7つの課題をクリアすることになるが、この度諸課題に対応したデータベース検索・公開システムを構築した。

- ●データの特性に由来する課題
  - ▶刊年の元号暦・西暦の表記のゆれへの対応
  - ▶著者名の雅号・別称の表記ゆれへの対応
  - ▶新旧字・異体字の表記ゆれへの対応
- ●内部文字コードの特性に由来する課題
  - ▶地域別漢字分離による検索もれへの対応
  - ▶ラテン系アルファベット拡張文字への対応
- ●大規模データベース構築に由来する課題
  - ▶非漢字圏利用者への対応
  - ▶他機関所蔵データベースとの連携への対応

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

▪ 刊年異表記への対応

本システムでは検索において資料の刊年を指定する際に、西暦と和暦の双方に対応している。和暦は自由記述であるので「平成丙戌」「平成十八年」「平成一八年」「平成 18 年」「平 18」「H18」いずれも指定可能である。また、和暦だけでなく明代以降の中国や東アジア圏の元号にも対応している。登録データそのものが元号暦で刊年を表記していることが多いが、内部で自動的に西暦に変換して保持することで検索を可能としている。

▪ 著者名別称への対応

例えば「荻生徂徠」を検索キーワードとして指定したときに「物茂卿」や「荻生双松」と記述されているレコードを検索できないことは問題である。このため、本システムでは国立国会図書館の許諾を受けて『NDL CD-ROM Line 国立国会図書館著者名典拠録 2000 年版 [5]』の一部である約 1 万件の別称情報を人名同定に利用している（図 3：別称への対応）。

▪ 異体字問題への対応

文字コードで問題となりやすい「二松学舍」と「二松學舍」、「頼山陽」と「賴山阳」のような異体字の同定に対しては、東京学芸大学松岡榮志教授が作成し、情報処理学会試行標準 IPSJ-TS 0005:2002[6] として制定されている BUCS（International Basic Subset of UCS）を用いる。これにより、新旧漢字や中国簡体字・繁体字に関係なく検索を行うことが可能となっている。また、データベースには欧米学者の論文なども登録されていることから、アクセント記号付き文字などの特殊アルファベットに対しては、基本アルファベット 26 文字のみで検索できるような文字の同定を行っている。

▪ 非漢字圏利用者への対応

現在一般的に利用されているパソコンとして Windows XP や Mac OS X などがあるが、これらは非漢字圏のパソコンであっても漢字の表示機能については標準で対応している。しかし漢字やかなの入力については文字スキルの問題もある。そこで本システムではローマ字表記によるキーワード指定に対応している。ローマ字で入力されたキーワードは自動的にかなに変換されてデータベースの「よみ」の項目に対して検索が行われる。

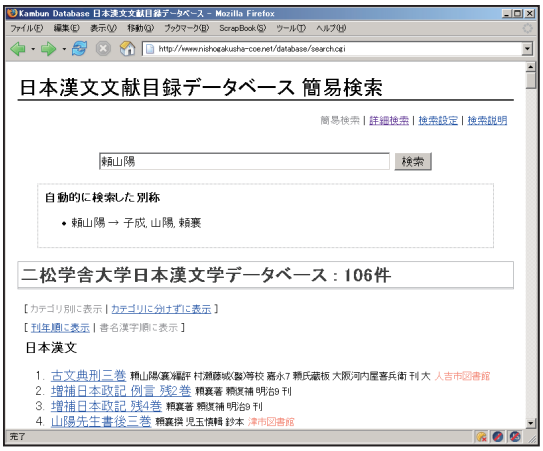


図 3：別称への対応

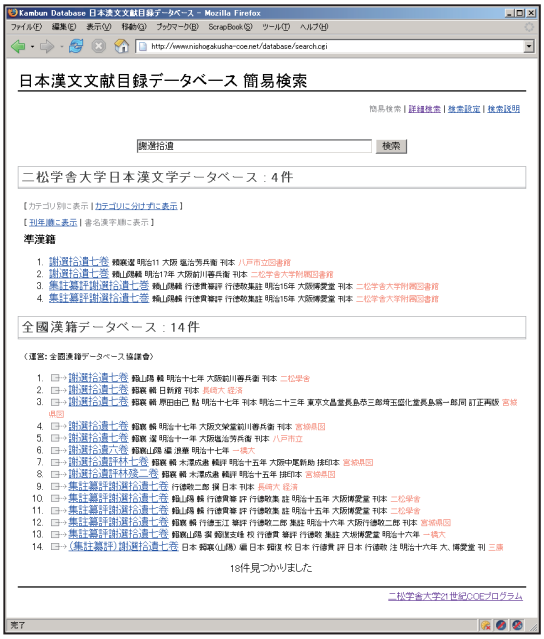


図 4：「全國漢籍データベース」との同時検索

▪ 他機関データベースとの連携

国内外における既存の書誌データベースとの連携について、現段階では全國漢籍データベース協議會が運用する「全國漢籍データベース [7]」との連携を実現した。具体的には、指定した検索キーワードに対して、二松学舍大学の所有する書誌データに加えて「全國漢籍データベース」への同時検索を行うようにした（図 4：「全國漢籍データベース」との同時検索）。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

▪今後の予定

現在、数万レコードの収録が完了し、引き続き収録データの拡充を行っている状況である。検索システムについては、以下の拡張を予定している。

- 他機関データベースにおいて日本漢文学と無関係なデータの自動除去
- ヒットしたレコードに対する関連資料（同名、叢書等）の表示
- 版面画像、全文テキストの追加

今後とも、利用者の忌憚の無いアドバイスをもとに更なる改良を加えたいと考えている。

注

[1] http://www.nishogakusha-coe.net/

[2] 本章については、本 COE プログラムのニューズレター『雙松通訊　第３号』「日本漢文学データベース検索システムの構築」に、若干の修正および図版を追加して転載したものである。

[3] http://www.nishogakusha-coe.net/database/

[4] 日本漢文、和刻漢籍、準漢籍の分類については、逐次入力中であるため、現状では必ずしも適切ではないレコードも存在し得る。

[5] http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/010330_2.html

[6] http://www.itscj.ipsj.or.jp/ipsj-ts/02-05/ips_bsec/toc.htm

[7] http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/

mixi の「中国語学」関連コミュニティ

山崎　直樹

❏ mixi とは？

まず、Wikipedia の記載を抜粋・要約させてもらって、mixi（http://mixi.jp）の紹介を試みたい。

mixi は、国内最大級のシェアを持つソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）である。

ソーシャル・ネットワーキング・サービスとは、「友達の友達は皆友達だ」という考え方に基づき、人々の「つながり」を重視して、趣味や嗜好・仕事関係・男女関係などの構築をオンラインでサポートするサービスの総称である。

mixi は、会員制でなおかつ完全招待制を採っているところに特徴がある。これは既に参加している人から招待を受けないと利用登録ができない制度であり、mixi に参加するには知人などの mixi 利用者から招待状を受け取らなければならないということを意味する。

mixi にはいろいろな機能があるが、その中でも、特に「コミュニティ」と「トピック」を紹介したい [1]。

「コミュニティ」とは、目的に同調する者が集まり、活動する仕掛けである。そして、それぞれが関心のある話題について語り合うための掲示板機能を「トピック」と呼ぶ。これは加入者が設置することができる。

コミュニティは各ユーザーが自由に作ることができ、特定ユーザーのアクセスブロック機能も持つ。また、mixi 全ユーザーが自由に加入できるようにすることも、管理人の承認が必要なようにも設定できる。またコミュニティ内の掲示板は、公開されているものはコミュニティ参加者以外でも閲覧できるが、参加者以外へ非公開にする事もできる（以上の説明は、Wikipedia 日本語版の「SNS」「Mixi」の記述に拠った）。

❏ 中国語（学）関連のコミュニティ

「中国語学」を検索キィにして、該当するものを探すと、以下のようなコミュニティがヒットする。

中国アマチュア通訳 AGENT ／ビジネス中国語検定／台湾語／中国語学・中国語教育／中国学 Sinology ／高橋和巳

この検索キィでは、おそらく「中国語学習」もヒットしてしまうのだと思われる。中国語学習者の情報交換サイト的なコミュニティもヒットするからである。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

次に、上掲のコミュニティの中では最も学術的だと思われる『中国語学・中国語教育』を紹介したい。

❏ コミュニティ名：『中国語学・中国語教育』

■ コミュニティの趣旨

コミュニティの管理人は、次のように紹介している。

◎中国語学（漢語（標準語・方言など）の音韻・語彙・文法・文字などなど）と中国語教育について、専門的な議論から素朴な疑問まで、語り合いましょう。
（主要討論漢語學的各種問題（包括標準語、方言的音韻、詞彙、語法、文字的等等）和華語教學。）
◎論文や教材（教科書・辞書）や大学の授業・語学学校などの批評も歓迎です。その際は、具体例を挙げ、できれば対案を示してくださいますようお願いいたします。
（歓迎各位主動討論教材和學校漢語課程的問題。）

■ 最近たてられたトピックから

最近たてられたトピックとその趣旨を概観してみたい（2006 年 8 月 21 日時点での確認、以下同じ）。

1. 現代中国　語彙　文法
　……の研究が 1 番進んでいる大学もしくは、教授はだれですか？？教えてください。
2. ナイスな中国語
　こりゃぁ、ナイス、という中国語の文句があったら、のっけてみるトピ。
3.「全国语言学暑期高级讲习班」に参加されている方
　今中国の南開大学で開催されている「全国语言学暑期高级讲习班」に参加されている方いらっしゃいますか？当方ただいま参加中で、この機会に日本の大学院生にいる方と交流したいと思っていたんですが、それらしい人が見当たりません。もしいらっしゃいましたらお伝えください。
4. 誰か教えて下さい→【質問】台湾で簡体字を学ぶ方法
　台湾に留学して中国語をある程度マスターしたのはいいのですが、日本に帰って中検を受けようにも簡体字が全くわかりません。使う中国語も微妙に違います。台湾で簡体字で中検対策をしてくれる語学教室を探してます。誰かご存じありませんか。

これらを見るとわかるように、このコミュニティは、「研究者向けの学術コミュニティ」というより、むしろ、「中国語学習者向けの情報交換コミュニティ」という性格が強いように見える。コミュニティの趣旨説明の文言を読む限りは、「学習者向け」というニュアンスは読み取れないのであるが（ただし、これ――「学習者向け」――が、コミュニティの管理人の意図と反しているかどうかは別問題である。管理人は、別に、この傾向を排除しようとはしておらず、たてられたトピックへの反応を見る限り、積極的に許容しているようである）。

じっさいは、次のような学術的トピックもたてられてはいる。

- ●中国語学・中国語教育書籍情報
- ●論文レビュー
- ●《教材批評》
- ●学会・研究会・勉強会情報

コミュニティ『中国語学・中国語教育』

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

しかし、書き込みは非常に少ない。

この状況のもつ意味を明らかにするために、次に、『言語学』という名をもつコミュニティを見てみたい。

❏ コミュニティ名：『言語学』

■ コミュニティの趣旨

コミュニティの管理人は、次のように紹介している。

> 対象言語学、理論・記述・通時的研究など方法論の違いは問いません。言語学、日本語学、その他の外国語について研究している方のトピック提示およびコメントを募集しています。
>
> 小難しくならない感じでいきましょう。
>
> 【中略】
>
> お願い
>
> ○言語学を研究している人、または興味がある人のためのコミュニティです。現時点での知識量は問いませんが、提示された基本資料をまず読んでみるといった努力は、できるだけやってみてください。
>
> ○言語学のコミュニティです。語学とは微妙に違います。ましてや言霊学とはまったく違います。別のコミュニティでどうぞ。

コミュニティ『言語学』

「言語学のコミュニティです。語学とは微妙に違います」という箇所が、日本における「語学」という言葉の慣用法を語っている。

そして、この言明は、一般人の多くが、たとえば「中国語学」という言語学の下位分野と「中国語（という言葉のお勉強）」を区別していないことも、同時に明らかにしている。

■ 最近たてられたトピックから

最近たてられたトピックとその趣旨を概観してみたい。

1. 言語人類学の ethnobiology と language socialization について。

   初めてトピックを立てます。私は人類学を勉強しているものなのですが、言語人類学は初めてでして、皆さんのお知恵を拝借できればと思いトピを立てた次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

2. ご協力お願いします。

   東京の大学で言語を中心に学んでいる××と申します。講義のレポートで言葉の読みと活用についての調査を行っています。浅はかな知識で考えたもので、ご意見あるかと思いますが、それも含めてご回答いただければ幸いです。ご協力お願いします。

3. 日本語の語順について

   皆さんこんにちは。トルコ語母語話者です。日本語母語話者にお聞きしたいと思います。

4. 『対義語』

   ある言語の対義語が解らないのはその言語の意味を本質的に理解できてないからだろうか。

5. 大学院を探しています

   はじめまして。教育学部心理学科３年の××です。少し前から院進学を真剣に考え始めて勉強をスタートさせました。

6. 神格化差別について。

   （たとえば）知的障害児を「神の子」と神格化。

   ビッグアーティストを「奇跡の歌声」と形容。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

上記は差別に感じるのに、下記は普通に感じるのはなぜでしょう。

こちらは明らかに、「研究者向けの学術コミュニティ」という性格が強いように見える。もっとも「言語学」という抽象的な名称と、特定の言葉の学習と結びつけるのは難しいが。

❏ まとめ

■ 学術コミュニティとして

mixi には、純粋な研究者向け学術コミュニティとしては、中国語学関連のコミュニティは存在しないようである。

■「語学」について

以下は、根拠のない推測である。

上に書いたことからも明らかなように、日本（の大学）では、「語学」という言葉はちょっと変わった使われかたをしている（「外国語のお勉強」というような意味であろう）。そのせいで、「○○語学」という学問分野が、「語学」と混同されやすい（大手の書店の配架分類でも、似たような状況を目にすることがある）。

なぜ、このような言葉が使われるようになったのだろうか？

それは、（国立）大学の教養部で外国語を教えていた教員の劣等感に起因するのではないかと思われる。

かつて、教養部の教員は、専門教育を担当する学部の教員にくらべ、一段低く扱われていた。そして、その教養部の教員の中でも、外国語を担当する教員は、哲学や文学や数学などを担当する教員にくらべて、また一段低く見られていた。

「語学」という言葉は、外国語を担当する教員が、自らが教える分野を、「哲学」「文学」「数学」などに比肩しうる「○学」に見せようとして考えだした言葉ではなかろうか。そして、そのような言葉が、上述の混沌とした状態の原因の 1 つであるとしたら、迷惑なことである。

注

[1] mixi の機能のうち、最も特徴的だと思われるのは、「マイミクシィ」と呼ばれるものであるが、本稿の趣旨には関係しないので、省略する。興味のあるかたは、Wikipedia の「mixi」の項を参照していただきたい。

連絡先変更および会費支払いのお願い

会員各位へは既に BBS、メールマガジン等でお知らせしておりますが、連絡先変更届が無いため、事務局から連絡不能となっておられる会員の方が多数おられます。住所、メールアドレス等に変更があった場合は下記 URL より事務局宛にご一報ください。

◘ **会員資格変更フォーム**
http://jaet.gr.jp/JAET-BBS/change.html
※アクセスには漢情研 BBS の ID・パスワードが必要です。

また本会の運営は会費収入に依存しております。定期的な会費納入にご協力いただきますようお願い申し上げます。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

コラム

デジタル化が進む民国期刊行物
重慶図書館訪問記

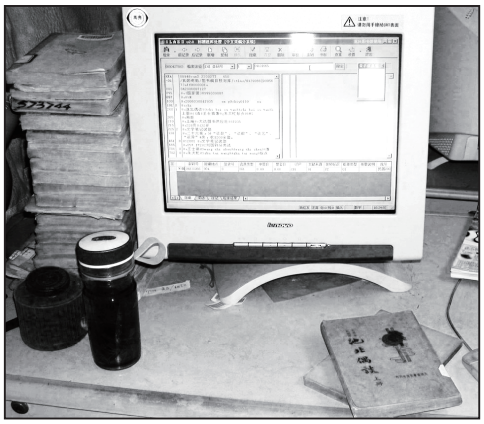
小川　利康（おがわ　としやす）

八月下旬、重慶を訪れた。最近は火鍋も有名だが、何よりも中国では三大「火炉」と呼ばれ、南京、武漢と並んで猛暑で有名な街だ。今年は特に土地の人たちも「五十年不遇」というほどの旱魃で、よほど予定をキャンセルしようと思ったが、「諸般の事情」で予定通り行ってきた。

滞在中、重慶市内は連日 40 度を超える猛暑で、ちょっと歩くだけでもドライヤーの熱風を浴びている心地だ。長江と嘉陵江との合流点を見物に行くと、子供達が岸辺で泳いで遊んでいる。仲間に入れる歳でもなし、こちらは汗をかきかき、用件を済ませたらホテルに戻るしかなかった。

そんな重慶でも意外な収穫があった。民国期の雑誌を見せてもらうために訪問した重慶図書館で面談した副館長宋継珍氏の説明によると、現在急ピッチで同館が所蔵する民国期の雑誌や単行本のデジタル化を進めている最中であるという。抗日戦争期、重慶は国民党支配地域の中心（いわゆる「大後方」）であっただけに、当時の雑誌資料を豊富に揃えているが、上記の通り、夏の高温多湿は言語を絶するため、紙の劣化が激しく、虫にも相当喰われ、開くだけでボロボロ崩れてしまう書籍も少なくない。このため 80 年代から空調を導入して保全に努めてきたそうだが、やはり劣化は止まらないため、昨年以来（単行本だけでなく、雑誌も含む）民国期図書の全デジタル化を進めており、2 年後の 2008 年に完成する予定だそうだ。

書誌情報入力作業中の端末



デジタル化の作業は概ね次のような手順で行われる。

1. 冊子すべてをスキャン、画像ファイル化。
2. 書誌情報のみをテキスト入力。

現在、画像として取り込む作業はかなり進捗しているが、目次も含む書誌情報の入力は OCR による自動処理が難しいため、担当者一人あたり 50 ～ 60 冊のペースで進めており、余り進んでいない。このため、近々作業する人数を増やしたいという説明だった。このデジタル化作業には国からも資金提供があったとのことで、恐らく今年の春先に出た国家図書館「十一五」計画なるものに連なるプロジェクトであろう。

完成した暁にはオンラインデータベースとして有料公開する予定だそうだ。たとえ有料であるとしても、民国期刊行物の相当の稀覯本も含め、（火炉の苦しみなしで！）入手できるというのは大いなる福音である。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

❖学術ソフト・製品

『中国基本古籍庫』
――世界最大の漢籍データベース――

二階堂　善弘

❑ 関西大学 CSAC におけるデータベース導入

2005 年度の文部科学省・私立大学学術フロンティア推進事業により、関西大学の東西学術研究所と文学部が主体となって、アジア文化交流研究センター（CSAC・センター長・松浦章教授）を設立、新たに千里キャンパスの以文館に増築を行い、研究活動を行うことになった。その活動の詳細については、CSAC のサイトをご参照いただきたい（**http://www.csac.kansai-u.ac.jp/**）。

センターの研究設備として、愛如生技術中心と北京大学の共同開発になる、現在世界最大の漢籍データベースである『中国基本古籍庫』（以下『基本古籍庫』と略）の「ダウンロード版」を導入し、活用している。この他にも、書同文開発の『四庫全書』、また愛如生の『四庫存目』も購入し、運用している。現在のところ、漢籍データベースについては日本でも有数の設備を保有していると言えるであろう。

これらのデータベースは、すべて Windows 2003 Server で動作させており、基本的に関西大学のネットワーク内であれば、どのパソコンからも利用できるものとなっている。但し、動かすにはクライアントソフトをインストールする必要がある。また Windows XP であることが望ましい。さらに、一度に使用可能なユーザ数は 5 ユーザに限られている。

❑ 『基本古籍庫』の特色

『基本古籍庫』は中国の古典データを網羅的に整理してテキスト化を行ったもので、収録される古典籍は 1 万種、文字数は約 20 億字とされる。実に『四庫全書』の数倍のデータ量を誇る。

使用できる機能によって、「スタンドアロン版」「ネットワーク版」「ダウンロード版」の 3 種がある。このうちダウンロード版はすべてのデータの検索と閲覧、版本画像の閲覧、さらにテキストデータのコピーが可能である。他の 2 つは、幾つかの機能に制限がある。

『四庫全書』の場合、よく問題になったのはその版本についてであろう。古典籍を網羅するとはいえ、その依拠する版に問題ありとはしばしば言われることであった。そのためデータベースとしては『四部叢刊』を使用される向きも多かった。ただ、こちらはデータ量が 1 億字とやや少ない。

さらに、『四部叢刊』『四庫全書』双方に言えることであるが、収録されているテキストは伝統的な古典文献であり、経学や史学に関してはかなりカバーされているものの、戯曲小説や宗教文献といった方面については、ほとんど収録されていないというアンバランス

『中国基本古籍庫』の起動画面

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

「紀事本末類」を開いたところ

さがあった。

こういった問題について、『基本古籍庫』はよくその欠を補っている。版本については必ずしも最良とは言えぬものの、依拠されることの多い版の画像を収録し、テキスト化している。重要な文献については、複数の版本の画像を比較できるようになっている。例えば『大戴礼』においては、元の至正刻本と明版の2種を収録しており、『毛詩要義』であれば、宋の淳祐刻本と清鈔本を収録する。そして宋元の版本を可能な限り集めているのが特色である。また戯曲や小説についても幅広く収集されており、例えば『孤本元明雜劇』所収の脈望館鈔校本雜劇がすべてテキスト化されている。なお、これらのテキストデータについては、句点は施されていない。

このような膨大なデータ量を持つものであるために、現在のところ筆者も使いこなせていないのが現状である。またネットワークの整備も併せて、かなりシステムを構築するには困難があり、かなりの時間をかけて導入を行わねばならなかった。しかし、現在20億字のデータが瞬時に検索でき、またわざわざコピーや影印本を探しに図書館へ行く手間を考えると、その有用さは恐ろしいほど痛感できる。一方で、これが当たり前となってしまうと、今後は版本を探し、資料を集めるという作業を、どう学生に伝えていったらよいのか困ったと思う面もある。

しかし、よかれあしかれこのデータベースの存在は大きなものがある。むろん高価であるため、すべての研究機関が導入するわけにはいかないであろうが、アジア学・中国学に力を入れる大学や図書館においては、是非導入していただきたいと希望するものである。

❑ 『基本古籍庫』検索の実際

ただ、実のところ『基本古籍庫』のクライアントシステムは非常に使いにくい。Webクライアントで使えるようになっていればよいのだが、そうではない。まるで一昔前のDOSのソフトのようである。その点では、『四庫全書』とも似ている。しかし『四庫全書』よりさらに使いにくい。一般向けのソフトではないから、仕方のない面もあろうが、今後の改良を望むものである。

クライアントソフトを立ち上げると、説明が出て、それから検索画面に移行する。メニューには「分類検索」「条目検索」「全文検索」と「閲覧履歴」「版本速査」「ヘルプ」の画面となる。

このうちある特定の書物を閲覧したいなら、「分類検索」を押して「哲学類」「宗教類」といった分野からその本を探すとよい。「条目検索」であれば、書名や篇名による検索が可能となる。

ただ恐らく一番使うのは「全文検索」であろう。ここでは、特定の語句を入れて検索を行う。ただ、データ量が膨大なだけに、迂闊に語句を入れると、数千に及ぶ用例が出てきて、確認しきれない。そのため、この「全文検索」には「時代」や「作者」などを絞り込む機能がある。宋代ならば宋代だけの用例、哲学類なら哲学類だけの用例を指定して検索すればよい。

なお、実際に使用した方から、台湾中央研究院（http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/）の漢籍データとは結果が違うという意見を伺った。そこで『史記』の中から、「淮陰侯」や「項籍」などの語句を選んで検索結果を比較してみた。この場合、書名を「史記」にし、作者を「司馬遷」とした。さもないと、他の『史記』注釈書も引かれてきてしまうのである。その結果、なるほどヒット数には若干の違いが出た。

ただ、用例を詳細に見てみると、中央研究院では注釈が外に出ているため、別扱いで1件ヒットがカウントされているのに対し、『基本古籍庫』では、注釈が割注の形で入っており、実は同じものであった。また同一の箇所に記されているものの数え方が違ってい

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

たりといった形で、結局のところ、検索結果は双方ともそう変わらないものであった。ただ、年表に関しては中央研究院の方が丹念に検索できていた。版本の相違によるものもあろう。『二十五史』については、中華書局本を使う中央研究院の方がやはり強みを発揮するものと思われる。

ある意味、このような一般的な典籍の検索には『基本古籍庫』は向かない。もっと大量の用例の検索、または目睹しにくい文献の調査にこそ使うべきであろう。

例えば、筆者の調査している民間信仰の事例であるが、「招宝七郎」を検索したところ、『水滸伝』以外の用例が思いもよらぬ所から検索できた。恐らく、通常に文献を調べていただけでは見つけることはできなかったであろう。

このように検索された語句は反転して表示される。なお、この箇所のテキストデータをコピーするには、「導出編緝」の箇所をクリックする。

これは「招宝七郎」で検索しているが、実際には「招寶七郎」も「招宝七郎」も同時に出てくる。すなわち、異体字の処理を自動的に行っているのである。ただ、逆に多くの異体字で記されているデータも検索されてくるため、データ量がいたずらに増える場合もある。使用時には気をつけていただきたい。

『史記』について「項籍」を使って検索

どんな研究上のツールもそうであるが、無視することも、過大評価も禁物である。ただ、このような強力なツールが存在する以上、研究者たるもの、それなりに使いこなしていく技量が求められよう。それは辞書や索引を使いこなすのと、そう意義が変わるわけではない。しかしこの用例の多さは、ある意味暴力的であるとも言える。

なお関西大学 CSAC に設置してあるパソコンにはすべてクライアントソフトがセットされており、どのパソコンからも検索できる。可能な限り、他の研究機関の方にも使用していただきたいし、また今後ともセミナーなどを逐次開催する予定である。

❑ 『基本古籍庫』の意義

もとより、これを使用したからと言ってすべての問題が解決するわけではない。道教や仏教のデータの充実度はいまひとつである。その他ここでは挙げなかったが、欠点はいろいろある。

しかし、20 億字のデータを一瞬のうちに検索し、全く想定していなかった用例が検索されていくのを目にした自分にとっては、漢籍データベースというものが、一つの転機を迎えたものとの感慨を抱く。別に必ずしも使う必要があるわけではないが、その使い方によっては比類無き威力を発揮する道具となろう。現に、関西大学の大学院生には、この道具を実に上手く使いこなし、想像以上の結果を提示する者も出てきた。

「招宝七郎」を検索

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

書評

『文字符号の歴史──欧米と日本編』 安岡孝一・安岡素子著

共立出版　2006 年 2 月　ISBN4-320-12102-3　6,000 円＋税

師　茂樹

❑ 待ちに待った「続編」の刊行

2002 年に出版された三上喜貴『文字符号の歴史 アジア編』（ISBN4-320-12040-X）[1] に遅れること 4 年、ついに待ちに待った安岡夫妻による続編（もしくは姉妹編）を手に取ることができた。

これまで断片的に聞いていた話が、このようにまとまった形で読めることになって非常にうれしい。目次は以下の通りである。

1 章　電信符号の歴史
1.1　モールス符号の変遷
1.1.1　アメリカにおけるモールス符号
1.1.2　ヨーロッパにおけるモールス符号
1.1.3　日本におけるモールス符号
1.2　印刷電信機とその符号
1.2.1　Hughes の印刷電信機
1.2.2　Baudot の印刷電信機
1.2.3　Murray の印刷電信機
1.2.4　Siemens-Halske 社の高速電信機
1.2.5　和文印刷電信機
1.3　国際電信アルファベットと CCIT
1.3.1　Booth の国際 5 ビット符号提案
1.3.2　第 1 回 CCIT
1.3.3　国際電信アルファベットの誕生
1.3.4　テレックスと ITA2
2 章　カナ符号から漢字符号へ
2.1　電信符号の発展
2.1.1　黒沢商店の和欧文印刷電信機
2.1.2　漢文カナ電報符号
2.1.3　中川機械の邦文モノタイプ
2.1.4　新興製作所の和欧文印刷電信機
2.1.5　テレックス開始
2.1.6　コード会のコード
2.1.7　漢字テレタイプと CO.-59
2.1.8　JIS C 0803 の制定
2.2　ASCII と ISO R 646 と JIS C 6220
2.2.1　ASCII の誕生
2.2.2　ISO/TC97 への日本の参加
2.2.3　CCITT/GM ALP の発足と ASCII の改正
2.2.4　ISO R 646 の完成
2.2.5　ISO R 646 の 8 ビット拡張
2.2.6　ITA5 と ISO 646 と ISO 2022
2.3　JIS 情報交換用漢字符号系の成立
2.3.1　JICST 漢字コード
2.3.2　富士通の FACOM 6801A
2.3.3　NDL-70 漢字コード
2.3.4　IBM 漢字情報処理システム
2.3.5　標準コード用漢字表（試案）と行政情報処理用基本漢字
2.3.6　JIS C 6226 の制定
3 章　国際符号化文字集合への道
3.1　文字符号の乱立
3.1.1　日立の JIS C 6226 準拠符号
3.1.2　東芝の JIS C 6226 準拠符号
3.1.3　富士通の JIS C 6226 準拠符号
3.1.4　日本電気の JIS C 6226 準拠符号
3.1.5　三菱電機の JIS C 6226 準拠符号
3.1.6　CO-77
3.1.7　MS 漢字コード
3.1.8　JIS C 6226 の 1983 年改正
3.1.9　日本語 EUC
3.1.10 JUNET コード
3.1.11 JIS X 0212
3.2　国際符号化文字集合
3.2.1　ISO 6937/2 と CCITT Recommendation S.61
3.2.2　ISO 8859-1 と ECMA-94 と ANSI X3.134.2
3.2.3　DIS 10646 第 1 版

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

3.2.4 Unicode の開発
3.2.5 DIS 10646 と Unicode の一本化
3.2.6 DIS 10646 第 2 版
3.2.7 ISO/IEC 10646-1 の制定
3.3 国内要求と国際化の間で
3.3.1 EUC-JP
3.3.2 ISO-2022-JP
3.3.3 UTF-8
3.3.4 UTF-16
3.3.5 Adobe-Japan1-0
3.3.6 KS C 5700 とハングルの移動と CJK 統合漢字拡張 A
3.3.7 JIS X 0213

❏ 厳密な方法による文字コードの歴史

内容は上の目次を見ればわかる通り、文字コードの歴史を、電信機の頃から 20 世紀まで、ほぼ通史的に書いたものである。「欧米と日本編」と言いつつ旧ソ連を中心とした東欧圏については記述が乏しい（今後、続編ないし増補されていくものと期待している）ものの、従来これまで広範に述べられたものはなく、それだけでも大変価値のあるものである。

しかし、類似の諸本とは決定的に異なるのは、その実証主義的な厳密さである。「はじめに」に、

> 文字符号の成立過程やその内容に関しては、伝聞や根拠のない憶測はいっさい避け、あくまで文献によって裏づけのとれる事柄だけを、参考とした文献とともに示した。文献学や科学史研究においては、ごくあたりまえとされていることを、あたりまえにやっただけである。

とあるが、文字コードやその周辺技術に関して未だにゴシップまがいの不正確な発言が繰り返されている（実はこれはこれで、社会言語学的に興味深いネタだったりするわけだが、それはともかく）現状に対する、強烈なカウンターパンチであろう。安岡孝一氏は現在、QWERTY キーボードの起源についての「タイプライターの故障を減らすために打鍵スピードを遅くしようとして打ちにくい配列にしたのが普及した」という通説に対し、アメリカの資料を駆使した反論を行っているが [2]、これも本書の問題意識の延長線上にあるものであろう。

それと同時に、以下のような発言は、なかなか刺激的である。

> なお、私たち夫婦としては、この本を入門書のつもりで書いた。すなわち、文字符号の歴史に関する入門書であり、基礎資料となるものをめざした。したがって、読者諸氏は、けっしてこの本の内容を鵜呑みにせず、あるいはこの本の記述を孫引きしないようにされたい。この本の内容は、文字符号の歴史の一断面にすぎないし、また文字符号を論ずる際には、当時の文献の参照は必須だからである。

もちろんこの発言は、本書を参照してはならないという意味ではない（そのようなことを言うのであれば、本書を出版する意味がない）。ましてや、先行研究を軽んじているというわけでもない。むしろ、本書でなされているように、まだ発掘されていない資料を探し出し、資料批判をした上で、批判的に研究を積み重ねていく必要性を訴えているのである。氏の言うように歴史研究という視点で見れば当たり前の話であるが、二次資料や有名な資料、入手しやすい資料ばかりで議論がなされていた従来の「研究」動向からの転換を強く主張しているのである。

❏ 歴史観の提示に期待

ところで、手前味噌になるが、2004 年 6 月、評者（師）の所属する花園大学が主催したシンポジウム [3] で、安岡孝一氏に講演を依頼したことがある。氏は「紙テープの呪縛」[4] という題で、電信機をはじめとする紙テープ時代の技術こそが現在の文字処理、テキスト処理技術に先行し、考え方を支配し続けていることを、本書と同じように多くの資料を駆使して論証した。そして最後に、XHTML のルビタグについて言及した上で、次のように述べている。

> XHTML における ruby タグは、その手法の一つと言えるだろう。しかし、なぜわざわざ 1 次元に押し込まなければならないのだろう。このような構造はコンピュータ上では、むしろ「linked list」を使って表現する方が、情報科学

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

の思想に合致しているのではないだろうか。

現実のテキストには、ルビ以外にも、割注や脚注、図表やノンブルなど、さまざまな要素が含まれている。これらに対するコンピュータ上での表現は、それぞれ要素の目的に合致したものであるべきだろう。ところが、現代のテキスト情報処理の動向は、要素の目的や処理しやすさなど二の次で、闇雲に 1 次元に押し込めようとする強迫観念が働いているかのようである。紙テープの呪いが、我々を今も縛りつけているのだろう。

全体からすると短いコメントではあったが、これを聞いたとき評者は、「安岡史観」とでも言うべきものの萌芽を目の当たりにしたような気がして、感動した記憶がある。

しかし、残念ながら、本書にはそのような歴史観が見出せるかと言えば、全体に充満する「匂い」のようなものは感じ取れるものの、はっきりとした歴史観を表明している部分はないというのが正直な感想である。これは本書がまだ参照すべき資料を網羅しきれていない研究途中のものである、という安岡夫妻のゴール設定の高さから来るものなのかもしれない。しかし、安岡史観の萌芽にわくわくした評者としては、是非本書の蓄積をふまえた、より発展した歴史観の提示を期待したいのである。

注

[1] 本誌第 3 号の書評も参照されたい。

[2] 安岡孝一「QWERTY 配列再考」（『情報管理』Vol.48, No.2、2005 年 5 月）などの論文や、安岡氏のブログ（http://slashdot.jp/~yasuoka/journal/、http://yasuoka.blogspot.com/）を参照。

[3] シンポジウム「文字情報処理のフロンティア：過去・現在・未来」（2004 年 6 月 9 日、於キャンパスプラザ京都、http://kura.hanazono.ac.jp/kanji/20040609symposium.html）

[4] http://kura.hanazono.ac.jp/paper/20040609yasuoka.pdf

『これからホームページをつくる研究者のために』
ウェブから学術情報を発信する実践ガイド　岡本　真　著

築地書館　2006 年 8 月　ISBN4-8067-1355-X　2,800 円＋税　山田　崇仁

❑ はじめに

評者が Web サイトを開設してはや 10 年近くになる。当時は、丁度個人 Web サイトの公開が盛んになりつつあった時期だったと記憶している。

評者の Web サイト構築は、あくまで個人の趣味から始まったものなので、趣味の領域内やマニュアル的な要素については、その時々の要求に応じてページを増加するだけでよかった。しかし、サイト公開から長い間経っているにもかかわらず、自分の専門分野（一応、中国先秦史という事になっている）に特化したコンテンツは殆ど公開していない。

ひるがえって、自分が調べものをする際の優先順位を考えてみるとしていて、「とりあえず Web から調べる」というスタンスが当たり前になっていることに気がつく。となると、当然評者の専門分野に関しても、同様の行為を行っている人がいることを考えなければならない。そう思うと、自分の専門を踏まえたコンテンツ構築の必要性に迫られているという実感もある。

世の中の研究者と称される方々の中で、自分の専門分野向けのコンテンツを公開しておられる方もいる。そのようなサイト解説者には大変頭が下がる思いである。しかし、評者の関係する伝統中国学に関連した Web サイトの殆どは、趣味でやっておられる方々のそれであり、大学などの公的機関や専門の研究者が

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

公開しているものは少ない。いや、最近は受験者向けもあって大学の専攻の開設するWebサイト数は増えているのだが、その内容の多くは単なる自己紹介の域をでるものではなく、自己の学問分野を世界に発信！という意気込みの所は少ない。

やはり、これではいけない。いくら伝統中国学が超ロングテール状態にあるとは言っても、自らの生存をかけて情報発信する努力は怠ってはいけないのだ！

と、勇ましいことをいってはみたものの、さて、何をどう公開すればよいのだろう？　世の中にあまたWeb関連書はあれども、その多くはWebサイトやHTMLデザイン関連の書籍であり、コンテンツの構築方法についてのものではない。

われわれはある分野の専門家ではあるが、Webコンテンツ構築や関連事象の専門家ではない。当然その辺りは素人なのである。では、どうしたらいいのだろうか？　そんなお嘆きの貴兄にこの一冊！　それが、ここで紹介する岡本氏の著作である。

❏　本書の内容

本書は、インターネットの学術利用をテーマとしたWebサイト「ACADEMIC RESOURCE GUIDE（**http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/**　略称：ARG）」を開設しておられる岡本真氏の著作である。

本サイトは、日本の学術目的で開設されているインターネットリソースを日々精力的に収集・公開している。おそらく、この手のサイトとしては日本最大の規模を誇るだろう。そのため、岡本氏は日本で一番この分野に精通している方と言っても過言ではない。

本書は、岡本氏がそのような経験の中から疑問としてわき上がってきた「研究者個人ホームページはなぜふえないのだろう」という問題意識を解決するための指南書として、これからWebサイトを開設したい専門家向けに書かれている。

本書の内容は以下の三部構成を取る。

- 第1部：個人ホームページを作る前に
- 第2部：個人ホームページを作る
- 第3部：個人ホームページを作った後に

見ての通り、極簡潔である。しかし、その内容は岡本氏の経験を踏まえて非常に充実している。まず、第1部で研究者の個人Webサイト構築と公開の必要性を、第2部では具体的なコンテンツ構築法を、第3部ではとりあえず作った後、さらにサイトを充実させるためのコツをそれぞれ説かれている。

本書のターゲットは、書名の通り「これからホームページをつくりたい研究者」である。しかし、実は初心者向けだけではない魅力がこの本にはあふれている。

例えば、それぞれの項目について、既存のWebサイトを取り上げながら紹介しているが、それらのサイトは、上述のように岡本氏自身の豊富な情報蓄積から厳選されたものであり、既にサイト持ちの方も「おお、こんなコンテンツの作り方もあるのか！」「これもコンテンツになるのか！」と、色々参考にすべき点が多いと思われる。評者も、日頃縁のない分野のWebサイトとそのコンテンツ構築方法から、なるほどと学ぶべき点が多いと感じた次第である。

さて、本書と他のWebサイト構築書との間には大きな違いがある。それは「Webデザインには殆どふれていない」点である。

本書に取り上げられているWebサイトの多くは、（なぜか取り上げられている評者のそれを含めて）お世辞にもおしゃれなデザインではない。しかし、それらのWebサイトは岡本氏の持っている情報から厳選されたものであり、内容の充実度は何れ劣らぬ代物である。そこからは岡本氏の「専門家のWebサイトは、コンテンツこそ命！」という主張が見て取れる[1]。そう、研究者とは、余人に代え難いオリジナルコンテンツの所有者であり、研究者が作るWebサイトは、コンテンツをどうWeb媒体に載せるかが肝要なのである。本書はそのためのナビゲート役なのである。

また、第3部第2章の「先行事例に学ぶ」は、コンテンツ構築の際に参考となろうし、付録「研究者個人ホームページの歴史」は、忘れ去られがちなWebサイトの歴史をまとめているという観点からも十分価値があるだろう。

また、本書のフォローとして、『これからホームページをつくる研究者のために』サポートブログ（http://d.hatena.ne.jp/arg_book/）が開設されている。上記ARGと併せてお読みいただきたい。

❏　おわりに

はじめに述べたように、日本では伝統中国学に関す

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

る研究機関からのインターネットを用いた情報発信が少ない。しかし、本場中国ではそうではない。筆者の守備範囲にかかっている戦国期の出土文字資料研究の一番活発な研究発表媒体は、簡帛研究（http://www.jianbo.org/）に代表される Web 媒体であり、それらは十分な学術的水準を保っているものもあり、そこでしか閲覧できない研究発表も多い。

では、日本ではどうして個人を含めた（当該分野）の Web サイトからの学術情報発信が増えないのか？それは結局、「Web に掲載した研究は正式な研究成果として認められていない」ためであると言えよう。「論文はきちんとした紙媒体のもので公表すべきものなのだ」という風潮や認識が変わらない限り、Web 情報の充実はいつまでたってもやってこないだろう。

また、人文系の研究者は、「完璧にできあがったものを掲載しなければ」という考えが強い様な気がする。それが「とりあえず掲載→機会がきたら書き直し。以下繰り返し…（永遠のベータ版）」という Web2.0 的な研究成果の公開手法になじまないのかもしれない。

しかし、これは一面的見方である。研究とは、常に改められ、更新され続けるものなのだ。今作った研究成果そのものに疑いを持ち、検討をし、更新する。そのサイクルが止まってしまえば研究は進まない。研究とはある意味「Web2.0」的でなければならないのだ。

この認識からすれば、更新しやすい Web 媒体での情報公開は、むしろ積極的に行うべきなのである。

注

[1] もっとも、岡本氏は決して Web デザインを軽視しているのではない。その部分は他の書籍なり Web サイトを見ればよいのである。

『Chinese Culture Review —中国文化総覧』 Vol.1 ～ 3

朱大可・張閎主編／高屋亜希・千田大介監訳

好文出版　2005 ～ 2006 年
vol.1 ISBN4-87220-096-9 ／ vol.2 ISBN4-87220-097-7 ／ vol.3 ISBN4-87220-107-8　2,800 円＋税

山田　崇仁

❏ 実は知らない「中国文化」

日本で「中国文化」といえば、儒教や唐詩などを思い浮かべられる方も多かろう。そう、日本人にとっての「中国文化」とは、かつての「からくに＝バーチャル中国」であり、決して現在のリアル中国ではないのだ。

ところが、大学などの研究機関で教授される「中国文化」は、あいかわらずこの「バーチャル中国」でしかない。そのため、評者のように「中国研究者」と名乗りながら「現代中国文化音痴」である人間が量産され、結果として永遠に「現在の中国文化」にたどり着けず、現実の中国理解からも遠ざかり続けるのである。

その「現代中国」といえば、前世紀末以来の急速な市場経済の展開によって、都市部を中心に急速に変化してきたことは承知の通りである。それに伴い都市文化も急激に変化し、インターネットの普及も相まって中国独自の大衆文化世界が形成されるようになった。

しかし、我が国でこれらの中国現代都市文化を対象とした、門外漢が気軽に読める紹介（分析）本は存在しなかった。そのようないわば「飢え」にも似た状況に慈雨となったのが朱大可・張閎主編の『21 世紀中国文化地図』（以下、本書と略）シリーズである。

本書は、時系列と分野別に現代中国文化を整理し批評を加え、また個別の項目は別個説明を立てるという至れり尽くせりの構成をとる。

しかし、その内容は単純な現代中国都市文化の紹介ではない。その記述には、主編者によるかなりな「バ

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

イアス」がかかっている。但し「バイアス」とは言っても、それは「ちょっとひねってあるな～」という意味でのそれである。それが本書の魅力にもなっている。

主編者は、何れも上海同済大学文化批評研究所に所属し、現代文化批評を主に手がけている。本書は、彼らの長年にわたる「今の中国（都市）文化に」対する観察と分析が、「網羅的かつ辛口に論評する」スタイルで盛り込まれたものである。その分析の確かさは、「中国のジャーナリスト必携の書籍」という評価に帰結しているのである。

❏ 「現代中国文化」そのものの体現

ここで紹介する『Chinese Culture Review —— 中国文化総覧』は、本書の「文化事件」「文化キーワード」部分を対象とした日本語訳である。全訳でないのが残念だが、日本語版独自の特徴があり、それが原著にはない魅力を出しているのである。

それは、翻訳対象としている「文化事件」「文化キーワード」が、出版された原著の翻訳ではなく、元原稿からの翻訳という点である。そのため、様々な事情[1]で削られてしまった項目が復活しているそうである。

原著と訳書との比較それ自体が、現代中国の文化事情の一端を浮かび上がらせる仕掛けにもなっている。加えて、現在日本語訳が刊行されている１～３巻の項目や内容を比較すると、自国文化に対する著者の有る意味屈折したスタンスも見えてくるだろう。本書の構成の変遷自体が、現代中国文化の一面を体現しているのである。

上述のように、本書は「辛口の批評」をモットーとする。「中国版悪魔の辞典」とでも言い換えられるだろうか（まあ、あそこまでブラックジョークではないが）。そのため読んでいて非常に「たのしい」のである。「たのしい」と言っても、その意味するところは色々あるだろうが、評者は読みながらついつい「にやり」としてしまうのである。

この「にやり感？」を現代中国語から日本語にどう翻訳するか？　それが一番難しかったと、監訳者の一人である千田大介氏から伺ったことがある。特に、インターネット関係のスラングを翻訳する際、用語の選択で悩んだとのこと。千田氏の blog「中華・電脳マキシマリズム（**http://www.wagang.jp/blog/**）」に紹介されている例からいくつか挙げてみた。

- 潜水：ROM（Read Only Member）
- 沙发：２ゲット
- 潜力贴（スレを伸ばす潜在力を持った良カキコ）：良スレの予感

訳者の翻訳のご苦労には頭が下がる思いだが、逆に言えば、（少なくとも本書で取り上げられている）中国のインターネットをはじめとする現代文化を理解するには、（これもある意味日本の現代都市文化と言える）２ちゃんねる用語などのインターネットスラングやそこで展開される独自の文化をある程度理解する必要がある事を示している。そのため、読み手によっては「日本語訳なのに言葉が理解できない」方がいるかもしれない。二重の意味で「読み手を試している本」ということができるだろう。

そういう意味で、本書は、筆者のような現代中国文化に疎い中国学研究者には必携の本である。単に自分で読んで「にやにや」しても「たのしめ」るし、授業のネタ元としてこれ以上に適切なものはない。

本書が役立つのは、何も研究者だけではない。孔子や李白といったバーチャル古代中国や、日本人から見た現代中国文化という視点ではなく、現代の今そこにあるという意味で「リアル」（書籍やインターネットを通して、という意味ではこちらもバーチャルだが）な中国文化を、中国人がどう捉えているかについて知るためにも、本書は一読されてしかるべきだろう。

読み方も、前から順に読み進めるのもよいが、適当にページを開く、あるいは「文化キーワード」だけをだらだらと読んでいてもおもしろい。個人的には「文化キーワード」を一読して、主編者がそれぞれの「文化キーワード」に対して与えている「バイアス」を理解し、そこから「文化事件」を読み進めるとより楽しめると思う（「文化事件」がこの「バイアス」を前提に書かれているためである）。

なお、現在監訳者は、第四巻の日本語訳を刊行すべく、準備を進めているとのことである。またこちらも楽しみにして待つことにしたい。

注

[1] 中国のメディアコントロールの実態については、何清漣／中川友：訳『中国の嘘―恐るべきメディア・コントロールの実態』扶桑社　2005 年が詳しい。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

漢字文献情報処理研究会彙報

2005.10～2006.9

2005 年 10 月 1 日
　会誌『漢字文献情報処理研究』第 6 号出版。
2005 年 10 月 19 日
　臨時企画　座談会「中易中標社の朱人傑氏を迎えて」開催。
2005 年 12 月 17 日
　第 8 回大会、2005 年度総会開催。
2006 年 7 月 22 日
　夏期公開講座「国際化時代のデータベースとコンプライアンス」開催。

第8回大会・2005年度総会

日時：2005 年 12 月 17 日 ㈯
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス　来往舎中会議室

■ 日本中国語 CAI 研究会・漢字文献情報処理研究会　合同企画：電子辞書座談会（13：00～14：30）

- 講師：木村一彦氏（セイコーインスツル株式会社パーソナル機器事業部）
- 司会：田邉鉄

■ 第 8 回大会（14:45 ～ 17:30）

1. JAET セッション：
漢字処理の新時代（14:45 ～ 16:15）
- CJKExtensionB フォントと検索・入力手段について　秋山陽一郎（京都大学人文科学研究所）
- Copyleft+font=Copylefont　上地宏一（慶應義塾大学大学院）
- 漢字・甲骨文字などに関する標準化の最新動向　川幡太一（NTT サイバーソリューション研究所）

2. ディスカッション（16:30 ～ 17:30）

■ 総会（17:30 ～ 18:00）

- 2005 年度事業報告、会計報告（会計監査：近藤泰弘・清水　哲郎）
- 執行部改選
  代表：師茂樹
  副代表（兼会誌編集局長）：山田崇仁
  副代表（兼サーバ管理担当）：上地宏一
  幹事（会計担当）：小島浩之
  幹事（名簿担当）：佐藤仁史
  幹事：田邉鉄
  幹事：千田大介
  幹事：二階堂善弘
- 「退会に関する内規」とそれに伴う会則の変更
- 2006 年度事業計画、予算案承認
- 新入会員勧誘・会誌販売促進のお願い

2005～2006年公開講座

■ 臨時企画

題目：座談会　中易中標社の朱人傑氏を迎えて
日時：2005 年 10 月 19 日 ㈬ 17：30 ～
会場：慶應義塾大学三田キャンパス　研究室棟 1 階　研究室会議室
講師：朱人傑（中易中標社）

■ 夏期公開講座

題目：国際化時代のデータベースとコンプライアンス
日時：2006 年 7 月 22 日 ㈯ 14：00 ～ 17：00
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎中会議室
講師：石岡克俊（慶應義塾大学産業研究所助教授）

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

著者紹介

石岡　克俊（いしおか　かつとし）

1970 年生まれ。慶應義塾大学産業研究所助教授。専攻は、経済法、知的財産権法、消費者法。著書に『著作物流通と独占禁止法』（慶應義塾大学出版会）、『白書出版産業――データとチャートで読む日本の出版』（共著・文化通信社）、『著作権の法と経済学』（共著・勁草書房）がある。著作物に関する再販売価格維持制度の研究を皮切りに、人間の知的・精神的活動の成果（著作物）と競争秩序との関係や、広く文化政策と市場のあり方、また政府の関わり方などについて関心を持っている。

内田　慶市（うちだ　けいいち）

1951 年福井市生。大阪市立大学大学院博士課程修了。博士（文学）。関西大学文学部教授。専門は中国語学、特に最近は近代東西言語文化接触研究。著書に『Mac で中国語』（共著）、『近代における東西言語文化接触の研究』（単著）などあり。

小川　利康（おがわ　としやす）

1963 年東京生まれ。早稲田大学商学部教授。専攻は現代中国文学。単著「映画『緑茶』を読む（上）」（『中国文学研究』31 号、早大中文学会）、「中国における日本の食文化」（『食の科学』339 号）。王延偉・小川利康『中国語ひらけばぺらぺら』（大和書房）、『中国語　たった 15 文型でしゃべっチャイニーズ』（講談社）。本業（周作人）は開店休業状態。

金子　眞也（かねこ　しんや）

1955 年東京都生まれ。龍谷大学法学部教授。中国語会話教科書（『上海びより』共著、好文出版刊）を出したり、現代中国研究のゼミを担当したりしているが、専門はあくまで中国古典。留学中のゼミ生と中国で乾杯するのが密かな楽しみ。

http://www.huaxia-info.com/sb/

上地　宏一（かみち　こういち）

1976 年大阪府生まれ。2001 年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。同博士課程在学中。慶應義塾大学・東京工科大学非常勤講師。二松学舎大学 21 世紀 COE 研究協力者。論文：「漢字フォント自動生成サーバ " 影 KAGE" の構築 －文字コードの枠組みを越える次世代漢字処理の提案－」（『漢字文献情報処理研究』第 3 号）。

http://fonts.jp/

清原　文代（きよはら　ふみよ）

1964 年大阪府生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。今年 4 月の合併により大阪女子大学人文社会学部講師から大阪府立大学総合教育研究機構講師に。専攻は中国古典文学のはずだったが、大学院を出てからやっていることはもっぱら中国語教育関係である。Web サイトは

http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/

小島　浩之（こじま　ひろゆき）

1971 年岐阜県生まれ。東京大学経済学部資料室助手。専門は東洋史学と図書館情報学。歴史史料としてのモノの保存について、歴史学、図書館学双方の立場から考え実践している。最近は思い出したように歴史学の研究も再開してきている。

清水　哲郎（しみず　てつろう）

1957 年生まれ。株式会社アスキーにてパソコン用およびゲーム機器用周辺機器の開発、中高校生向け携帯学習機の開発などを担当。その後、独立して、IT 分野のライターに。オフィス系ソフトや文字コードなどをフィールドとして、PC 雑誌・Web ページ・メールマガジン向けの記事、ソフトウェアのマニュアル、書籍などを執筆。2006 年より國學院大學にて情報リテラシーの講師を務める。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

田邉　鉄（たなべ　てつ）

1963 年京都府京都市生まれ。北海道大学情報基盤センター助教授。北海道に来てからは「中国現代小説文体論」はやらなくていい、と言われ、CALL 教材開発とマルチメディア論研究に勤しむ日々。今年度から某短大音楽科の授業（自動演奏とアニメーション）も担当することになり、ますます「ドサ度」があがりつつある。

千田　大介（ちだ　だいすけ）

1968 年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部助教授。専門は通俗歴史物語の変遷と受容。近頃は影絵人形劇やネット文化とそれに関連する現代文化も扱うが、それも物語受容研究の一部なのであろう。近頃、監訳・DTP した『Chinese Culture Review』1 ～ 3 を好文出版より出版。

http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/

當山　日出夫（とうやま　ひでお）

1955 年生。慶應義塾大学文学部・大学院修士課程修了。専攻は、日本語学（訓点語学・文字論）。『神田本白氏文集』漢字索引・訓読文索引を作成の後、『和漢朗詠集漢字索引』をパソコンのみによって作成し、この種の分野におけるパソコン利用の嚆矢となる。古典籍のコンピュータ処理を基盤に、JIS 漢字にかんする論文執筆、研究発表などを行う。「JIS X 0213:2000」の制定に関与。花園大学・立命館大学・帝塚山学院大学、非常勤講師。

中川　諭（なかがわ　さとし）

1964 年福岡県生まれ。大東文化大学文学部助教授。東北大学大学院文学研究科修了、博士（文学）。東北大学文学部助手、新潟大学教育人間科学部助教授を経て、2005 年 4 月より現職。専門は、『三国志演義』を中心とした中国古典小説。著書に、『「三国志演義」版本の研究』・『三国志平話』（二階堂善弘氏と共訳注）など。

二階堂　善弘（にかいどう　よしひろ）

1962 年東京の下町生まれ。東洋大学文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、博士（文学）。但し、その間は大学院と会社を行き来し、貿易事務やシステムエンジニアなども経験。東北大学大学院助手・茨城大学人文学部助教授を経て、現在、関西大学文学部教授。専門は中国の民間信仰研究で、著書に『封神演義の世界』（大修館書店）や『中国の神さま』（平凡社新書）などがある。実はベース弾きで、ギャルゲーおたくである。
サイトは「電気漢文箱」
http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nikaido/

藤原　敦（ふじわら　あつし）

1980 年東京生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻博士後期課程在学中。専攻は中国禅宗史のはず。最近は仏教学と情報学の融合を模索し、知識の集約・伝播媒体としての Wikipedia を分析中。

町　泉寿郎（まち　せんじゅろう）

1969 年石川県生まれ。1997 年二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。同年北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部研究員（～2000）。1999 年博士（文学）。2004 年二松学舎大学東アジア学術総合研究所専任講師（～現在）。専攻分野は、江戸～明治期の漢文学。主な研究業績、論文：「医学館の軌跡」（『杏雨』7）、「服部宇之吉述・柿村重松筆記『目録学』」（『日本文学の創造と展開・近現代篇』）、「吉益家門人録の考察」（『日本医史学雑誌』47）、「三島中洲と東京大学古典講習科の人々」（『三島中洲の学芸とその生涯』）、「山脇東洋と徂徠学派」（『日本中国学会報』50）、「小島宝素・海保漁村の天保十三年の京都訪書行」（『東方学』96）「香川修庵の「儒医一本」の儒について」（『日本医史学雑誌』44）、「伊沢柏軒書簡（嘉永元年二月二十九日）の周囲」（『季刊文学』7 (3)）、研究報告書：『江戸漢学書目』『江戸明治漢詩文書目』『（倉石武四郎講義）本邦における支那学の発達』など。

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

師　茂樹（もろ　しげき）

1972 年生まれ。花園大学専任講師。最近、プロレス研究者になれないものだろうかと真剣に考えている。

http://moromoro.jp/

山崎　直樹（やまざき　なおき）

1962 年生まれ。大阪外国語大学外国語学部所属。専攻は，中国語学（とくに，中国語の談話の構造の研究）および中国語教育（とくに，日本語話者の中国語習得過程の研究）。電子媒体上の構造化テキスト（HTML/XML）を使って，あれこれ遊ぶのが趣味。

山田　崇仁（やまだ　たかひと）

1970 年、愛知県生まれ。立命館大学院文学研究科修了。博士（文学）。現職は京都大学人文科学研究所研究員（COE）、立命館大学非常勤講師。現在は先秦諸子百家文献の成書時期や地域を弁別する研究が主なテーマのはずだが、なぜか唐代の歴史（行政）地理関連情報を調査している時間の方が長い。

http://www.shuiren.org/

漢字文献情報処理研究会　入会のご案内

漢字文献情報処理研究会（略称：JAET）は、下記の活動目的に賛同し、大学院生以上の研究者、教育者、もしくは本会と関連する業務・活動に携わる社会人であれば入会することができます。

- **東洋学（日本・中国・韓国など）分野におけるコンピュータ利用方法の研究・紹介および関連情報の交換**
- **研究・教育現場でのコンピュータ活用・普及の促進**
- **関連諸分野の人材交流**
- **海外における同種の学会、プロジェクトとの積極的な交流・協同活動**

会員には

- **一般会員（BBS 利用＋『漢情研』購読）：年会費 3000 円**
- **BBS 会員（BBS 利用のみ）：年会費 1000 円**

があり、どちらか一方を選択できます。『漢字文献情報処理研究』を定期購読されるならば一般会員が便利です。

入会は下記 URL から手続きできます

http://www.jaet.gr.jp/guiding.html

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。

このPDFファイルは『漢字文献情報処理研究』第7号の抜粋です（漢字文献情報処理研究会発行）。

編集後記

『漢字文献情報処理研究』第７号をお届けする。

本誌の執筆陣は、毎回締め切りギリギリまで新情報を盛り込むべく努力している。特に今年は、Web2.0 的なインターネットサービスの展開と、Windows VISTA, Office 2007 関連情報が特にこの傾向を顕著にしたような気がする。

このような編集状況になる理由は、本誌が年一回の発行であるのが大きな理由である。1 年という時間は、人文系では決して長いスパンではないが、IT 業界では 1 年前の情報が陳腐化する恐れが常に存在するからである。

そのおかげで、毎年編集締め切り直前に新情報が飛び込んできて、原稿を大幅に書き直したりすることもある。それでも、期日通りに刊行できるのは、DTP による編集作業の迅速化に他ならない。本誌もまた、IT 社会の進歩に恩恵を受けているのである。

閑話休題。昨今の Web2.0 的なサービスの変化は、この業界にも多大な影響を与えるはずである。特に Google の繰り出す新サービスは、研究方法・研究評価・図書館との関係などを大きく替えるだろう。また、Wikipedia に中国学界がどう関わるべきか、人文系の情報教育はどうあるべきか、それについても考えさせられた。読者諸賢には本誌の関連論攷を是非御一読いただきたい。

本誌の刊行は、好文出版の尾方社長を始め、日本中国語 CAI 研究会、さらには漢情研会員各位や原稿執筆陣からの有形無形の援助のたまものである。

末筆ではあるが、篤く御礼申し上げたい。（♬）

漢字文献情報處理研究　第７号

発行日	2006 年 10 月 1 日
定価	本体 2,000 円＋税
編集	© 漢字文献情報処理研究会 http://www.jaet.gr.jp/
編集委員	○山田　崇仁　小川　利康（CAI） 金子　真也（CAI）　上地　宏一 小島　浩之　佐藤　仁史 田邊　鉄（CAI）　千田　大介 二階堂善弘　師　茂樹 山崎　直樹（CAI）
デザイン DTP	睡人亭：http://www.shuiren.org/
発行人	尾方敏裕
発行所	株式会社好文出版 〒 162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 540 林ビル 3F TEL:03-5273-2739 FAX:03-5273-2740 URL:http://www.kohbun.co.jp/

⦿本誌に関する訂正・補足情報は、漢字文献情報処理研究会サイト（http://www.jaet.gr.jp/）に掲載します。

⦿本誌の定期購読をご希望の方は、以下の項目につき明記の上、好文出版まで、書面・FAX もしくは電話にてお申し込みください（住所・FAX・電話は上記奥付参照）。

●送付先住所　●氏名　●年齢　●職業
●勤務先　●必要部数

⦿漢字文献情報処理研究会への入会をご希望の方は、http://www.jaet.gr.jp/guiding.html の趣意書および規約をよくお読みの上、同ページにリンクが掲載されている入会フォームよりお申し込みください。書面での申し込みは受け付けておりません。

9784872201086
ISBN4-87220-108-6
C3004 ¥2000E
1923004020005

一次配布元はhttp://jaet.gr.jp/jj/になります。
当ファイルは閲覧・印刷が許可されていますが、加工や二次配布は禁止されています。